教職大学院 Newsletter No.198

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since 2008.4　2025.8.21（公開版）

研修を変える、学校を変える、未来につなぐ
―福井大学連合教職大学院との連携による実践―

板橋区教育支援センター所長　石野良惠

福井大学連合教職大学院の皆様には、日頃より板橋区の教育行政への深いご理解と温かなご支援をいただき、心より感謝申し上げます。

福井大学連合教職大学院と板橋区教育委員会との連携は、平成 23 年度に中学校における教科センター方式の運営に向け、大学院へ教員を派遣したことに端を発します。平成 26 年度には板橋区教育委員会と正式に協定を締結し、大学院での学びや研究の成果を校内研究に還元しながら、授業改善や学校運営の在り方について深く取り組んでまいりました。

教科センター方式の実現には、単に授業技術の向上だけでなく、教員の意識改革が重要になり、学校全体の運営を見据えた視点が不可欠です。その点においても、大学院の先生方からの丁寧なご助言をいただきながら、着実に歩みを進め、現在では区内 3 校がこの方式を導入し、主体的に学習に取り組む生徒の育成に向けて研究を推進しています。

私自身の大学院との出会いは、平成 27 年度に開設された教育支援センターの立ち上げに係長として従事していた時にさかのぼります。教育支援センターは、教職員の研修、研究、教育相談機能を有した施設として準備を進め、先行した研究として、教科センター方式の中学校でタブレット端末を活用した授業研究に取り組み、大学院に派遣されていた教員が実践する授業を見学しました。オープンスペースを活用しながら、生徒たちがペアになって話し合いタブレットで課題に取り組む姿は、まさに「アクティブラーニング」という言葉がこれから広がっていこうとする時期にあって、極めて先進的な授業でした。私にとってその光景はとても衝撃で、自分が受けてきた一斉講義型の授業とはまったく異なり、子どもたちの目は輝き、楽しみながら、そして真剣に学びに向かっているその姿から、「学ぶことって、こんなに楽しくていいんだ」と心から感じたのを今でも鮮明に覚えています。

教育支援センターは、開設と同時に福井大学連合教職大学院の東京サテライトのカンファレンスの場として多くの学びと交流の場となりました。私はその後、わずか 1 年で異動となりましたが、7 年の時を経て、今度はセンター所長として戻ってくることになり、一生懸命に立ち上げた場所で、再び新たな挑戦ができることに大きな喜びと責任を感じています。

所長として着任して以降、教育支援センターのこれまでの歩みを大切にしながら、時代の変化や学校現場のニーズに応じて対応してきたところです。福

内容

巻頭言 (1)
院生自己紹介 (3)
インターンシップ/週間カンファレンス報告 (23)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより (28)
7 月ラウンドテーブル報告 (35)
7 月月間合同カンファレンス報告 (60)
事務連絡 (68)

井大学教職大学院と平成26年度に締結した協定についても、一定の役割を終えた項目などを整理し、教職員の更なる資質向上をめざして「教職員研修の充実」を新たな柱として、令和６年１０月１日に協定を再締結する運びとなりました。

その「教職員の研修」において、教育支援センターでは開設以来、少しずつ研修体系を整えてきましたが、働き方改革の進展や社会の変化のスピードを踏まえる中で、いくつもの課題が見えてきました。研修回数、教育委員会主導の研修により教員の主体性は失っていないか、変化する学校現場のニーズに即しているか、そうした問いに向き合いながら、令和７年度の研修について、研究科長木村優教授、副研究科長の清川亨教授にお越しいただき、多くのご助言をいただき進めてまいりました。

今回の見直しにおいて象徴的な取り組みが「ペア研修」の導入です。この手法は、ご助言をもとに実現したもので、異なる立場の教職員がペアで研修に参加することで、校内の推進体制の強化に活かせるような研修としました。なかでも、「研究主任と管理職」によるペア研修については、清川亨教授に講師としてもお越しいただきました。当初は「管理職と研究主任がともに学ぶ」ことに対して戸惑いの声もありましたが、講義後には、「学校の成果や課題を客観的に見つめ直す良い機会となった」「研究主任の率直な考えを共有し、学校の方向性を確認できた」といった肯定的な声が多数寄せられ、校内実践への期待が高まりました。

また、見直しにあたり大切にした、「子どもの学びと教職員の学びは相似形である」という視点です。子どもに対して、主体的に学び、自ら問いを立て、他者と協力しながら深く学ぶ力を育てようとしています。子どもが自己選択・自己決定・自己調整できる学びです。そのため、教職員もまた、変化に前向きに向き合い、探究心をもって自律的に学び続ける存在でなければなりません。教職員自ら学びの姿勢を持ち続けてこそ、子どもたちに本物の学びの姿を見せることができると考えています。

今回の研修体系の見直しを通じて、教職員一人ひとりの成長が子どもたちの学びにつながる、そんな好循環を生み出していきたいと願っています。その実現のためには、まだまだ解決すべき課題も多くありますが、現場の声と実践に寄り添いながら、今後も福井大学教職大学院との連携のもとで、研修の在り方を探究してまいりたいと思います。引き続きのご助言、ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

院生自己紹介

学校改革マネジメントコース１年／滋賀県草津市立玉川こども園

中川　珠紀（なかがわ　たまき）

はじめまして。今年度より福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました中川珠紀です。よろしくお願いします。

私は、草津市の幼稚園教諭として採用され、今年で３６年目となりました。これまで多くの子どもたちや保護者と関わりながら、学びと喜び、そして時には悩みや葛藤を味わいながら歩んできました。

採用当初は、自分が担任として学級を受けもつことに不安や戸惑いがありました。「自分が保育をして本当にいいのだろうか」と感じていたのを覚えています。しかし、日々の実践を通して少しずつ子どもとの信頼関係が築かれ、保護者の方から「先生に担任してもらえると安心です」と言っていただいたことが、大きな励みとなりました。時間がかかっても、丁寧に関わることの大切さを学び、子どもの姿から多くを教えてもらった日々だったと思います。

２０１９年度からは園長職として、園全体を見渡す立場になり、「保育者の育成」や「園運営の質向上」に取り組むようになりました。この頃から、子ども子育て支援法や施設型給付制度、施設整備の補助制度など、新たな制度との向き合いも始まりました。とくに「質の高い保育の実現」を制度的な視点からどう支えていけるのかを模索し、研修会や研究会の参加、関係機関との連携を深めることに力を注いできました。また、園長として保育の方向性を打ち出しながら、職員の専門性の向上とチーム保育の推進にも努めてきました。

２０２２年度からは、新たにこども園として再編成された園に異動し、勤務して４年目になります。この園は、かつての私が幼稚園の主任として勤めていた場所でもあり、再びこの園で勤務となったことに不思議なご縁を感じています。本園は、３歳児から５歳児までの子どもを対象とした保育・教育が一体となった制度に変わり、職員構成や業務内容も大きく変化しました。年齢の幅が広がることで保育内容も多様化し、保護者支援の在り方も一層重要になってきたと感じています。

また、園が位置する地域は、住宅地と都市部が混在するような環境にあり、都心に通勤する家庭や遠方から引っ越してきた家庭も多く、保護者のニーズやライフスタイルにも変化が見られます。社会の変化や子育て支援の不足から、保護者の不安や孤立感も表面化しやすくなっています。そうした中で、子どもたちが安心して遊び、生活できる環境を整えるとともに、保護者との信頼関係を大切にする園運営を心がけています。

保育においては、子どもと保護者、そして地域の三者がつながることが重要だと感じています。特に地域の方との関わりを通して、子どもたちが人とのつながりや温かさを体感できるようにしたいと考え、地域ボランティアとの活動や行事への参加なども積極的に進めてきました。園を拠点に、子ども、保護者、地域の三者が相互に育ちあえるような「場」を創ることをめざしています。

教職大学院では、保育の現場での経験を理論的に深め、子どもだけでなく保護者や地域との関わり、そして組織づくりの面にも視野を広げていきたいと考えています。特に、現場に根差したリーダーシップや、組織マネジメントの視点、そして保育の専門性を高めるカリキュラムマネジメントの在り方について学び、実践へとつなげていきたいと考えています。また、職員間の連携の強化や保護者、地域との協働に向けた「学びの共同体」の構築、子どもの遊びを中心とした学びの保障について、実際の現場での課題と向き合いながら、より良い教育・保育の在り方を追求していきたいと思っています。

３６年の実践の中で感じてきた現場での課題や手応えを、理論と実践の両面から深めることで、今後も「より良い保育」の在り方について模索し、貢献していきたいと考えています。

学校改革マネジメントコース１年／立命館宇治中学校・高等学校/数学科教諭

酒井　淳平（さかい　じゅんぺい）

はじめまして。今年度より学校改革マネジメントコースに入学した酒井淳平と申します。京都にある立命館宇治中学校・高等学校で数学の教員をしています。校内ではキャリア教育や探究、教員研修などを担当しています。

教員になって25年以上たちました。京都に生まれ、ずっと京都の公立で育った自分ですが、卒業時に教員の採用がほとんどなく、拾ってくださったのが立命館で今に至ります。今、学校では教員のなり手がいなくて困っていますが、広き門であることに対してうらやましく感じるときもあります。

そんな自分ですが、立命館に就職したおかげで、よき先輩・同僚とも出会い、多くの方と出会って今があります。何もできなかった自分が今こうやって教員を続けていられるのは、同僚や先輩、そして学校外で出会ってくださったみなさんのおかげだと日々感じています。自分は運だけは強いみたいです。

現在の勤務校でキャリア教育部を立ち上げ、その後、総合的な探究の時間のカリキュラム開発をさせていただきました。そうした中で、福井大学の木村優先生や遠藤先生とも出会い、学びの場に自分や同僚と何度か参加しました。生徒が発表する機会をいただき、生徒と福井に来たこともありました。また中森先生には本校の教員研修にも来ていただきました。多くの方と出会い、教員生活が長くなる中で、「理論と実践の往還や省察からの学び」「実践の中の理論の生成」こそが大切だという思いが強くなり、これらを自らが体感したいと思うようになりました。こうしたことがあり福井大学の教職大学院に入学することを決意しました。ただ人との出会いがなければ入学はしていなかったことは間違いなく、「キャリアというものは偶然の要素によって左右されるものが多い」というクルンボルツ博士の言葉が頭をよぎります。

教員のキャリアがいまだに管理職か現場かなどの役職で語られがちな中、「自分は何がしたいのか、自分は何ができるのか」という問いへの答えが年々難しくなってきている自分にも気づきます。ただ、今まで人との出会いに恵まれたおかげで、やりたいことをやらせてもらってきたこと、自分のこれからを悩むことができるという状況があることはありがたいことだと思っています。今までいろんな方に育ててもらってきた自分ですが、これからは今の職場や教育の世界に対して少しでも恩送りができればという思いは強く持っています。

「福井大学教職大学院での学びが、これからの自分にも、これからの学校にも大切である」。入学を決めたときから、直感的にこのように思っていました。この直感が卒業時にはしっかり言語化できているような 2 年間になるのだろうと思っていますし、そうなるような 2 年間にしたいと思っています。

一回りくらい上の先輩に「結局教員生活も生徒の学校生活と同じやで」と言われました。入学（就職）があれば卒業（退職）があり、その途中で何をするのかは自分次第なのです。先輩には「文科省指定事業とか、研究授業とか、クラブ顧問とか、学校内外でのいろんな仕事とかあるけど、それってクラブで部長したり、クラスで文化祭実行委員したりするのとある意味同じで、思い出作りになるよ」とも言われました。「思い出作り」、20 代前半から歩み始めた教員という旅路で、いろんな思い出を作っていると思ったときに、道を自分で作っている感覚が持てました。この 2 年間でのいろいろな出会いが教員という自分の旅路をより豊かにしてくれるだろうと、入学して 3 か月しかたってない今でも既に感じています。そして原稿の中身を考えようと思っているときに、教え子と飲む機会がありました。立派に成長した教え子と

思い出を語り合えること、教員になったからこそできることだと改めて感じながら書きました。

2年間、いろんな場面でご一緒させていただくことがあると思います。これからよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース１年/岐阜市立加納西小学校

関　雅俊（せき　まさとし）

「担任がしたい」生徒指導主事を任され、初めて担任から離れたとき、そう思い続けていた。「子供たちと一緒に感動する時間共有したい」「自分の学級がないということがさみしい」そんなことばかり考えていた。当時の校長が「役が人を成長させる」とおっしゃたが、そのときは、未練が先行し、切り替えることができなかった。異動した先の学校では、教務主任となり、「担任がしたい」という思いは、叶うことがなかった。教職22年目となり、最近では、「担任の先生は、どのような取組をしているのか。」「どのようなことで困っているのか」と、見る視点が変化してきた。そう変化したのには、大学院へ行こうとする出来事がきっかけであった。

大学院へ行くきっかけ

私が、教務主任となった2年目の11月。4年生の学級で、担任と児童、保護者とがうまく関係を作ることができず、毎日のように生徒指導をすることとなった。またその学級の多くの児童が、保健室に身を置くこととなった。私も、その学級に入り、指導援助するのだが、担任の言葉に児童が反発し、朝から帰りまで、生徒指導を繰り返す毎日であった。保護者も担任を批判し、問題行動を起こす児童に対しての理解もされなかった。ある日、「もう、学校に行きたくない。学校なんていかなくていい」と泣きながら訴える児童がいた。その子は、荒れた学級生活の中でも、保健室に行きながら我慢して我慢して、頑張ってきた子だったが、もう限界だった。そして、その児童の保護者も「なんでこんな悲しい思いをするんですか。私ももう、「頑張れ」なんて言えません」と児童と一緒に帰ることとなった。この出来事は、私の教師人生の中でも忘れられない。目の前で、保護者と児童が学校を離れる。どうしてこうなってしまったのか、どうしたら守ることができたのか。とても悩んだ。多くの手立てをうち、3月を迎えたが、この状態は3月まで続いた。このような思いをもう2度と、児童に味わわせてはいけない。そう心に誓い、次年度の改革に「担任の学級経営力の向上」を掲げて取り組むこととした。このとき、ようやく前任校の校長がおっしゃられた「役が人を成長させる」という言葉が心に染み込んできた気がする。そんなとき、「大学院へ行かないか」という声がかかった。大学院では「学校マネジメント」について学ぶことができる。これからやっていこうとする実践について、さらに検討できるのではないか。担任の先生が、のびのびと学級で子供たちと接することができることにつながるのではないか。そう思い、大学院へ行くことを決意した。

今年度の取組

今年度は、担任の学級経営力を高めるために「カリキュラムの見直し」をし、放課後に学年や職員で話し合うことができる時間を確保した。「Tタイム」（ティーチャータイム）を作り、ゆったりと語り合う場を作り、気軽に担任の悩みや相談ができるようにした。また、研修を見直し、「学級経営」に関わることを研修に取り入れている。まだ4月から3ヶ月程だが、このような取組が成果としてあらわれることを願っている。

大学院での学び

4月から7月、福井大学院教職連合研究科「学校マネジメントコース」にて、カンファレンスやラウンドテーブルを行ってきた。まだ自分の実践に確かな手応えがあるものではないが、大学院で自分のやろうとしていることや考えを伝えると、様々な立場の方から考えてもみなかった視点で言葉が返ってきた。ラウンドテーブルなどでの周りの方の実践を聞きながら、自分の実践と比べることで、自分のやろうとしていることが明確になっていくのが分かる。これま

で講義形式であった職員研修も、大学院で行っているような「語り合い」をするようになってきた。これからの大学院での学びを自校で広め、子供も、担任も明日も来たくなる学校となるようにしていきたい。

学校改革マネジメントコース１年（３年履修）/和田こども園

木下　妙子（きのした　たえこ）

初めまして。今年度から学校改革マネジメントコースを受講させていただきます木下妙子です。どうぞよろしくお願いします。

私は小さい時から衝動的で『思ったら動く！』子でした。すぐに行動に移すので、当然兄弟の誰よりも怪我が多く、親に心配させることもしばしば…。思いこんだら一直線、自分の思いと合わないと同級生とけんかすることもしばしば…。そんな子供時代を過ごし、経験から人との距離感やどう意見を酌み交かすかがある程度できるようになってきたかなと思う今です。（これも思い込み！？）今思えば保育教諭になったのも、中学生の時に思ったことがそのまま進路になり高校・短大と進路に悩むことなく一直線でした。

保育教諭になってすぐは一斉保育一択の保育で、先輩の先生が進めていく保育に何とかついていこうと必死でした。一斉保育の枠に入らない子をどうやって入れるか、どうしたらクラスみんなで一緒のことができるか、できないのは自分の保育の仕方や準備が悪いから、と遅くまで残って業務をこなしていくことで頭がいっぱいでした。でも、もともと自分が枠にはまらない子供だったので、枠の中に入らない子は入れられようとすることがつらくないかな、自分はどうするといいのだろう？と考えるようになり、障がい児保育に興味を持ちました。障がい児保育では一人一人の特性に合わせた環境作りや関わり方があり学んでいくほど一人ひとりを理解し、そこに合わせていくことの大事さを感じました。

そんななか初めて、自閉傾向の強い子を含めた１歳児 11 人を担任することになりました。その子以外にも気がかりさの強い子が多く、どう頑張っても二人で保育するには無理があり悩んでいました。秋には散歩に行きたかったのですが、自閉傾向の強い子は散歩にあまり興味がなく、園庭の遊具で遊んでいるときが一番楽しそうでした。でも他の子は散歩先での自然との関りが楽しそうなのでどちらかに合わせるしかない、でもどちらか選ぶことが一人一人にとって本当にいい保育かと考えていくと腑に落ちない、そんな時隣のクラスにも散歩に興味が持てない気がかりな子がいることを知り、散歩に興味が持てない自分のクラスの子と隣のクラスの子を園庭で私が保育をする、その他の子は隣のクラスの先生と自分のクラスのもう一人の先生が散歩に連れていく話がまとまりました。当時クラスでまとまって動くことが当然だった自園ではしたことのない保育でしたが、隣のクラスの先生も『子供の最善の利益とは何か』を考え始めた時期だったのでやろうとする意欲が一致。やってみるとどちらの子もうれしそうに遊ぶ姿があり、散歩と園庭の話を共有すると気がかりな子であっても満足する遊びの手ごたえがありました。そこから子供達が興味や関心が持て、選べる環境（主体的な保育）の保育を考えるようになりました。やってみると楽しいものの、変化に伴う問題が山ずみ…。変化させることがこんなにもひずみや摩擦を生むことに悩みました。

悩みがあるから思い切って教職大学院を受けた現在、ラウンドテーブルやカンファレンスに参加させてもらうと脳が活性化され思考がぐるぐる回ります。回りすぎて園長先生から「落ち着いて、ゆっくり行こう」と声をかけられるぐらいです。悩んでいても前に進まないので、大学院でたくさん刺激をもらい『変化があることが楽しい』職場になるよう動いていこうと思います。

学校改革マネジメントコース１年/さいたま市立針ヶ谷小学校

三村　美延（みむら　みのぶ）

本年度から東京サテライトで学ぶことになりました三村美延と申します。さいたま市の小学校で校長をしています。福井大学の教職大学院で学ぶことになったきっかけは、昨年度受講した教職員支援機構NITSのコア研修でした。

昨年度の春に、教育委員会からコア研修の要項が届きました。「教師にとって中核的（コア）に求められている力を高める探究型研修」と書かれていましたがどんな研修なのかよく分からなかったので、しばらく保留にしていました。その後、本校職員に研修を薦めると受講を承諾してくれたので、「二人組コース」に参加することにしました。

NITSの研修に参加してみると福井大学連合教職大学院の先生方が何人も関わっておられ、休憩時間の会話の中で福井大学の教職大学院や東京サテライトの紹介をしてくださいました。東京サテライトには管理職の方も多く通っていらっしゃることも聞き、私には無縁だと思っていた大学院での勉強が一気に自分事になりました。その後、他の大学院についてもいろいろ調べてみましたが、勤務先の学校を学びの現場として理論と実践を往還できるのは、福井大学の教職大学院だけでしたので、勉強するなら福井大学がいいと思いました。

しかし、その反面、もうじき役職定年を迎える私が今さら進学しても無駄なのではないか、と躊躇する思いもありました。いろいろと考えて、最終的には、前向きな理由も後ろ向きの理由もありますが、やっぱり進学することに決めました。

私が進学することに決めた一番の理由は「学びたい」という思いの実現です。学ぶということは楽しいものです。今、目の前に学ぶにふさわしい場があり、子育てを終えた私には自由に使える時間と金銭的な余裕もある。学ばないという選択肢はないと思いました。

二つ目の理由として、校長として職員にロールモデルを見せたいと思いました。「子どもの学びと教師の学びは相似形」と言われます。本校でも職員にそう言っています。であるならば、まずは私が率先して探究心をもって自律的に学ぶ主体的な姿勢を職員に見せることに意義があると考えました。職員には「校長の学ぶ姿」から「自分たちの学ぶ姿」を見出してもらえれば、退職間近の校長が大学院に通う意味があると思えたのです。

一方で、進学を迷った理由の一つに年齢のことがあります。私は今年度で60歳になりますので、教職大学院に通えたとしても、１年次で役職定年を迎えてしまいます。役職定年で退職し第二の人生を謳歌しようと考えていたのに、教職大学院へ進学するのであれば、校長での特例任用を希望することになります。教育委員会は、私を校長として特例任用してくれるだろうか。その後はどうだろうか。63歳の定年後はどのようにして生きていくのだろうか。と、この機会に自分のキャリアについて真剣に考えてみました。

そこで思い出したのが、『LIFE SHIFT　100年時代の人生戦略』（リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット著）の中の言葉です。「100歳まで生きることが一般化する社会では年齢による区切りがなくなり、学び直しや転職、長期休暇の取得など人生の選択肢が多様化する」というものです。私が何歳まで生きるのか分からないけれど、60歳で学ぶことは特別なことではなく、そのことがこの先の人生において必ず価値のあるものになる。と思えたのです。そして覚悟を決めました。「よし！せっかく学ぶのだから定年となる63歳まで勤め、多くの児童や教職員に還元しよう。たとえ、大学院の２年次に校長として特例任用されなかったとしても、与えられた職場で実践していこう。」

福井大学連合教職大学院の選考試験が年度末の２月に実施していることも私にとって有難かったです。まずは、願書を出すまでに、じっくりと考える期間をもてました。そして、選考試験の後も入学までが間も

ないので、学びたいという気勢がそがれることなく開講式を迎えました。

教職大学院で学び始めてから４か月が経ちました。全国各地から集まる方々との出会いと学びはとても新鮮です。語学が堪能ではないので、外国の方と直接に交流できないのが残念ですが、多くの方々と対話を重ねることはとても楽しいです。福井や宮古島でのラウンドテーブルも楽しみです。

どうぞ皆様、これからも宜しくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年/埼玉県立進修館高等学校

長谷部　福一（はせべ　ふくいち）

初めまして。長谷部福一と申します。本年度、福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました。ずっと、大学院に進学して学び直しをしたい、学びを深めたい、教育力を高めたいという気持ちを抱えて働いてきましたので、この度その夢が叶いとても嬉しい気持ちでいっぱいです。

目の前にいる生徒たち、家庭や生活のことを考えると休職をして大学院に進学することは不可能だと諦めていました。他大学院の夏季集中講座にオンラインで参加する、県立総合教育センターの研修に積極的に参加するなど、自分なりに学びを深める取り組みは行っていましたが、まとまった時間を思う存分自身の学びに使うことができないでいました。昨年度知り合いより、福井大学教職大学院は、学校拠点方式により日々の学校の運営・マネジメントに関わる実践を実習として単位認定してもらえ、東京サテライト校やオンラインを活用して受講することもでき、福井県まで通えなかったとしても、働きながら大学院に通うことができると教えてもらいました。その話を聞いたとき、これだと私の中で決意する思いが即座に沸き上がりました。そして、大学院進学に向けて一直線に動き出し、こうして待望の大学院生になることができました。

私は、主幹教諭、県立総合教育センター指導主事、教育局指導主事としての職務を経験し、令和４年度より教頭として学校の管理・運営に参画しております。それ以前は、教科指導はもちろんですが、バスケットボール部顧問として部活動指導に大きな情熱を燃やしていました。日本公認審判の資格も取得しており、現在でも土日を利用して可能な範囲ですが、公式戦の審判に行っています。大会会場に行くと、よく一緒に練習試合をした他校の先生たちが親しみを持って声をかけてくれます。このとき築いた人脈は今でも自分を支えるありがたいものになっています。最近は、私の教え子たちが教員となって、部活動指導をしています。その姿を見て、何とも言えない感動に浸ることもあります。

私がお世話になった先生が、「文武両道とは、部活動で全国大会に出場して、東京大学のような難関大学に進学するくらいどちらも真剣に頑張ることだ。できるできないではなく、そのような気持ちでしっかりと生徒たちを応援していこう」とよく言っていました。その言葉がとても印象に残っており、教諭時代は、教科指導も、部活動指導も、進路指導も、生徒指導も、クラス経営も、とにかく無我夢中で一生懸命にやってきました。確かに生徒たちにとって、その言葉の目指すところは大切なことであり、誰もがぶつかる壁かもしれません。生徒たちが、その壁を乗り越えられるようにこれからも応援していきたいと思っています。

その反面、教員が生徒たちの文武両道のようにあらゆることを一人で成し遂げていくのは、とても難しいと自身の経験から感じていました。仕事、育児、介護など担う役割がとても多く、一人では限界があります。とにかく闇雲に一生懸命だった頃と違って、今は、仕事、家庭とすべてを 80 点でいいから満遍なくバランスよくやっていこう、何かが 120 点でもどこかで 0 点があったら仕事でも家庭でも誰かに負担をかけてしまっている、一生懸命だけど全体を見渡しながら、自分らしく、自然体でいこうと思うように

しています。そして、リフレッシュする時間や休養する時間もきちんと確保し、仕事が忙しいから休んで病院にいけないということがないように心と身体のメンテナンスをしながら、健康第一でやっていこうという気持ちでいます。前々から言葉では健康第一と言っていましたが、これまでの管理職としての経験と、同僚の管理職との対話を通して、このことの大切さを深く感じ、改めて重要性に気づくことができました。

そのような考えから、いつも頑張ってくれている先生たちが健康的に生き生きと働けるように応援していきたいと私は思っています。業務が平準化できておらず、誰かに負担が偏っているのも現状としてあります。頑張る教員集団を家庭や健康の視点も併せ持ちながら、マネジメントしていくことはとても重要なことだと思います。理想的に業務を効率化・縮減できていなくても、生徒との関わりの中で教育に対してのワクワクする気持ちを実感できていたら、声を掛け合いながら全員で一緒にそのような教育を実践できていたら、負担は減らせなくても精神面での負担感は減らせると思っています。そのためのマネジメント力を大学院での出会い、学び、経験を通して身に付けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年/美浜町立美浜中央小学校

平城　慶彦（ひらぎ　よしひこ）

４月に入学し、月間カンファレンスやラウンドテーブルを通して、多くの学びや刺激を受けています。

私の関心事は「探究的な学び」です。美浜町では町内の３小学校が合同で取り組む「ふるさと美浜元気プロジェクト」という探究学習を行っています。これは、同僚の先生方とボトムアップで始めた取組で、８年目になります。３つの小学校の同学年の担任３人が協働して学習をデザインすることで、学校の枠を超えた教師の学び合いも生まれています。毎年１月には、町内の３～６年生が一年間の学びを伝えたり、課題解決の提案をしたりすることで、町民と互いに学び合う場「ふるさと美浜元気フォーラム」を開催しています。このフォーラムに参加いただいた地域の方からは、「私もこれから一緒に美浜町を盛り上げていきたい！」「子どもたちが描いた美浜町になるように私たち大人も頑張りたい！」といったフィードバックをいただき、子どもたちの主体性も高まっています。

こうした学校教育の動きに合わせて、行政が将来的な人材育成を目的に、公設の探究塾「放課後教室サン」を開設し、町内５・６年生の約半数60名が通塾しています。探究塾の「先生」は東京を中心に全国各地で教育事業やシティプロモーション事業を展開する民間企業の社員で、全国各地から美浜町に移住し、教育を通してまちを変える動きをつくっています。教員との連携も強く、子どもたちは学校教育と社会教育それぞれの強みを生かした探究的な学びを経験しています。実は、この４名の若者先生たちは、探究塾の先生をやりたいから会社に就職したのではありません。市長になりたい、海外で教育に携わりたい、自分が本当に住みたいという場所を見つけたいなど、自分の夢を実現するためのスキルアップを目的に就職された先生たちです。その話を聞いた時、私たち教員は驚くとともに、こんな夢のある先生たちと学んでいる子どもたちがうらやましくも思いました。

一方、学校は子どもたちに夢や希望、ワクワクする学びを提供できているのか、疑問に感じています。多忙化、業務の複雑化、理想と現実のギャップなど、今頭に思い浮かべるだけでも課題でいっぱいです。そんな中で、大学院の先生方や全国から集う同僚の先生方との語り合いを通して感じていることは、皆さん立場の垣根がなく、エネルギッシュで前へ進もう

というバイタリティに溢れていることです。毎月のカンファレンスを終えた後は、疲れよりも満足感の方が多く、明日からまた頑張ろうという意欲が湧いてきます。

本校でも今年度、校内研究にカンファレンスを取り入れ、さまざまな先生方と授業だけでなく、その背景にある教育観や指導観、そして悩みを語り合う場を設けてきました。このカンファレンスの中で、同僚の先生から「普段できない話ができてうれしい」「こんな話をすることも大事だね」など、肯定的な意見をたくさんいただきました。そのお蔭で学校改革の糸口が少しずつ見えてきました。

探究という関心事から始まった私の研究は現在、対話を通した学び合いに少しずつ具体化してきています。子どもも教員も対話の力にはまだまだ課題がありますが、課題が大きいからこそ前へ進む、そんな教員集団、学校づくりについて学びを進めていきたいと考えています。これからもさまざまな先生方と出会い、実践を聞き、学び合えることを楽しみにしています。よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース／岐阜県揖斐郡揖斐川町立揖斐川中学校/校長

馬淵　勝弘（まぶち　かつひろ）

１　本学との出会い

岐阜県では、岐阜市内の各学校で中核となる教職員が学校改革マネジメントコースで勉強させていただいております。連合教職大学院から巣立っていった学生（教師）は、それぞれの学校で学校改革を行い、各学校の活性化につながっています。しかし、今まで管理職で連合教職大学院に通う学生（教師）がいませんでした。管理職が学校改革マネジメントコースで学ぶことで①研究に厚みをもたせたい②福井大学のラウンドテーブルという学び方を岐阜県内に拡大したいという柘植良雄教授の熱い思いを伺い、４月より皆様の仲間に加えさせていただくことになりました。

私が大学院を受験した時は、岐阜市立加納西小学校に勤務していました。岐阜市立加納西小学校は JR 岐阜駅を校区にもつ「街の学校」でした。「でした」というのは、私はこの 4 月より揖斐川町立揖斐川中学校に異動になったからです。いろいろとありますが、この年になって突然訪れた転機に戸惑いながら、一生懸命励みたいと思っております。

２　揖斐川町について

現在勤務している学校のある揖斐川町は岐阜県の西部に位置し、北は福井県、西は滋賀県と境を接しています。面積は 877km^2 で中央を流れる揖斐川にそって、北西から南東に細長く広がっています。人口 18,500 人の町です。平成の合併によって揖斐川町、坂内村、藤橋村、久瀬村、春日村、谷汲村が一つになりました。山林が町の大半を占めています。有名なものは、国歌の「さざれ石」、総貯水容量日本一の徳山ダム、日本のマチュピチュといわれる春日地域の茶畑、ソフトボールのインターハイや国体が行われた健康広場、西国三十三所結びの地谷汲山華厳寺などです。

３　勤務地について

勤務している揖斐川中学校（岐阜）は、生徒 248 名（1 年生 77 名、2 年生 83 名、3 年生 88 名）、学級数１１，職員数２６名の学校です。生徒、職員大変活気があり、生徒会活動、学級活動、部活動が盛んな学校です。

４　自分自身について

岐阜県の教員採用は、小中一括採用です。そのため初任校が小学校、2 校目は中学校の勤務ということはよくあります。私も初任校が小学校、2 校目からはずっと中学校勤務でした。校長となっても 1 校目は小学校、2 校目は中学校（現在）です。

私の趣味は野球です。小学校から大学まで野球をやってきたので、中学校勤務時は野球部の顧問をしておりました。教科は理科です。部活動のおかげで、私のつたない授業でも野球部の子どもたちが中心となって授業や学級を盛り上げてくれました。校長となり、現在の学校は 2 回目の勤務になります。教え子の子どもが本校に通っております。親子で「先生！」

と声をかけられると、自分のやってきたことに責任を感じ、身が引き締まる思いになります。

５　連合教職大学院に通いはじめて

福井大学でのカンファレンスはとても刺激的です。毎回いろんな地域、校種、立場の人たちとの対話は学ぶことが多く、ワクワクの連続です。「2 時間かけて福井に来てよかった」と感じるとともに、月曜日の元気をいただいて岐阜に帰ります。この学びを町内、管内、岐阜県内に広めていく決意でいます。

どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年/放課後等デイサービスほっこり AOZORA

瀧澤　治美（たきざわ　はるみ）

学校改革マネジメントコースに在籍しております、瀧澤治美と申します。現在、福井県坂井市にて、障害児通所施設「放課後等デイサービス ほっこり AOZORA」の代表として、発達障害のある子どもたちの支援に日々取り組んでいます。

私が子どもたちと関わるようになったのは、今から 35 年前、地域の子どもたちが毎日のように 10 人～20 人ほど、自宅に遊びに来ていたことがきっかけです。登校しぶりのある子どもとは学校と連携して支援にあたり、学習が苦手な子どもへの個別支援や、外国にルーツを持つ保護者からの相談などにも自然と対応するようになりました。さらに、地域の体育館を活用したスポーツレクリエーション活動や、和太鼓クラブの創設と運営を通して、子どもたちの身体的・情緒的な育ちを支える活動も展開してきました。また、発達に特性のある子どもたちには、早期からコミュニケーション支援や就労準備支援を実施する中で、その必要性の深さを実感してきました。そうした中、知的障害を伴わない発達障害（以下、発達障害）のある子どもたちや保護者が抱える課題と、それに対する社会的支援の不足に気づくようになりました。「このままでは、この子たちが社会に出たときに、大きな困難に直面する」。その危機感から、15 年前に NPO 法人と福祉事業所を立ち上げました。当初は成人の就労支援や社会参加支援を中心に行っていましたが、支援を重ねるうちに、「子ども時代の育ち」が将来の人生に大きく影響することを確信するようになり、3 年後には障害児通所施設を開設しました。日々訪れる子どもたちの中には、「なぜ注意されているか分からない」「自分の思いをうまく言えない」といった姿が見られます。こうした困りごとが原因で、自己肯定感の低下や不安障害、不適応行動などの二次障害につながっているケースも少なくありません。私は「子どもたちが毎日を楽しみ、未来に希望をもって生きてほしい」という願いを胸に、日々支援を続けています。

発達障害のある子どもたちは「一人ひとり違う」と言われるように、支援にも柔軟性と個別性が求められます。だからこそ、画一的な対応ではなく、安心できる環境を整え、丁寧に寄り添うことを大切にしています。そうすると、暴れたり泣き叫んだりといった不適応行動が数日で落ち着き、自己理解が進み、スモールステップで成功体験を重ねる中で、子どもたちは本来持っている力を自ら発揮し始めます。私は、そうした成長に立ち会えることに、深いやりがいと喜びを感じてきました。

ある日、日頃から連携している特別支援学級のコーディネーターの先生から「ラウンドテーブルに参加してみては」と声をかけていただきました。初回は聴き手として参加しましたが、ファシリテーターの先生から「あなたの話は現場の先生方の参考になると思います。次回は話し手として参加してください」と言葉をかけていただきました。福祉関係者から「子どもも保護者も共に成長している」と評価されていた支援が、学校現場の先生方にも関心を持っていただけたことは、私にとって驚きであると同時に、大きな励みとなりました。この経験を通して、自分自身の実践をより深く見つめ直したい、そして「物語を語るように実践を捉え直す」事例研究を本格的に学びたいという思いが高まり、教職大学院への入学を決意

しました。入学後は、想像以上に広く、深く、実践と理論が交差する学びの世界が広がっており、大きな刺激と学びを得ています。毎月のカンファレンスでは、校種や地域、立場を超えた先生方が、それぞれの現場での実践を惜しみなく語り、対話を通じて新たな視点と気づきが生まれています。

「子どもの学びと教師の学びは相似形である」という言葉に出会ったとき、私はこれまでの自分の支援活動が、実は学校マネジメントの営みにもつながっていたことに気づきました。これまで私は「マネジメント」や「リーダーシップ」という観点を意識してきたわけではありませんが、教職大学院での学びを通して、自分自身の内にあるリーダーとしての資質や可能性を見つめ、育てていく必要性を強く感じています。

今後は、「学習についていけない」「社会性が身についていない」けれども「学校に行きたい」「友達と楽しく過ごしたい」と願う子どもたちが、安心して過ごせる居場所を創っていくとともに、その場に関わる職員の育ちも大切にし、実践的なリーダーを目指していきたいと考えています。

そのためにも、教職大学院での学びを大切にし、多くの先生方の語りに耳を傾け、深く感じ、気づき、実践へとつなげていきたいと思います。支援者として、そして組織の担い手として、自分自身の在り方を耕し、さらなる成長を目指していきたいと考えています。

学校改革マネジメントコース１年（２年履修）/横浜市立日枝小学校

石川　和之（いしかわ　かずゆき）

福岡に生まれ、同じ九州の熊本大学教育学部を卒業後、横浜市立小学校で勤務 24 年目になります、石川和之です。今回、教職大学院で学ぶ機会をいただき、身の引き締まる思いでいます。どうぞよろしくお願いいたします。

20 年間の学級担任時代は小学校社会科を中心とした授業研究を通して、座席表指導案を活用した「個をみとり、個を生かす授業づくり」に取り組んできました。毎年必ず 2、3 個の自分の授業をビデオに録り、どの子がどんな発言をしたのか、どの子のどんなつぶやきを大事だと思って教師である私はどんな問い返しをしたのか、一字一句細かく「授業記録」として資料に残す取組もしてきました。とにかく、授業づくりが大好きでした。授業づくりに追われる日々は、趣味のように楽しい人生でした。社会科に限らず、国語や算数においてもそうでした。教科担任制の年にはクラスごとに学習問題が違うことは当たり前でした。子どもの生活経験や興味関心に応じて、単元の学習問題を設定し、学習計画も子どもに委ね、子ども自身から「分からないことが分かってくる」という過程を大事にしてきました。そういった本質的な問いに出合った時の、子どもの前のめりになって学びに没頭する姿。そんな姿を目の前で見ることのできる幸せ。何事にも代えがたい幸せな担任生活でした。

授業づくりに没頭する日々を過ごしながらも、一度しっかりと腰を据えて「子どもが学びに没頭するようになる手立て」について整理したり学び直したりしてみたい、そんな思いを抱き続けてきましたが、異動のタイミング等と重なって、結局は教職大学院等で学び直すことなく、ずうっと小学校現場で働いてきました。それでも、転機になったのは教務主任になってからです。担任を続けつつも、休み時間になると「仕事に行ってくるね」と子どもの伝えては職員室で教務の仕事をするようになると、次第に「学校組織」の在り方について考えあぐねるようになってきました。それまでは教育書ばかり読んでいた私も意識してビジネス書を読むようになり、「どのようにしたら『小学校 6 年間でこんな子に育てていきますのでご安心ください』と職員全員で保護者や地域に宣言できるような学校をつくれるのだろう」と、悶々とした思いで仕事に打ち込むようになってきました。

副校長になり、その想いはさらに強くなってきました。児童指導や保護者対応にどうしても時間をとられ、次の単元に向けた教材研究を行う時間の確保が年々難しくなっている現状。毎年のように年度途中で体調を崩し、病気休暇そして休職に入らざるを得なくなる職員がいる学校現場。その理由は様々ですが、「わくわくするほど楽しい」というだけの職場ではないことは明らかです。倍率も高くて現役では合格できなかった地元九州を離れ、一刻も早く現場で働きたいという強い想いをもって横浜に来た20数年前、もちろんいろんなことはありましたが、とにかく学校現場は楽しかったです。もう一度、いや新しい形で、学習者主体の協働的な学びを実現できる学校をぜひつくってみたいと思います。

そのポイントは、「地域とつながるリアルな学び」をどうカリキュラムの中に位置付けるかだと考えています。学区制の充実した日本の公立学校だからこそ、地域にどんどん出かけて学んでいく。子どもも保護者も多くの地域の方々と関わりながら、教職員も一緒になって全員が同じ目線で子どもたちを育てていく。子育てに関する保護者の悩みに、教職員だけでなく地域の方にも支えていただく。まわりまわって、教職員一人一人も支えていける「地域に根ざした学校」にしていく。

目指すは、「地域まるごと学校」です。近い将来、学級担任制から学年チーム制になるとすると、その日の子どもの様子を職員同士で共有する時間がどうしても必要になります。そのためにも、15 時前には下校する日課となるでしょう。そのとき、オープンエンドで終わった授業後半の疑問に対して、「もう一度確かめに行こう。調べに行こう」と、子ども同士で地域にもう一度確かめに行く。学びに行く。そんな地域、そんな学校をぜひつくりたいです。

学校改革マネジメントコース１年／メットライフ生命保険

石賀　匡（いしが　ただし）

はじめまして。メットライフ生命に勤めて 17 年目になります、石賀と申します。これまで保険業界で経験を積み、現在はベテランとして業務に携わっておりますが、なぜ自分がこの大学院で学んでいるのか、時折不思議に感じることもあります。中森先生との出会いから、人生一度きりなので、気になることに飛び込んでみようとチャレンジしております。ただ周りの方と環境の違う中で何を取り組んだら良いのか、また私の実践報告が皆さんの参考になるのか　いまだにドキドキしながら参加させていただいております。自身の大切にしていることとして、縁ある人の幸せを意識しています。自分との出会いが、縁ある人の少しでも人生の変化のきっかけになっていただけたら、嬉しいなと思います。

私の環境をお伝えさせてください。現在、家族四人で、小学校 4 年生と 2 年生の 2 人の息子を育てる父親でもあり、保護者という立場から、今やこれからの教育のあり方や学校の役割について考える機会が増えてきました。そうした背景から、今ここで学んでいることが、自分自身の成長や家庭・社会への貢献にもつながっていると実感しています。余談ですが、次男のクラスでは、授業中に立ち歩く子や騒ぐ子がおり、私自身も保護者として、何かできることないかと模索しています。私の長期実践報告の一つとして挙げております。

私の長期実践報告、欲張っており現在は、上記とあと２つの合計３つで進めていこうと考えております。残りの２つも紹介させてください。

一つは、弊社メットライフ生命の福井のオフィスにおける現状です。私が入社の頃は、２年後に残っている社員が２割という現状で、会社の給与体制の見直しや教育制度の見直しなどで現在は、５割までできております。ほかの業界と比べるとまだまだ低いこともあり、７から８割に、まずは福井のオフィスでしていきたいと感じます。私は、営業職であり、私が関

われることとして、育成を中心に変化を報告していきたいと思います。

最後に私自身が、経験と学んできたことを中心に、子育て世帯のパパさんママさんを中心に脳科学からの育児やコミュニケーション、子供の将来にまつわるお金の講座を開催しており、その中で特に夫婦間や親子間でのコミュニケーションについての相談が多く、講座でよりお悩みの方に個別の相談もおこなっております。こちらは、講座のアンケートなどを中心に子育て世帯の考えやお悩みの現状を報告できたらと考えております。

３つの中で私の共通で考えていることは、対話の重要性であり、コミュニケーションと対話をもとに、これまでの社会人経験と家庭での視点を活かしながら、多様な価値観と出会い、学び合うことを大切にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年（２年履修）/坂井市立丸岡中学校

廣瀬　雅弘　（ひろせ　まさひろ）

「♪新しい朝が来た、希望の朝だ～♪」今年も夏休みが始まり、ラジオ体操の音が聞こえてくる日々となりました。どうもみなさんこんにちは、学校改革マネジメントコース１年（2 年履修）の廣瀬雅弘と申します。現在、坂井市立丸岡中学校で勤務し 4 年目を迎えました。教職に就いてから講師５年、正採用から 13 年が経ちました。また、40 歳という歳を迎え、「教師」という面だけでなく、「父親」としても 15 年という歳月が過ぎようとしています。置かれた環境や状況の中で、さまざまな立場を経験し、その中で楽しさを見つけ、さまざまな視点から社会を見たり、自身の成長につながっていたりしていることに喜びを感じています。冒頭にあるラジオ体操の話題も、町内の子ども会の担当となり、地域の小学生と接する機会を得ることができ、楽しいと感じながら日々を過ごしています。

さて、何事にも楽しさを感じる私が教職大学院に入学しようと思ったきっかけは、ある学年主任の姿でした。その先生とは、以前にも一緒に勤務したことがあり、旧知の仲でしたが、お互いに年を重ね、私が求める 40 代の教師としての姿がそこにありました。学年主任として、「先を見通す力」「学年部会の先生方をリードする力」「学年の部会の先生方のアイデアを引き出し、また声を上手に拾うファシリテート力」「新たな取組を創造し、デザインする力」「絶対にあきらめず挑み続ける責任感」、それでいて以前から変わらない、「生徒に対する深い愛情」が感じられる先生でした。その先生が教職大学院で学び、休日や放課後に大学院のレポートや長期実践報告を書く姿を素直にかっこいいと感じました。自分も同じ 40 代になり、教員人生の見通しを考えた時に、その姿を追ってみたいと思ったことがきっかけの１つです。また、その先生と共に始めた、本校で取り組む地域探究学習「丸岡 LOVERS」が本校の魅力ある学校づくりの一翼を担うものになってきました。生徒が主体的に学ぶ姿が見られる活動であるものの、課題も見られ、まだまだ改善の余地があると感じています。そこで、より私自身が先頭に立ち、一層深く学びを展開していく中で、本校の学校文化の 1 つとして根付かせることができればという思いも大学院入学のきっかけとなりました。

4 月 6 日に入学し、早 4 か月が経とうとしています。月間カンファレンスやラウンドテーブルでのさまざまな校種や地域、年代の先生方との語らいでは、管理職の先生方のお話に広がっていく教員としての視野。実践を語ることで、これまでの実践の意味づけや価値づけをしていく学びそのもの。ストレートマスターの若い大学院生の悩みに、かつての自分を思い出し、初心に返る時間。どれもがとても有意義で改めて入学してよかったと感じています。これからさらに広がる「理論と実践の往還」の中で、さらに深い学びが待っているんだろうなとワクワクする私は、

まさに「学び続ける教師」なんだと実感し、学べること、成長できることに感謝しながら、この教職大学院での生活をしていきたいと思います。卒業後を想像すると、冒頭の一節のように、まさに「新しい朝が来た、希望の朝だ」と教員人生における新たな朝（はじまり）を与えてくれるであろうし、その姿を見て自分と同じく、教職大学院に進学したいと思う次の世代が出てきてくれたらうれしいです。これからどうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース１年/株式会社 COMPASS

小森　由貴（こもり　ゆき）

みなさん、はじめまして。こんにちは。株式会社 COMPASS の小森といいます。現職の教員を対象とした大学院に、なぜ企業の人間が？と思われる方もいらっしゃるかと思います。私も自分でもびっくりしています。なぜ入学することになったのかを少しご説明します。

COMPASS という会社は、小中学校向け AI ドリル（5 教科）を作っている会社です。自治体や学校で、GIGA スクールで整備されたタブレットで利用される場合がほとんどです。全国での利用者は 100 万人ほどで、福井県では鯖江市、石川県では小松市や輪島市で利用頂いています。ちなみに AI ドリルというのは、自分に合った問題を出題してくれる自分専用のオーダーメイドドリルのようなものです。どの学年から始めても、躓きに応じて適切な問題が出題されます。

教材のコンセプトは「主体的な学びを支援する AI ドリル」で、子供たちがいつでも、どこでも学べるようなドリルにしたいと思っています。私の役割は学校現場の声を開発部門に届けることで、どういった機能が必要か、どういったアップデートをすればいいのかを日々考えています。

機能を開発するうえで難しいと思うのが、例えば「子供たちが主体的に学んでいくうえで振り返りをしっかりできるよう、学習履歴の画面をもっとわかりやすくしよう」と考え、開発部門に相談を進めてみると、実際の学校現場での状況は「まだまだ一斉授業で紙のプリント中心だから、そこまでその機能利用されていないよね」というズレがあったりします。

指導要領に記載されているような「対話的で深い学び」の実現に向けてどんどん機能を開発しようとすると、学校現場との乖離が起きる。あまり先進的な機能をつけても現実の学校では使われない。理想の学びと現実の板挟みです。そんな悩みを、以前からお世話になっている先生に相談したところ「こういう大学院があるよ」と教えて頂き、私のもやもやを解決できるかもしれない！とチャレンジしてみたというわけです。

現在は COMPASS で小中学校の教材開発がメインですが、6 年前まではベネッセという会社で 15 年間働いて、主に高校を担当していました。色々な学校、先生方にお世話になったのですが、中でも思い出深いのは学力的に厳しいと言われている学校での生徒たちのことです。

クラスに訪問しての講演で、ワークを行い「じゃあ、1000 円の 3 割引きはいくらかな」という問題を出すとわからない子がほとんどだったこと。3 行以上の文章を読めない（読まない）ので、どうしても国語の点数が 20 点以下になってしまう生徒との面談。

先生たちと一緒に、卒業後社会に出るこの子たちに最低限どんな武器を持たせてやれるか必死に考えました。騙されないために。生き抜いていくために。手をかけてやれば伸びる子たちだけど、小中の範囲まで戻り、基礎の抜け漏れが多い子たちを追いかけるのは先生方にとてつもないパワーが必要でした。

なので、今の AI ドリルに出会ったときに「自分に合った問題が出るなんて、あの子たちにぴったりだ！」とものすごく感動しました。テクノロジーで先生の負荷を軽減し、自分に合った学びを進められるなんて本当にすごいなと今でも思っています。

4 月に教職大学院に入学し、インプットしたり先生方とディスカッションしていく中で「学校現場が変わるのはそう簡単ではないのだな」と感じています。また一方で、この大学院に来ているような先生方の熱が広がっていけば学校現場はきっと変わっていくとも思えます。これからも先生方と話しながら、自分の立場からできる学校支援を模索していきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース１年/さくら認定こども園

上野　慧美（うえの　さとみ）

さくら認定こども園の上野慧美です。私が勤務しているさくら認定こども園（旧：さくら保育園）は祖父が立ち上げた園です。私が子どもの頃は父も保育ではない他の職種で働いていた事もあり、私も跡は継がなくていい、保育の世界には入らなくていいと言われていたため、大学は商学部に進学し、就職も会計事務所に就職しました。しかし、気が付いたら父が祖父の跡をついで園長になり、私も気がついたら園に就職していました。入社当時は会計・事務担当として働いていましたが、気が付いたら保育にも携わるようになり、今年 4 月からは福井大学教職大学院まで入学していました。令和 4 年には森田さくらこども園・森田さくら児童クラブも開園し、さくらの子ども達も職員もますます賑やかになると共に、この大人数をまとめる難しさも感じています。

さくら認定こども園は福井大学教職員院大学に職員を出してもう 10 年以上になり、職員も私で 6 人目になります。探究活動（さくらではプロジェクト活動と呼んでいます）も 10 年以上続けてきて、これ以上大学院に出さなくても十分に保育が出来ているという思いが私の中にありました。しかし、教職大学院を受験するにあたって、通っていた先生方に話を聞くと、どの先生も、通うのは大変だったけれど行って良かったです、と口をそろえて言います。そして、実際私も通い始めて 4 か月が過ぎようとしていますが、確かに通うには大変だけれど、入学して良かったという思いがあります。大学院で校種を超えた先生方の話を聞く事が参考になるのは、もちろん、大学院が縁でつながった人たちによって、保育が広がっているのも面白いと感じています。さくらのプロジェクト保育は普段の子ども達のつぶやきから子ども達の思いを拾い活動をつなげていく事をしていました。しかし昨年度から宮古島とつながった事で、子ども達の思いを大事にしつつ、外からの刺激、先生たちの思いも大事にすることで、プロジェクト活動の変化がありました。面白いなと思ったのが、宮古島という外とつながった事で、子ども達が福井の事をあまり知らないという事に気付き、調べるようになったという事です。外という比較対象が出来たからこそ中の事に気付けたんだと思います。また、「海」は先生たちから仕掛けた部分もあるテーマで、それゆえ子ども達が活動にのってきてくれるのかという心配もありました。しかし、子ども達の活動が自然と海につながり、海から宮古島へとつながっていきました。こうした事から、まだまださくらの保育が進化できる余地があったんだという発見がありました。

大学院では「働き方改革と保育の質の向上」を課題に入学しました。土曜日に行っていた行事を平日に行ったり、勤務時間内に行う研修を増やしたり、休憩を取りやすくしたりと少しづつ働き方改革を進めている所です。大学院でこれからの職員の育成は「伴走型」というヒントをもらいながら、今までの職員育成とは違う方法も模索しています。そして、これから就職する職員に選ばれる園にならないといけないという新たな課題も出てきています。

プライベートでは、2 歳と 4 歳の母親をしています。上の娘も下の娘もまだまだ手がかかる歳なので、仕事とプライベートの両立に悩む中、これに大学院まで入ってきて、全部両立出来るのか、体力面も含めて本当に不安です。オンラインも活用しながら、土日も仕事中毒の祖父母はあてにならないため、主人と

力合わせてなんとか 3 年間頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース１年/岐阜市立藍川北学園

吉武　雄一（よしたけ　ゆういち）

こんにちは。今年度より福井大学連合教職大学院の学校改革マネジメントコースに入学しました、吉武雄一と申します。現在、岐阜県の岐阜市立藍川北学園に主幹教諭として勤務しております。

岐阜市立藍川北学園は、岐阜市内で初の義務教育学校として今年度開校したばかりです。開校式の当日、子どもたちはリニューアルされてきれいになった教室や廊下を目にし、思わず大きな歓声を校舎いっぱいに響かせていたことが忘れられません。前期課程と後期課程の児童生徒が共に生活する空間は活気にあふれ、小中合同の各種行事は大変盛り上がります。昨年度からみえる先生方は、「中学生の表情がやわらかくなった」「小学生が中学生のお兄さん、お姉さんと一緒に過ごせることでうれしそうな表情をみせている」と、新しい学校の教育的効果を強く実感されているようです。藍川北学園で勤務させていただくということは、私の教師生活の中でとても貴重な体験になるだろうと、期待に胸をふくらませています。

藍川北学園の学校規模は、全校生徒数 213 名、前期課程 125 名、後期課程 88 名で、8 年生を除くすべての学年が単学級となっています。1 学級の生徒数も平均 23 名程度となっており、岐阜市内でも小規模な学校の一つです。校区における地域の様子に目を向けると、人口減少や町の高齢化が進んでおり、空き家問題も地域の重要な課題になってきています。こうした現状の中で、義務教育学校の開校は、地域の方にとっても大変明るい話題として注目されています。

刷新された学校で、うれしそうに過ごす子供たちの姿は、地域の方に元気を与えています。地域の方が学校訪問された際には「この学校のためなら協力を惜しまないつもりです。学校と地域全体が一体となって発展していきたいと願っています」と熱く思いを語られていました。校区の公民館には自治体が発行する地域広報誌が置かれており、「開校した義務教育学校　藍川北学園を中心とした町づくりをすすめていきたい」と記されていました。「地域と共にある学校」としてなお一層、連携・協働していかなければならないという学園のもつ大きな役割も感じています。校内において地域と学校との連携を考えていく立場にあることから、柔軟な発想力で様々なアイディアを提案したいと思っています。そんなとき、院生のみなさんとの対話は、私の凝り固まった教育に対する考え方や感覚を非常にやわらかくしてくれるものです。「そんな考え方もあるのか」「そんな実践をしている学校があったのか・・・」など、新しい発見と共に、確実に考え方の視野を広げてくれるものです。感謝しています。

これに加え、新しい学校のスタートに期待が膨らむ中、「これから求められる学校のあるべき姿とは…」「地域と共に子どもたちを育てていくための学校運営の在り方とは…」「義務教育学校のメリットを最大限発揮するためには何が必要なのか…」など、考えていかなければならないことが山積しています。正直、暗中模索な部分も多く、これまで教師として積み上げてきた経験だけでは方向性が見出せず、考えが停滞してしまうことも多々あります。

教職大学院での様々な出会いや対話の中で、自身が抱えている悩みや今後の方向性を一つずつ前進させていきたいと思っています。「子供の学びと教師の学びは相似形」という言葉どおり、教師として謙虚に学び続ける姿勢を忘れず、自身の成長を実感できるような実りある２年間にしていきたいと思います。そして、せっかくの機会ですので楽しみながら学び続ける構えで取り組みたいとも思っています。今後ともよろしくお願い致します。

学校改革マネジメントコース１年（１年履修）／福井県立美方高等学校

東山　裕紀（ひがしやま　ひろき）

はじめまして。今年１年間、連合教職員大学の学校改革マネジメントコースで学ぶことになりました、東山裕紀（ひがしやまひろき）と申します。よろしくお願いします。令和 6 年度は福井県の教育総合研究所でマネジメント研修を受講し、大学院では夏休みと冬休みの集中講義を受講しました。令和 7 年度は大学院の 1 年履修生として入学しました。19 歳から通っていた学び舎へ、49 歳で再度通う機会を与えられたことに大変感謝しております。（あの頃教えていただいた理科教育の先生は、ほとんどご退職されていますが…）

大学卒業後は、福井県立敦賀高校の非常勤講師（1 年）を経て、新採用が福井県立若狭東高校でした。12 年勤務したのち、転勤は 1 度だけで現在の福井県立美方高校が 2 校目です。担当教科は理科で、専門の化学を中心に担当しています。（クラス担任の学年によっては、生物や物理も担当しますが、何年経ってもうまくなれません…）美方高校勤務は 14 年目で、副担任 2 年、担任を 1 年生～3 年生と 4 周 12 年して、現在は 3 年担任をしています。長く居続ける分、変化していくことへの抵抗勢力になっていないだろうかと普段の言動に気を付けながら、内心ビクビクしながら、それでも生き字引のように重宝してもらえる存在になれるよう頑張っています。

部活動は、若狭東では弓道、美方では女子バレーボールを担当しています。バレーボールは球拾いと、練習試合や大会のサポートをするぐらいしかできていませんが、弓道は錬士五段まで昇段して、県連の競技部や市の協会の理事長などをしています。仏教の修行に「座禅」があります。心静かに自己を見つめる修行です。それと対比して、弓道は「立禅」と表現されます。的中しておごらず、外して他人のせいにせず。自分が中て続ければ勝てるのに、どこかで隙を作ると外して負けていく。全ては自分の心や身体の働きを制御してこそ結果が付いてくる、という武道精神性を、禅の道と重ね合わせています。剣道や柔道は相手が高段者で強ければ負けますが、弓道は低段者も高段者も一緒に競技に参加できるところは他の武道に無い特徴です。これらが私には合っていたのか 26 年間継続して取り組んでいます。もしこの仕事に就かなかったら、もし新採用で副顧問にならなかったら、弓道をやることはなかったので、偶然の出会いに感謝しています。

さて、先日「授業改善推進のための研修会」に参加してきました。スタートは OECD の Learning Compass 2030 と、Teaching Compass・Well-being 2040 でした。２年前の自分だったら躓いていたと思いますが、大学院での学びがあるおかげで、講師の先生の説明が頭にすっと入ってきました。大学院で学ぼうという新しいチャレンジをしたことが、別の研修会でも活かされた繋がりに驚き、「生徒の学びと教員の学びは相似形」とは、大人が時間を作って学びの場に出ていくことの大切さを語れる所にもあるなぁと納得しました。（昨年度のマネジメント研修だけでは、掴みきれていませんでした…）

その研修では、①15 年後（2040）に今の高校生が 30 代になって、一緒に社会を形成するときに、どのような人になっていて欲しいですか？小中学生の保護者になったとして、親として何を考えていて欲しいですか？②そのために高校を卒業するときには、どのような人になっていて欲しいですか？③そのために「今の授業で」どんな力をつけていってほしいですか？④そのために「探究的な学び」を深めるための、教科横断的な学習や文理融合された学びが求められていますよね？⑤つまりは授業の改善が必要ですよね？と進められました。「主体的・対話的で深い学び」を生徒たちに体得してもらう、体現してもらう、ためにも、大学院での私の学びが深められているのだろうか？普段の先生との関係・生徒との関係が対話的に探究的になっているのだろうか？と悩み続けた一学期でした。

ということで、自己紹介とさせていただきます。1年間よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース１年（２年履修）/岐阜市立陽南中学校

大前　剛士（おおまえ　つよし）

学校改革マネジメントコース１年目の大前剛士と申します。よろしくお願いいたします。現在勤務している中学校で７年目を迎え，教員としては21年目を迎えました。

教員を志したきっかけは，私が小学５年生時の担任の先生との出会いで，野球を教えてくれる部活動の顧問でもありました。誰よりも（子どもよりも）楽しむ姿に，教師という仕事への魅力を子どもながらに感じたことを今でも覚えています。私自身は小学校から大学まで野球を続けてきましたが、初めての中学校勤務で任されたサッカー部の顧問をきっかけにサッカー熱が高まり，現在では中学生と小学生の息子たちのサッカー観戦に夢中になる日々を送っています。

小学校を２校，中学校を２校と経て，様々な校務分掌を経験させていただきましたが，目の前の児童生徒ばかりを見ていた若手のころと比べ，学校の中で求められているものが変わってきました。特に，昨年度までの二年間を務めた生徒指導主事という役職では，学校が組織的に対応することの必要性を強く感じました。時には先頭に立って直観で動くことも大切ではありますが，組織で動くことによって，問題の長期化や複雑化を防いだり，未然防止につながったりすることを目の当たりにしてきました。そんな職員集団をどのようにつくり上げていくとよいのだろうか。日常からできることは何なのだろうか。今できているのはなぜだろうか。自分自身への「問い」や「意識」が変わってきたように感じています。

「支えてもらう側」から「支える側」，「支え合える組織」へ。

「学級」から「学年」，そして「学校」へ。

今年度は初めての教務主任を任され，学校長の学校経営ビジョンを具現化するための架け橋の役割を果たすことも求められます。そのための時間調整や労務管理も必要となります。

しかし，自分の中で変わらなければという思いが強くなっても，学校の中では目の前の仕事で精一杯になってしまうのは変わりません。そんな状況の中で，連合教職大学院という機会に巡りあえたことは本当に大きな転機となりました。まだ三か月という短い期間ではありますが，月間カンファレンスやラウンドテーブルの中で，同僚ではない，地域も校種も職種も違う方々との対話の時間は，本当に刺激的であっという間に時間が流れていきます。この満足感や充実感を一時の感動で終わらせるのではなく，「語り手」のみなさんが伝えてくださるように，私から同僚に伝えていくことができるものにしたい，そう強く感じています。

学校課題を踏まえた私が取り組みたいことは，「総合的な学習の時間を核とした『探究』と各教科の学習をつなぐカリキュラムマネジメント」です。

現在の勤務校である陽南中学校の特色の一つに総合的な学習の時間があります。三年間かけて身に付けたい資質・能力を明らかにした指導計画があり，生徒たちが手に取って学習を進めていく「学習の手引き」も作成されています。ただし，各教科との関連性が弱く，それぞれで育成したい資質・能力を身に付けているというのが現状です。

予測困難な時代を迎えようとする生徒たちが，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくために，「何が必要で，何が不必要なのか」を精選すること，総合的な学習の時間と各教科で「効率的かつ効果的な指導方法」を見つめ直していくことを明らかにしていきたいです。そして，「それが必要だ」と協働していく職員集団であり続けるための研修の在り方を追究していきたいと考えています。

学校改革マネジメントコース１年/社会福祉法人静岡慈恵会　春日保育園

近藤　直子（こんどう　なおこ）

高校教諭を早期退職し保育の世界に飛び込み 5 年が経ちました。在職中に幼稚園教諭と保育士の資格は取得したものの、管理職として保育の現場で仕事をする厳しさを肌で感じる日々です。

入職し、まず取り組んだことは職員の服務改善と意識改革でした。服務については公務員としての経験から、書類の提出等において厳正化する部分もありましたが、保育記録等、書式の簡略化を通して職員の服務の軽減に取り組みました。ゆとりのある働き方は、ゆとりのある保育に繋がります。結果、時間外労働が大幅に減少し、有給取得率も向上しました。職員の意識改革については、人権の尊重について園内研修や日々の打ち合わせにおいて伝え続けました。

しかし、長く根付いた園の負の部分がすぐに改善することはなく、むしろ、管理職への反発となりました。声の大きい保育士が作り上げるグループシンクは、風通しの良い職場を目指すには大きな障害となりました。そんな悩みを聴いてくれたのが高校教師時代の同僚でした。彼女は私を奈良女子大学付属幼稚園の研修に誘ってくれました。そこは全国から集まる様々な校種の人たちが共に学ぶ場でした。私はそんな学びの仲間の一人になりたいと思いました。職場の外に学びの場があることの意味は、学びの対話の中で、自身の振り返りができることだと思います。独りよがりになることなく素直に他者の話に耳を傾けることで見えてくる世界があるということを知りました。

その後、福井大学のラウンドテーブルに参加するようになって、さらにその思いは強くなりました。

今回、教職大学院で学ぶ機会をいただき、身の引き締まる思いです。共に学ぶ仲間たちと学びを深め、自身の糧にしていきたいと思います。そして、子どもたちが健やかに成長していける園を、園に関わるすべての人たちと作っていきたいと思います。

この２年間の学びが心から良かったと思えるよう、学びの仲間と共に高い目標を持ち、年齢や経験を超えて切磋琢磨し高め合っていきたいと思います。未来を生きる子どもたちのために頑張ります。

学校改革マネジメントコース１年/認定こども園　福井佼成幼稚園

大柳　世津子（おおやなぎ　せつこ）

私は昭和 33 年 2 月 3 日生まれのみずがめ座、67 歳の前期高齢者です。

現在は認定こども園福井佼成幼稚園の園長をしています。前職は福井市立の保育士で、50 歳の時に現在の園に転職しました。当時は福井市初の幼稚園からこども園への移行を考えられている状況で、保育の経験者を探しておられたようです。私が公立保育の限界を感じていた時期とタイミングがマッチし、平成20年にこども園の開設準備段階からの入職となりました。

幼稚園文化の中に身を投じつつ、保育園文化やシステムの導入に考えを巡らしながら、同時に職員の意識変革に取り組みました。平成 23 年の開設を目指してなだらかにハードルを上げていく過程は、悩みながらもやりがいのある仕事であり、全面的にお任せいただいた信頼には感謝しかありません。

あれから 18 年が経とうとしています。10 年前に岸野先生のご縁で、教職大学院を知りました。その頃は保育改革に取り組み始めた時期であり、園内に起爆剤となる職員を求めていました。園が全面バックアップすることを約束し、若いが才能を感じれる職員に声をかけました。院の受験を勧めて見事合格。またまた、マッチングに成功し、保育改革の大きな一歩を踏み出しました。その後、2 年ごとに職員を学び舎に

送っています。そしてついに私が院の扉を開きました。理由は園にこれまでの取り組みを言葉として残したい、その思いだけです。実のところ、ここ数年は体調を崩すことが続き、マグロのような特性の私でも立ち止まざるを得ない状態になりました。立ち止まってみると、まわりの景色に目が留まるようになり、園児・職員・園運営や経営の成長を振り返り、心で感じ取ることができました。老いることも患うことも良い感じです。

最近になって、枯れそうになっていた感性が少しずつ戻ってきました。子ども、大人、植物、動物、虫、物…etc。全てのものにあるキラキラとして存在する光が眩しくてたまらないのです。その光を愛でる時間は幸福感いっぱいです。さあ、光の扉の向こうに何が待っているのでしょうか。ワクワクの 3 年間の始まりです。

学校改革マネジメントコース１年/東明館中学校・高等学校/校長補佐兼教務部長

林田　龍之介（はやしだ　りゅうのすけ）

この度、ご縁をいただき、福井大学教職大学院に新入生として入学いたしました、林田龍之介と申します。現在は、佐賀県にある東明館中学校・高等学校で、校長補佐兼教務部長として学校改革の中心的な役割を担っています。

教員生活は 11 年目を迎え、私の教育観はこれまでの様々な経験によって形作られてきました。元々、明確な「教員を目指したきっかけ」はなかったのですが、幼い頃から昆虫や動物、自然科学が好きだったことが、理科教員という道に私を導いてくれたのだと感じています。

大学時代には、東京学芸大学で学びながら、都内の有名進学塾でアルバイトをしていました。そこでは、偏差値を上げるための教育に触れていましたが、実際に教員として生徒と向き合う中で、「偏差値」という指標の脆弱性に気づかされました。そして、教育における真の価値は、生徒の心に火を灯し、その主体性を引き出すことにあると確信するようになりました。これ以来、「生徒の『やりたい！』という気持ちを挫かずに、いかに教育をデザインできるか」という問いが、私の教員としての軸となっています。

教員生活の出発点となった東明館中学校・高等学校での勤務の途中、人事交流制度を利用して、京都の立命館中学校・高等学校で 3 年間勤務する機会をいただきました。ここで出会った教育観の異なる先生方との議論や、多様な教育実践に触れたことは、私の視野を大きく広げる貴重な経験となりました。

そして東明館に戻ってきた今、私は校長補佐・教務部長として、学校改革とカリキュラム改編に積極的に取り組んでいます。特に力を入れているのは、これまでの日本の教育の常識に一石を投じるような、より生徒主体の学びを追求する学校づくりです。しかし、このような変革は、組織のあり方や先生方の働き方にも影響を及ぼします。組織としてのまとまり、そして先生方がストレスなく、前向きに改革に取り組める環境をどのように創っていくか。これが、私が教職大学院で探求したい大きなテーマです。

また、私は個人的にも様々な活動を通して教育のアップデートを試みています。NPO 法人カタリバの「みんなのルールメイキングプロジェクト」のアンバサダーとして、九州の校則改革をサポートしており、東明館の校則においても、生徒が主体となってルールを見直していくプロセスを進めているところです。

さらに、サッカーの審判員としても活動しており、先月は高校サッカーインターハイの審判として福島県に派遣されました。サッカー部の顧問も務めているため、部活動の在り方についても、これからの時代に合った新しいモデルを模索していきたいと考えています。

私が福井大学教職大学院に出会ったのは、札幌新陽高校の公開研究会に参加した際、研究科長の木村先生にご紹介いただいたのがきっかけです。現職のまま、オンラインで全国の仲間と学びを深められるという点に魅力を感じ、入学を決意しました。

今後は、大学院での学びを「実践と省察の往還」と捉え、日々の教育実践や学校改革を理論的に深めていきたいと考えています。そして、この学びを通じて、東明館中学校・高等学校、さらには日本の教育界全体が抱える課題の解決に、微力ながらも貢献できるよう、尽力してまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。

インターンシップ・週間カンファレンス報告

特別支援学校での学びを活かして
～高校でのインターンを通して見えたこと～

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井県立武生高等学校　小室　祐斗

昨年度、私は 1 年間、附属の特別支援学校にて学ぶ機会を得ました。そして今年度は、その学びを胸に、武生高等学校にインターンとして関わることになりました。特別支援学校と通常の高等学校では、生徒の様子や学校文化も大きく異なります。そのため当初は、自分がどのように関わっていけばよいのか、どこに特別支援での学びを活かせるのか、戸惑いと模索の日々でした。

体育の授業において、ただ体育教師として関わることはもちろん可能です。しかし私は、せっかく特別支援教育で得た学びを、何らかの形で活かしたいと考えていました。授業を見学する中で、「自分の学びがどこで活きるのか」という問いを抱き続ける日々が続きました。

そんな中、ある日、体育の授業前の休み時間に、体育館前で列に並ぶ生徒たちの会話や雰囲気にふと目を向けたとき、ひとつの気づきを得ました。実は、私が授業に参加するにあたって、あらかじめ生徒たちに自己紹介をする機会がなかったため、「あの人誰？新しい先生？でも授業してないよね？」といった声が聞こえてきたのです。

この出来事を通して、私は改めて「生徒との信頼関係」や「日常的なコミュニケーションの大切さ」を強く感じました。良い授業をつくるためには、ただ技術的に優れた授業をするだけでなく、日々のやりとりや関係づくりが不可欠であると、特別支援学校での学びを通して再確認していたからです。

そこで私はまず、生徒たちと打ち解けることを第一に考えました。いきなり「先生」として壁をつくるのではなく、あくまで友達に近い感覚で、気軽に話しかけていきました。普段はフレンドリーに接しつつも、授業中や場面に応じてはしっかりと切り替え、注意すべきところはきちんと伝えるよう心がけました。このような関わりを意識して続けていく中で、次第に生徒との距離も縮まり、信頼関係を築くことができました。

その成果のひとつとして、ある日、担当の先生が急遽出張となり、私が授業を任されることになった場面がありました。そのとき、生徒たちは私の指示にしっかりと耳を傾け、協力的な姿勢で授業に臨んでくれました。そのおかげで、スムーズに授業を進めることができ、関係づくりの大切さを改めて実感する機会となりました。

このように、ここまでの半年間は、授業そのものというよりも、授業の“まわり”にある生徒の様子や関係性に重点を置いて取り組んできました。今後は、私自身が野球の経験もあることから、特にソフトボールの授業に焦点を当て、研究を進めていきたいと考えています。現在は70件以上の先行研究を読み込み、独自の指導理論の開発を検討しているところです。今後は現場の授業をより深く観察し、高等学校における授業実態を把握しながら、研究に活かしていきたいと思っています。

2 年目，インターンシップで何をする？

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市至民中学校　春田　真椰

私が至民中学校でのインターンシップを継続しようと思ったのは、今年度から非常勤講師として働きたいと考えていたためインターンシップ先までも新たな環境にしたくないと考えたからだ。非常勤講師としては週 4 日福井市内の公立小学校で勤務しており、インターンシップとしては週 1 日学生として至民中学校に関わる。この生活スタイルになってから、至民中学校でインターンシップをすることの意味について考えるようになった。そもそも週に 1 日しかインターンシップに行かないため、授業を連続で見ることが不可能になってしまい、生徒との関係性も築きづらくなっている。昨年は理科授業を継続的に追うことを目標としており、それは概ね達成できたと感じている。当初の今年度の目標としては、担当学級を追い子どもの姿や成長の様子を記録する、理科以外の教科にも目を向け先生方による授業の違いや子どもの反応を記録するの 2 点であった。4 月当初はこれらの目標を達成しようと張り切っていたが，いざやってみると正直楽しくない。子どもの行動や発言をメモしてみたり，いろいろな教科の先生にお願いをして授業を見させていただいたりしたが、私は何をしているのだろうという気持ちが日に日に増大していった。そのことについて金曜カンファレンスで話してみると、自分に関わりがあまりないと感じているからではないかと同じ院生から言われた。思い返してみると、やってみようとは考えていたが、熱意を持ってこの目標を立てたわけではなく、これしかすることがないのでは？という感覚で目標を立てていた。理科を中心に頑張りたいと思っている自分にとって、理科を通した子どもの反応は興味があるけれど、国語や数学を通した子どもの反応は自分にとってあまり必要としていないのではないかと気づくことができた。自分に関係があること、やりたいと思っていたからこそ昨年のインターンシップは充実感を得ながら過ごすことができていたのだろう。インターンシップとしての意義や目的を半ば失った状態でだらだらと過ごしていた。

そんな時、教頭先生から個別の支援をしてみないかと声をかけて頂いた。インターンシップで何をするべきか悩んでいた私にとって魅力的な提案で、すぐに引き受けることに決めた。週に 1 コマ分，2 年生の男の子の数学の時間の個別の支援を行うことになった。以下Ａ君とする。Ａ君は昨年から見ていた学年にも関わらずあまり交流したことはない。そしてそもそも個別の支援とはどのようなものなのかがわかっておらず、軽い気持ちで引き受けたのはいいものの不安でいっぱいだった。個別の支援をメインで担当されている先生からは、個別の支援は教科補充の時間ではなく心の安定のための時間、本人が望むことをすることが多い、との言葉を頂き、Ａ君は主に授業で出される宿題をやりたがることが多いとの事前情報を頂いた。

個別の支援初日、まず先週までどのようなことをしていたか，これからどうしていきたいか、将来どうなりたいかなどを話し合った。テストの点数を聞いてみると毎回 10 点くらいとの返事があり、私がＡ君の実力を把握していないため、1 年生の復習プリントを解いてもらった。すると負の数を含んだ計算 1 問目から答えと合わなかった。確認していくと負の数の概念が理解できていない様子で、1 年生の内容から進めていくことにした。1 回目、2 回目は 2 年生なのに 1 年生の内容をやることに抵抗を感じていたが、実際問題を解くと全く解くことができないので渋々受け入れている様子だった。しかし、3 回目の個別の支援の際、テスト週間のためテスト勉強をしようか？と聞くと、今やっている内容がわからないしそもそも加法減法が出来ないといけないから、それをやりたいと伝えてくれた。初めてＡ君の気持ちを感じた瞬間だったし、数学が少しでも出来るようになりたいという意思を感じることができた。その日は

自主的にプラスαの問題まで挑戦しており、出来るようになっていく自分に満足気な表情が見られた。

週に１回の個別の支援の時間だが、回を重ねるごとに確実に成長している様子が見えてきた。今までは授業の様子と学級全体しか見てこなかったが、個別の支援によるアプローチとＡ君の成長の様子をもっと捉えていきたいと思うようになった。インターンシップの目標が定まった瞬間だった。

動き始めた２年目

授業研究・教職専門性開発コース２年/福井県立丸岡高等学校　山崎　真純

教職大学院も２年目になり、早くも前期が終わろうとしている。私は免許取得プログラムを受講しているため、大学院生活の折り返し地点にいる。

昨年までは福井大学附属義務教育学校後期課程でインターンをさせていただいていたが、教職に興味をもったきっかけの校種でも経験を積みたいという思いから、今年度から福井県立丸岡高等学校でインターンをさせていただくことになった。金曜カンファレンスではＭ２として企画を運営する立場になった。私は今、あらゆることが動き始めた真っただ中にいると感じている。

昨年度は焦りを感じる１年間だった。自分が何を軸に大学院での生活を送るのかがはっきりせず、３年間を無駄にしてしまう不安を抱えていた。学部の授業、そして金カンや月カンを通して「この教職大学院では何をテーマに研究していくのか」「自分は何を大切にして授業をするのか」「自分は何に興味があるのか」を考え続けた。しかし考えれば考えるほど、もっと知らなければならないことがあるような気がした。まだ自分には見えていないものや、気付いていないことがあると感じた。そして「授業実践をしてみることで何か分かることがあるかもしれない」と思うようになった。

今年の５月下旬から約１ヶ月間、化学基礎の授業実践をさせていただいた。静かに考え続けた昨年と比べるとかなり目まぐるしい変化のある毎日になったが、行動することで何かが得られる期待感もあった。自分の思う理科のおもしろさを少しでも伝えられる授業にしたいと思った。

しかし正直なところ、授業実践は想像していたよりかなりつらかった。自分がおもしろいと思うものを伝えることはなんて難しいのだろうと感じた。私は日々の授業をこなすことで精一杯で、生徒を見ることはできていなかった。一方的な授業をしてしまっていた。授業を受けてくれている生徒もつらかったのではないかと思う。

しかしそんな苦しさの中にいながら気付いたこともあった。授業は生徒と教師によって作られていくものだが、それは人間と人間とのコミュニケーションであるということだ。生徒のことを見ていない私はコミュニケーションに不具合を起こしていた。生徒を見ていないから彼らのこと知ることもできず、伝えたいものを彼らが受け取りやすい形に作り変えることもできなかった。彼らのことをもっと知りたいと思いながらも関係を構築することに臆病な自分や、「本当はこういうふうにしたい」と思いながらも殻を破ることができない自分にも気付いた。

実践をすることで得られたものを整理するにはもう少し時間がかかりそうだが、自分のもっていた授業観が揺さぶられ、壊される経験だった感じている。この経験があったからこそ、「授業をするとはどういうことか」を以前よりも考えるようになった。それまで知らなかった自分の一面も知った。

授業実践をする一方で、金曜カンファレンス（以下「金カン」）では企画を運営する立場になっていた。１年間を「己」「観」「力」「論」「試」という５つのパートに分けて、前期で「力」パートまで進む。

４月に向けてたくさんの会議を重ねていた春休みは、企画がうまくいくのか不安でいっぱいだった。いざ金カンがスタートした４月は意外にも「始まってしまったのだからなるようになるしかない」という気持ちになった。そして前期が終わろうとしている今、計画した通りに物事が進むことこそがよいわけではないということを感じている。振り返ってみる

と、前期の活動は計画していた通りにはなっていない。しかしそれは、Ｍ１～Ｍ３まで含め今の私たちに合った、よりよい金カンにしようとしてきた結果だ。その時々の状況に合わせて作り上げていくことのよさを感じた。このことはきっと、授業にも言えることなのだと思う。

私は後期からスタートする「論」パートをメインに担当する。これから具体的な活動内容を練るため会議をしていくが、きっと当初の計画通りにはならないのだろうと思っている。どうなるか分からない状況を楽しめるほどの余裕をもてるかは分からないが、柔軟に、視野を広くして向き合っていきたい。

「みんなで美味しいもの食べに行かなきゃ」の話

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井県立武生高等学校　村橋　達也

「うーん，どんな流れで“ここ”に辿り着いたの？」

今年度の週間カンファレンス（通称，金カン。毎週金曜日午後に行なわれているカンファレンスだから。単純。）の中で，必ず思ってしまうものである。

ここで，少し寄り道を。

頭痛がある患者に対して整体すれば頭痛を治せる。だから，病院なんか行く必要はないし，薬漬けの日々から抜け出せるのだ，という主張を聞いたことがある。その根拠は，整体を行なった 1000 人の顧客から得られた，「頭痛の頻度が減った」や「痛みが和らいだ気がする」といった感想であるようだ。

「はい？一体，何を仰っているのですか？」

私の正直な感想である。医療分野においては，EBM: Evidence-Based Medicine（＝根拠に基づく医療）が重視される。これは，治療は「最善のエビデンス」に「医師の経験」と「患者の希望・価値観」を総合的に考えて意思決定を目指す考え方である。整体師の「治せる」あるいは「患者」という表現は正しく，医療行為そのものを指す。医療分野で議論するのならば，当然，最善のエビデンスが求められる。ともすれば，「患者の感想が 1000 人分あるんだ！」は，信頼性が最も低いエビデンスレベル６と言えるだろう。果たして，あの感想が生まれた。

この EBM をモデルとした EBE：Evidence-Based Education（＝根拠に基づく教育）について，私は今関心を寄せている。ここに来る前の私は，ただひたすらエビデンスを求められ，また，研究室に篭ることで獲得したエビデンスを我が物顔で書き並べる日々を過ごしていた。とはいえ，何でもかんでも“エビデンスを！”と声高に主張したいわけではなく，科学的根拠だけを頼りに教育を推し進めていくべきだ，と言いたいわけでもない。「根拠って大事だよね」と言いたいだけ，「どうしてそう考えるの？」にスポットライトを当てたいだけ，という話である。

これは，金カンにも言えるような気がしている。

「今週は特に何もなかったです」そんなわけあるかっ。何も気づけなかっただけじゃないの…？

「話したいこと話せたので満足です」自己満足で悦に入られても…話を聞いているだけじゃ…ね。

各々の語り合いによって展開されることが，学びの深まりにおいて不可欠な要素の一つだと洗脳された私は，このことを最近ずっと悩んでいる。根拠が見えてこない。“ここ”という各々の見解について，「だと思うから」とか「だった気がするから」とか，そもそも背景なく，報告に終始する者もいて，益々よく見えなくなる。どうすべきか？

・根拠のレベルを高める
・根拠のレベルが高そうな語り合いを交わす

やはり，確実な手法によって得られた数値的データが示されれば，納得せざるを得ないだろう。とはいえ，定量化できる確実な手法とは一体…。あるいは，互いに納得できる前提のもとで，各々の見解を示すことは，根拠のレベルを高めることにつながるだろう。では，その前提は，どう構築していくべきものなのか…。ベクトルを変えて，根拠そのものではなく，根拠を共有する手法に目を向けてみる。一方の見解を聞いていてワクワクすることもあるし，自身の見解を伝えるとワクワクすることもある。だから，学会

が成り立つのだろうなと思ったりもする。けれど，そこには，互いに思いを巡らし，また違った見解との出会いがあるような，無意識的な語り合いがあり，それを求め合う者同士が向かう同じ目標があるのだろうと考える。だから，また次の学会に参加したくなるのだろう。誤解を恐れずに言えば，語り合えば学びが深まるし，放っておいても根拠のレベルは高まっていく。少なくとも，熟達者を含んでいれば。そのためのスタッフであり，教育学部だろうと思ったりもする。流石に暴論です。

金カンの中，たくさん資料を読み，たくさん語り合う時間はあった。が，本当に“読めていたのか？”“語り合えていたのか？” でもこれって，個人的納得解を求めているだけで，それってつまり同調圧力？なんて思ったりもする。「私は関係ない」とか「ムカついた」とか「言い返せるようにしなきゃ」とか。なんだか苦しそうな金曜日の中，なんだかんだ楽しんでいるから，それでOK！でもいいのかな。

3年目の学び

授業研究・教職専門性開発コース3年/中藤小学校　永合 祐貴

今年度で教職大学院3年目になる。1年目のころと比べるとインターンやカンファレンスなどで様々なことを経験している。多くの経験をしてもなお、インターンでは新しい気づき・発見が毎日あり、充実した日々を送っている。

今年度は、附属義務教育学校を離れ中藤小学校の1年生でインターンシップさせていただいている。教職大学院1年目にも公立の小学校でインターンシップをさせていただいていたが、その小学校とは学校も子どもたちも大きく違い、その違いを毎日楽しんでいる。中藤小学校では特に縦割り班の結びつきが強いと感じている。掃除や縦割り活動では、6年生が率先してみんなをまとめ、みんなを引っ張っている様子をよく目にする。また、他の班のメンバーもそれを感じ6年生を慕っている様子がうかがえ、子どもたち同士で良い関係を作れている。特に、1年生は6年生に助けてもらうことも多く、6年生の話をクラスですることも多かった。6年生を中心に様々な学年の子供たちがお互いに助け合っており、充実した縦割り活動となっているのを感じている。

また、中藤小学校では、算数の授業もさせていただいた。今まで低学年に向けて授業をしたことがなかったため、どうやって伝えるか、どうやって子どもたちのやる気を出させるかに注力し授業を行った。授業は活動を詰め込みすぎてしまったため、少し授業時間が押してしまったが、それでも子どもたちの反応を見ると子どもたちが楽しむ授業ができたのではないかと思う。次の週にプリントを返したのだが、その時にも先週の授業の内容をしっかり覚えており、子どもたちの印象に残っていることを実感した。さらに、今回２つのクラスで同じ授業をさせていただいた。２つの授業での子どもの反応を比べると、答えのたどり着き方や食いつき方が全く違い、クラスごとに授業を考え、そのクラスにあった授業を展開する重要性を改めて感じた。クラス内での指示の出し方も違ったため、日々インターンをする中で多くのクラスを見て、指示の出し方などにも注目したいと感じた。

インターンシップでの授業実践から、子どもたちの生活や様子が感じ取られた。各学校での学校の様子、子どもたちの様子を比べながら、それぞれの良さを感じていきたい。また、後期からも授業実践を行い、よい長期実践報告書が書けるように尽力したいと思う。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立藍川中学校

伊藤　雄樹

大学院では、「月残業時間４５時間以内で取り組める最大限効果的な学校教育サービスの安定供給と仕事の効率化～効果・効率のリファイン（精製・洗練）を目指して～」をテーマとして、実践に取り組んでいます。

学校現場には、職員として様々な年齢層、勤務形態の職員がいますが、お互いの状況を理解・尊重し合いながら、よりよい教育サービスを児童・生徒に提供し続けることができる学校を目指しています。

そのため、「学校のどの職員が担当しても、ある一定水準以上の教育サービスを提供できる仕組みづくり」をしたいと考えました。

これは、湯水のように時間を使い、教育サービスの質を高めていくものではありません。

月の残業４５時間以内という限られた時間内で、最も効率的で効果的な教育サービスを提供できる学校づくりを目指して、その仕組みはどうあるべきかを研究しています。

そのために、何をこそ時間をかけるべきことなのか、また、どうすると効率的で効果の高い教育実践となっていくのかを考えております。

その一つの取組例として、「藍川中学校版 COCOLO プラン」を作成しました。

文部科学省が令和５年３月に「COCOLO プラン（誰一人取り残されない　学びの保証に向けた　不登校対策）」を通知しました。

これを受けて、生徒に何ができるかを、担任一人でこれを考え、湯水のように時間を使うのではなく、「学校として何ができるのか」を考え、「教員誰でも・教室内外にいる生徒誰にでも対応可能な指導と評価の方法」として、「藍川中学校版　COCOLO プラン」を作成し、誰一人取り残されない学びの保障を、持続可能な形を考え、実践し始めました。

また、三者懇談で「この先生は」と、伝える内容が教師間で格差が生まれないように、事前に教科担任に学習の様子をスプレットシートに入力してもらい、それを生徒ごとにカルテにしました。

こうすることで、どの教員が懇談を行っても、伝える内容に、一定水準以上の質の担保できる仕組みづくりをしました。

また、学校現場は、年々すべきことが増えてきており、そのスキルを身に付けるための研修が必要となります。

当然、研修を行う時間確保が必要となります。

そこで、中体連が終わる９月以降に、６時間目に３年生のみ授業、１・２年生は部活動という時間を取り入れました。

上記の取組を行うと、通常の日課よりも、１時間程度生徒の下校時刻が短くなるため、その時間で、職員研修を行ったり、事務仕事をしたりすることができる時間としました。

このような取組を行っていますが、大学院の仲間と実践を共有した時、新たな課題が見えてきました。

それは、持続可能なのか？ということです。

学校という社会は、年度ごとに人が入れ替わります。

また、時代も移り変わります。

現在実施している取組は、令和７年度の時の取組であって、来年度は来年度で社会情勢が変化し、それとともに学校に求められることも変化し続けます。

その中で、効果的・効率的な教育サービスを安定供給し続けるには、「入れ替わり続ける人の動き」があっても、「よりよいものを生み続けようとする風土」が必要だと考えるようになりました。

「目に見えない風土」

無形の文化である風土を、どのように生み出すのか、メカニカルな方法として、可視化（有形のものに）できるように、今後研究・実践し、長期実践報告にまとめていきたいと考えています。

語り合いながら

学校改革マネジメントコース2年/福井市順化小学校

伊澤　英美

教職大学院で学ぶ日々が２年目を迎えた。自分にとっての教職大学院は、自分に向き合い、実践を振り返り、語り合うことを通して自分とは違う様々な考えに出会える場である。カンファレンスには、もやもやとした迷いや違和感を抱えて参加することも少なくない。しかしながら、いつでも対話を通してもやもやが焦点化したり、考え続ける種を見付けたりし、カンファレンスが終わる頃にはリフレッシュした気分で大学を後にする感覚である。

４月に異動となり、7 年間勤めた社北小学校から、順化小学校勤務となった。教頭として赴任し、これまでの学級担任や教務主任から職務内容が変化したこともあり、新しい環境や新しい役割に懸命に向き合いながら、文字通り右も左も分からずに毎日を過ごしていた。４月のカンファレンスでは、長期実践報告を読み進めながら、新たな気づきがあったような、自分の考えが少しまとまるような感覚を覚えた。自分は、様々な物事をあるがままに受け止めて受け入れる傾向があり、課題や改善点を見つけることが苦手であることが弱みであると自覚している。クリティカルに物事を見つめることを意識し始めたが、なかなかうまくいかない。そんな中、読ませてもらった長期実践報告は、自分とは反対に、よいところを見つけることが苦手だと気づいたことから、学校の強みを見つけて伸ばしていこうと考えられたことが書かれていた。このことから、自分は「そんな視点もあるのか」と新鮮な感覚を覚えた。自分には「課題を見つけなくてはならない」という思考の凝りがあったのではないか、バイアスにとらわれていたのではないかと気付くことができた。セッションを通して、自分の弱みであると思っている部分が強みであると価値づけていただき、考える方向性についての推進力を得ることができた。自分についてだけでなく、毎日の実践に置き換えて考え、本校の強みの素を探り、それを伸ばすという方法を探してみようと新たな視点を見つけることができた。

現任校は、前任校から比べると、児童数は約４分の１、学級は１学年３クラスから単級となり、学校の規模が全く違う。少ない人数の教職員で大規模校と同じ数の校務を担うため、一人当たりの校務分掌の量が多いが、先生方は責任感をもって計画的に進めている。その反面、一人で進めていくため、仕事の内容や悩みが自分以外の誰とも共有されずにいる。よく、養護教諭や栄養教諭のような仕事を「一人職」と表現するが、全員が「一人職」であり、「独り」で職務にあたっているといった感じである。職員間の雰囲気はよいのだが、協働できているかというとそうではないということを感じる。強みと弱みは表裏一体。一人一人の実力に頼るところが大きく、ほんの一部でも揺らぎ始めると実際は脆弱なものであることは否めない。

それ以降、一人一人と対話をしながら、人と人、人とことなど、必要な部分をつなぐことはできないかと意識しながら過ごしてきた。新しい環境で自分自身にできることは何かと考えながら過ごしてきたが、おしゃべりな自分にできることはやはり「対話」であることに気付いた。役割が変われど、自分の強みを生かせること、したいことはこれなのではないかと感じている。対話で得たヒントや違和感を、素早く人につないだり、外部につないだり、職務としてできることにつないだりすることを意識して過ごしている。

ここまでの毎日を振り返って、少しずつ進み始めたことが２つある。一つ目は研究に関することである。対話を通して、研究主任にはしたいと思っている

ことがあることや、どう進めようか迷っていることが分かってきた。つい先日教職大学院の先生方に授業を見に来ていただいた。今年度は継続して協力を仰ぎ、授業づくりや学級経営など、校内研究につなげていきたいと考えている。二つ目は教育相談に関することである。本校にも困り感を抱える児童、支援を必要とする児童は少なくないが、教育相談がシステム化されておらず、チーム体制が取られていなかった様子が感じられる。特別支援教育コーディネーターは、児童や学級の様子、前年度から感じていた課題について話してくれる。自分が教育相談を担当していたことから、本校でできそうなことや、違和感を感じたことなどを一緒に考える機会が増え、相談しながら校内の教育支援体制をとる方向に進み始めた。全職員を巻き込み、つなぎながらチーム体制が取れるように、協働しながら進めたいと考えている。

まずは先生方と自分が対話を通してつながることによって、人と人、人とこと…をさらに必要なところへつなぐことができないか、探っていきたい。

同志を増やすための再スタート

学校改革マネジメントコース２年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

山田　亜都子

大学院２年目がスタートしている。今年度こそは、昨年度の学びを生かしたいという思いで４月を迎えた。昨年度一年間は、カンファレンスを通して多くの先生方と出会い、語り合うことができた。私立学校に勤め、勤務校しか知らない私にとって、知らなかったことを知ることができたり、それまでの自分では考えもつかなかった見方や考え方に触れたりできる教職大学院での時間が、とても新鮮で、楽しかった。その一方で、ずっと変わらない職場と変わらない同僚達の中で過ごしている私は、いざ学校へ戻ると教職大学院での学びをどこかに置いてきてしまったかのように、事を進められずにいることが多かった。つまり、私が知ったことや学んだこと、考えたことなど、教職大学院での学びを実践に生かせなかったということだ。教職大学院は教職大学院。職場は職場。

私立学校特有の「個人事業主の集まり」は、各教員に色々なことが委ねられている本校にも当てはまらなくはない。私自身も、学級担任兼学年主任。そして、学年主任をまとめる学年主任の長（以下、学主長として省略）を務めている。が、正直、学校組織がうまく機能しない中でつくられた学主長が、どんな役目を果たすべきなのかを探っている最中だ。学主長としての課題を一つひとつ解決するために、私は教職大学院で学んでいる。毎月のカンファレンスで出会う先生方には、今までにたくさんのアドバイスやヒントをいただいてきた。カンファレンスでは、どんなに語り合っても、課題や悩みに対する正解はもらえない。けれど、先生方と語り合うことを通して、自分だったらどうするか、どうなら自分にできそうかを自分なりに考えることができる。自分自身の課題にじっくりと向き合い、立ち止まって考える時間が教職大学院での学びとなる。残念ながら、考えたことが、考えただけで終わってしまうこと多かった。しかし、焦り、悩み、そして苦しんだこと、立ち止まってしまったこと、できなかったこと全てをひっくるめて学びなのだと今は思える。

昨年度一年間、学主会の充実を図ろうと私自身、意気込んできた。学年主任の先生方には、主任としての役割と責任をなんてことを考えながら…。学年主任の先生方に学年経営案を作ってもらい、実践し続けてもらった。常に隣のクラスに目をやり、気にかけてもらう。学年主任の先生方に協力してもらうことで、各学年部がつながっていられるようになった。私がお願いしたことをきちんと実践してくれる学年主任の先生方。学年主任の先生方のおかげで学年部のコミュニティができている。ただ、それ以上にも、それ

以下にもならなかった。それが学主長である私の力不足だ。そこから脱出するまでに、ものすごく時間がかかった。自分は何をすればいいのか、どうにかしないと、という焦りから学主会以外のコミュニティづくりも試みた。学主会ではなく、いろんな所にアンテナを張り、方向性を見失ってしまった。「学主長である自分にできること」という自分の立場や考えに収集がつかなくなってしまった。しかし、あるときのカンファレンスで「学年主任の先生をもっと頼ってみればいいのでは」とか、「先生と一緒に頑張れる先生がきっといるのでは」と言われはっとした。仲間と共に頑張ることを目指す私自身が「共に」を一番できていなかったことに気づかされた。同時に、私の実践が学年主任の先生方の協力なしではできないものばかりだということを改めて感じ、考え直すことができた。

私の学びを共有し、共感してくれる同僚が今現在、何人いるのだろう…。「共に頑張ろうと思える同志を」そのために、私自身がもっと仲間を頼り、共に考えるべきだと思っている。今年度、学主会時間の確保を工夫した。学年主任の先生方と共に、それぞれの学年部の先生たちが頑張ろう、学びたいと思える仲間を増やしていけるよう４月スタートしている。

教職大学院での学びをいかす

学校改革マネジメントコース2年/敦賀市教育委員会

松永　敬子

教職大学院での学びが２年目となりました。昨年４月、教育委員会に異動となり、初めての業務への戸惑いや、教職大学院が目指す実践や日常業務との乖離に当惑していた頃をとても懐かしく感じます。入学した当初のカンファレンスでは「やりたかったことができない職場にいる。何を実践し、どう記録にまとめろというんだ！」と、できない理由ばかりを探す、後ろ向きな自分だったとふりかえります。大学院では専門的なことを教えてもらえると思い入学したのですが、思い描いていた学びとは違っていて、自分を語り、他者の実践を聴き対話することの価値がつかめないでいました。ですから、毎回大学院からの帰路は、モヤモヤしたものを抱えてハンドルを握っていました。今は、傍から見たらニヤニヤしながら車を走らせているのではないかと思います。

「今の気持ちや戸惑い、教育委員会でやっていることをそのまま記録していくことが、後に同じような立場になった先生の役に立つから、そのまま記録を」とカンファレンスでかけられた言葉に救われ、変われたように思います。語ったことを聴き手が価値づけてくれ、新たな視点をいただく。それを繰り返すうちに対話することの意味がつかめていきました。

教育委員会に来て、教師の業務がいかに多種多様で大変であるかをより感じるようになりました。学校現場から少し距離があるからこそ見えること、近すぎたら気づけないことがあるように感じています。先日のラウンドテーブルで一緒のグループになった、ある校長先生の「学校経営の支援をできるのが指導主事」という言葉が心に残っています。管理職や学校の大変さを感じ取れる場所にいるからこそ、敦賀市の多くの子どもたちに関わっているという責任をもちたいと思います。指導主事だからできなくなったことを考えるのではなく、指導主事だからできることに挑戦していきたいという思いを強くしています。

そう思えるのは、教職大学院で学んでいるからでしょう。先生方の声を聴き、対話しながらできることを考え実行していく。カンファレンスを通して私のまわりにあったモヤが晴れていったように、対話する時間を教育委員会でもできる限り生み出すことでも、先生方の悩みや困り感が解消され、進むべき道がクリアになることもあると考えています。昨年度は無我夢中で前年度の通りにこなしていた研修の企画

ですが、今年度は意図や目的を考え、グループでの語り合いや対話の時間を確保することを意識するようになりました。「自分が学校にいたら」という視点をもって先生方に寄り添う支援者でありたいと思っています。私がどんな思いで、目の前に子どもがいない役所で業務を行ってきたのかは、長期実践報告でしっかり残したいと思います。まずは、大学院生最後の１年、多様な方と関わり、学べる楽しさを思う存分満喫したいと思っています。

総合的な学習の時間における挑戦

ミドルリーダー養成コース2年/宮古島市立久松中学校

下地　研範

〇はじめに

時が経つのは早いものである。教職大学院に入学して 2 年目になった。教職大学院のカンファレンスで隣に座った先生がふと漏らした「何もしなくても、何かをしても時間は進む」という言葉が、私の心に深く突き刺さっています。

これまで私が経験してきた「総合的な学習の時間」。それは、生徒が主体的に探究するなどという理想とは程遠く、恥ずかしながら教師が敷いたレールの上を走らせるだけの活動でした。毎時間やることを決め、生徒はそれをこなしていく。心のどこかで違和感を抱えながらも、日々の忙しさの中で、それを変える勇気も余裕もありませんでした。

〇転機と挑戦のはじまり

風向きが変わったのは、昨年度、全校生徒 150 名ほどの久松中学校へ赴任し、総合的な学習の時間の担当になったことでした。活気に満ちたこの学校なら、これまでできなかった探究活動に挑戦できるかもしれない。前年度の計画に、生徒が主体的に活動したであろう痕跡を見つけた時、「これはチャンスだ」と直感しました。

学年会議で、私は同僚の先生方に語りかけました。「今年度の１学年も、テーマは前年度に引き続き『持続可能な社会との共生』で進めたいと思います。その上で、一つだけ変えたいことがあります。それは、生徒の『アクションプラン』への取り組み方です」

昨年度のアクションプランは、SDGs について調べ、その課題解決に向けて「宮古島で」「学校の日課内で」実行可能なプランを考える、というものでした。この枠組み自体は活かしつつ、生徒からどんなアイディアが出てきても、まずは受け止め、伴走する。そんな教師のスタンスの変革からすべてを始めようと決めました。

〇実現可能なら何でもいいんですよね？！

隣のクラスの担任の先生から、不安の声が上がりました。「生徒たちだけで、本当にできるものなのでしょうか。どんなプランが生まれてくるのか、私たちに対応できるのか…」

痛いほど気持ちはわかります。何を隠そう、探究活動の経験など私自身にもありません。しかし、ここで引いては何も始まらない。「生徒を信じて、学びの伴走者に徹しましょう」と伝えました。今振り返れば、どの先生も否定的にならず、協力的な姿勢でいてくださったことが、何よりの救いでした。

変化の兆しは、あるグループから生まれました。テーマは「食品ロス」。最初は「学級の皆に問題を伝えよう」で始まった活動が、壁にぶつかります。

「学級には伝えられたけど、次、どうする？」「隣のクラスにも行ってみる？」 「でも、ただ説明するだけじゃ、聞いてくれないかも…」 「じゃあ、面白くクイズにしてみるのはどうかな！」

この一言をきっかけに、生徒たちの対話に熱が帯び始めます。 「先生、実現可能なら何でもいいんですよね？」 生徒の一人が、目を輝かせて私に問いかけます。 「ええ、可能な限り協力しますよ。ちなみにどんなことを計画中なの？」 「クイズを作って、校舎のいろんな場所に貼り出したいんです！学級の

みんなに説明して、みんなでクイズポスターを作成しようと思っています」

そのアイディアが軌道に乗ると、生徒たちの思考は止まりません。それを見ていた他のグループが「私たちも、その方法ならできるかもしれない！」と触発され、主体的な学びの輪が学年全体へと波及していきました。きっかけさえ掴めば、子どもたちの学びは一気に加速していく。その光景を目の当たりにしました。最終的に、このグループはアクションプランの期間が終わった後も活動を止めず、自発的に「フードロス川柳コンテスト」への応募を呼びかけるまでに成長していきました。

〇新たな課題。そして、次なる探究へ

最後の振り返りでは、多くの生徒が「たくさん悩んだけど、アクションプランは色々な経験になった」と語ってくれました。その一方で、「やりづらさもあった」という正直な意見も。理由を尋ねると、「テーマがSDGsの一つに絞られていたこと」だと話してくれました。学びながら思考を発展させたい彼らにとって、テーマの固定が足枷になっていたのかもしれません。

そして今、私はこの１年間の貴重な経験を元に、今年度は久松中学校独自の探究活動カリキュラムづくりの真っ最中です。もちろん、壁にぶつかってばかりです。しかし、そんな時、あの言葉が脳裏をよぎるのです。

「何もしなくても、時間は進む」

立ち止まっていても、時間は過ぎていく。ならば、悩み、あがきながらも、一歩でも前に進みたい。生徒たちの主体的な学びを支える教師のコミュニティをどう作るか。組織としてどう動いていくべきか。今年の夏は、この大きな問いと向き合い、目一杯悩み抜いて、2学期を迎えようと思います。

再び走り始めた私

学校改革マネジメントコース2年/小浜市立小浜中学校　泉　浩

大学院での学びと走ること。そこには共通点がある。いきなり私ごとだが、近頃、再び走り始めた。

中学校、高校と駅伝部に所属していた私は、自分でも呆れるほど毎日よく走った。今思い出しても、目標に向かってがむしゃらに打ち込んだ青春時代は眩しくうつる。社会人になってからも走っていたが、仕事や子育てに奔走するうちに近年は走らなくなっていた。そのような私が、近頃、再び走り始めたのだ。

走ることは、思考を前に進めてくれる。そのため、考えがまとまらなかったり、 何か答えを求めたりしたい時には、走るようにしている。 この誌面の内容も、走っている間に考えた。走った後は、新たな気づきと、心地よい疲労感、達成感が残る。

長々と走ることについて書いてきたが、 走っている時に気づいたことがある。 それは、先述した「新たな気づきと、心地よい疲労感 や達成感が残る」といった点が、大学院での学びに酷似していることだ。カンファレンスで 先生方と対話をした後のそれに似ている。

ここで、昨年１年間の私の学びについてまとめたい。一番の学びは、自分の理想としている学校像がはっきりしたことである。自分の個性を生かして輝いている生徒達、そして職員集団がいる学校である。生き生きとした職員がいなければ、達成不可能なことである。そこに近付くために、自分が今の立場で行った具体策は、以下のものである。

＊５月のカンファレンスで、実践発表をさせていただいたので、詳細については割愛します。

［多様なつながりの創出］

生徒：１日２回のペアトークの実施
　　縦割り体育の実施（前期のみ）
　　異学年での交流活性化（学習・探究）

教師：研修でカンファレンス実施
　　シャベリバChat（非公式Chat）で交流

［価値を認め発信］

生徒：努力が認められる場作り

教師：研究通信の発行（教師の努力を認める場）

［やりがい］

生徒：生徒会長の思いの具現化

教師：起案方法の改善（責任の明確化）
次年度の実行プラン作り
自分ごとの研修に（受け身からの脱却）

［支える］

生徒：委員会で清掃改善を実行（委員を支える）

教師：縦割り探究の導入（担当教諭を支える）
機能する組織づくり
（プロジェクトチームの結成）

大学院での学びは２年目に入った。２年目になっても、対話を通して毎回新たな気づきを私にくれる。対話しながら、自分の内にある考えに気づく喜び。それにより、自己を肯定することの気持ちよさが残る。

まもなく、２年間の学びの終盤が訪れる。自分の学びを長いスパンで振り返り、アウトプットする必要がある。おそらく、走る機会は格段に増えるだろう。

そう言えば、なぜ、近頃 走り出したのか書いていなかった。思考が進むことはもちろんだが、一番の理由は、迫り来る歳の波に抗うためだ。まだまだ、若い気持ちで頑張りたい。そんな自分の心の表れである。いつまでも心は若く、生き生きと頑張りたい。

「ことば」と「つながり」を育ち、「居場所」を作りたい

ミドルリーダー養成コース2年/越前市立武生第一中学校

Santos Tiago

教職大学院に入学し、あっという間に２年目に突入した。中学校で外国にルーツを持つ生徒の支援と日本語指導を担当し、毎日を過ごす学校が「自分らしくいられる場所」にしたい。そのため、現在私は「ことば」と「文化」に関わる３つのプロジェクトに取り組んでいる。

昨年度より取り組んでいる「多読プロジェクト」はその一つである。日本語学習者向けの絵本や読みものを揃えた図書コーナーと、オンラインのデジタルライブラリーを活用して、生徒たちが自分のペースで読み、学べる環境をつくっている。今は授業の冒頭に一冊読み、音読する時間を設けているが、私が直接関われていない生徒の参加が減ってしまった。読書が「個人の学習」だけではなく「みんなの活動」となるような仕組みづくりを模索中だ。

５月からは、ようやくポルトガル語クラブもスタートした。その活動はブラジル出身の生徒たちが対象、彼らが母語とするポルトガル語に触れられる場所である。ポルトガル語クラブでは詩の掲示板や言葉遊びの時間などを通じて、自由に表現できる空気を大切にしている。最初は反応が少なかったが、ある日、一人の生徒が自分の詩を書いてくれたことで、少しずつ他の生徒たちも動き出した。言葉には、人を動かす力があることを改めて感じた。

もうひとつの取り組みは、日本人生徒と外国人生徒が気軽に言葉や文化を楽しめる昼休みの「インターナショナル・カフェ」という交流の場である。ALTの先生たちと一緒にゲームをしたり、短い映像を観たりする。言語への不安が原因かも知れないが、ゲーム類活動には参加者はまだ少ない。しかし、映像をきっかけに来てくれる生徒がますます増えているから、生徒たちの手応えに合わせて活動を工夫し、続けていきたいと思う。

これら３つの取り組みに共通しているのは、生徒一人ひとりが「受け入れられている」と感じられるような、安心して過ごせる空間をつくることだと思っている。言語や文化の違いがあるなかで、日々の学校生活で疎外感を持ってしまうことは少なくない。だからこそ、母語を使えたり、自分のペースで読書ができたり、誰かと笑い合える時間があることが、彼らの心の安定につながるのではないかと信じている。小

さな取り組みかもしれないが、そこに「大丈夫だよ」と伝える力があると感じている。

それぞれの活動を考えたり、生まれる課題を克服したりするのは簡単ではないが、教職大学院での話し合いを通して他のメンバーとのやり取りの中からヒントになるものをたくさん得た。また、他の院生や大学院の先生はいつも私の実践に耳を傾け、努力を認め、励ましてくれる。その存在が、私にとっては大きな支えであり、次の一歩へのモチベーションにもなる。外国にルーツを持つ生徒の「居場所」をつくるにはどうしたらいいのか、これからも考えていきたい。

7月ラウンドテーブル報告

知らぬ世界で、知っている人の知らない姿に出会う

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

藤岡　真子

教育という小さな世界に閉じこもってばかりいる私にとって、ラウンドテーブルはその小さな世界から飛び出し、知らぬ世界に旅に出る時間である。知らぬ世界の知らない物事に出会い、知らない世界の人々に会う。そんなドキドキワクワクな2日間の旅を通して、私の心が動いた時はいつだっただろうか。実践報告をした時？他の方々の実践報告を通して、知らない世界に触れた時？それともZONE Eのクロスセッションの時だっただろうか。

今回のラウンドテーブルという名の旅で、意外にも1番心が動いたときは、知らぬ世界の知らない人や物事に出会った時ではなかった。一緒にこの一年半歩んできた仲間の知らない姿を見た時、そしてその姿を歩んできた仲間と語ることができた時間だった。

今年のZONE Eは「誰もが挑戦（チャレンジ）できる学校は作れるのか」という題のもと学びと教えの新しいすがたカタチを考えるというものだった。そして、今回嬉しいことに私たちM2が金曜カンファレンスで企画・運営している内容と重なる部分があるということで、一緒にそのZONE Eでの活動を作り上げていく運営に参加しないか、と院の先生方から声がかかった。

ここでZONE Eの内容と関連する私たちM2が金曜カンファレンスで向き合っている問いについて少し話そうと思う。その問いというのは、「子どもになぜ学校に来ないと行けないの？と聞かれたらどのように答えるか」というもの。この問いは、ある院生がインターンでの経験から私たちに投げかけから始まった。そしてその問いと思いに深く共感したもう1人の院生が、みんなで一緒にこの問いに向き合いたいと語ってくれた。彼女は、投げかけた彼と投げかけられた私たちを繋いでくれた。そうしてM2のみんなの心に火をつけたのは、間違いなくその彼と彼女の2人である。

そんな問いの火付け役2人をはじめとする3人のM2がZONE Eの運営に名乗りをあげた。私は、残念ながら金曜カンファレンスの運営があったためその作り上げの運営活動には参加はできなかったのだが、火付け役の2人が参加すると聞いたときは、とても嬉しかったのを覚えている。この内容に一番力を入れているのは俺、私しかいない、そしてそれをM2のコミュニティに還元できるのも、俺、私しかいないと誇らしげに打ち合わせに向かっていく彼らの後ろ姿を見送るのは嬉しかった。それぞれがこの大学院で、M2のコミュニティで自分にしかできないことを見つ

けて、生き生きと輝いていて。そんなコミュニティに私たちM2はなれているのだ、と。

ZONE Eの活動中、名乗りをあげた3人の姿はキラキラ輝いていた。私の知らない姿がたくさんあった。つなぎとして即興的に周りを巻き込みながら語っている姿。司会3人のバランスを考えながら、自分の役割を調整する姿。そこに集う参加者の声を拾おうと奮闘する姿。そして何よりもその時間を全力で楽しんでいる姿に目を奪われた。そして勇気をたくさんもらったように思う。その中でも、火付け役の彼が最後に語っている姿が一番印象に残っている。彼は最後にそこの集う参加者に向かってこう語った。

「この場が僕にとってそもそも挑戦なんです。この場での司会するとなったとき、同期に言われたんです。お前が司会するの？って。だからこの場が僕にとって本当に挑戦なんです。でも挑戦してよかったなって今思います」

私は感情がグッと湧き立つ感じがした。彼の持っている思いが潰されず、その上M2のコミュニティ意外の違う場所で挑戦した彼の姿として彼の魅力が輝いていた。もちろん、彼自身が持っている勇気がそのとき見た彼の姿の支えであったに違いない。でもそのとき、私たちM2のコミュニティは、彼の思いを知らぬうちに支えることができていたのだと感じたのである。私がそう感じたいと思っている部分もあるかもしれないが。

ZONE Eが終わった後、M2の中で仲間の成長と新たに知った姿を語る言葉がたくさん存在していた。

「〇〇のつなぎの語りすごかったよね、話はうまいと思っていたけど、あそこまで上手だと思わなかった、やっぱりすごいなぁ」

「最後の〇〇の語り感動したよね。わかるよ、司会とかに挑戦する感じじゃなかったもん。でも挑戦しようと思ってああやって司会して。成長っていうか、なんかすごく・・・いい姿だったよね」

「私は司会の方だったけど、参加者としてきてた他の同期の姿に感動したんだよ。知っているみんなの魅力を改めて感じてさ」

ZONE Eの活動を通して、そこには、自分にしかできないことを誇らしげにやれる、一人一人の魅力がM2のコミュニティ以外の違う場所で輝くことができる、そしてその姿を互いに尊重し合える、そんな文化が確かにあった。

それは私が1年半抱き続けていた思いの表れだった。一人一人の魅力や思いを潰したり、無理やり変化させるコミュニティにはしたくなかった。一人一人の熱量で入れられる、それぞれの熱量を理解し合えるコミュニティにしたかった。一人一人が自分だからできることを実感できるコミュニティにしたかった。そんな思いを私は持っていたのだとその文化を実感することで知った。そして、私はずっと不安だった。1年半M2のコミュニティをどうにかこうにか手探り状態で作ってきたけれど、その成果、つまり私がしてきたことはいつも霧がかかったように見えなかった。でも進むしかなくて。いつしか先輩に言われたことがある。あなたが仲間のために、コミュニティのためにしてきたことは、表に現れることは少ない、だから不安になると思う、と。その通りの1年半だった。でも今回私がしてきたこととを仲間の姿に見た。手段としてしてきたことは少ない。ひたすら相手の思いを聴き、そして、相手を受けて私が何を思い、何を感じたのかを伝えていたぐらいである。しかし、その抱き続けていた思いが日頃の行動に滲み出ていたのだと思う。そうやって、私は私の思いを周りの仲間に伝えていったのだ、と。私にしかできなかったことを仲間の姿から実感することとなった。

私にとってラウンドテーブルとは、知らぬ世界で、知らない物事、知らない人に出会う旅であった。今回の旅は違った。知らない世界で、知っている人の知らない姿に出会い、自分のしてきたことをその姿から教えてもらう、そんな旅だった。

次のラウンドテーブルはどんな旅になるのだろうか。

The Roundtable in Review

ミドルリーダー養成コース2年/Ono City Hall Caleb Dykens

I believe it can be stated plainly that the July 6th roundtable was a resounding success. I'd like to thank all the hardworking faculty for planning and executing an incredible informative event. For this year's July roundtable, we had the fortune of being joined by many educators from around the world. Fukui University has been incredibly adept at bringing in people for various backgrounds.

The Sunday roundtable was a time of sharing experiences and ideas. My group consisted of myself from America, Victoria from the Philippines, Irene from Malawi, Pearl from Botswana, and Yasmine from Egypt. Our main speakers were Victoria, Irene, and me.

I began our discussion with my speech about the work I've been doing since joining the Fukui University graduate program as well as my history as a teacher. To prepare for my presentation I made a couple dozen slides and wrote my notes in PowerPoint. I was given 140 minutes to give my thoughts as well as field questions from my group mates. Due to the length and importance of this speech I was quite nervous before the roundtable, but as we all gave our self-introductions in the morning, I realized everyone in my group was very kind, understanding people and my nerves quickly quieted.

For my history, I put the majority of my focus on the teachers and classes that made impacts on my life. The teachers who were supportive and made classes fun were the ones I remember fondly and led me towards a future in academics. The teachers who belittled me and saw me as a waste of effort when I was struggling delayed my progress and hurt my chances of growing into a better teacher. However, thanks to these few bad apples, I have experienced the kind of teacher I never want to be. At times when I'm in class and feeling frustrated I can look back on my own past to empathize with my students. It's then that I think about how my good teachers would address a difficult situation and try my best to follow their example.

The focus of my studies since joining Fukui University has been to examine the role of an ALT and how to improve how we interact with students and teachers. My interests in education have also led me to begin studying the history of English in Japan and why so many ALTs are dissatisfied with English education in the country as a whole.

I'm an elementary school ALT for the city of Ono. I travel to 9 schools throughout the year, which allows me to experience many different classroom atmospheres and teaching styles. From teacher personalities to class sizes, everything becomes a factor as to how the students approach English class. I've found that classes that put the majority of their effort into communication and speaking enable ALTs to thrive the most. When classes focus heavily on completing textbook work, ALTs are often used as speaking dictionaries. One of my JTEs has been promoting the idea to his students that 'English is communication' and I can't be happier with how he conducts class. He focuses a lot of his effort into making sure the kids are comfortable speaking and interacting with English in class. He will gently guide the students into using the correct grammar, but if the child is trying their best while using broken English, he will give them a smile and tell them good job. The students have begun following his example and give their classmates words of

encouragement and helping them with their grammar when possible. It's difficult to overstate how positive of an English class this has become. I can proudly say that those 6th graders *can* speak English. For the remainder for the year, working up towards my Long-Term Practice Report, I want to explore why if these 12-year-olds can do it, why do so many Japanese adults believe learning English is an impossible talk to overcome? I look forward to continuing my studies on this topic.

The second presentation we had was Victoria's introduction of her school, Tinajeros National High School, in the Philippines. She is the proud principal of her school. Tinajeros takes in students from the 7th grade all the way to the 12th grade. In recent years they have been experiencing a huge influx of students from the surrounding 4 Barangay (districts). To compare the older class sizes with the newer ones, the 12th graders have 197 students while the new 7th graders have 731! The school is currently educating an impressive, (and daunting), 3096 students split evenly between boys and girls.

The school has been doing its best to accommodate students with busy lives who may need a more flexible schedule than a traditional academic career. Of course, the majority of the students are taking normal classes, but Tinajeros has begun offering home schooling materials to parents, weekend classes, and online – asynchronous classes. They are calling this Project REACH (Reinforcing Engagement in All Curriculum Horizons).

The community has recognized the importance of secondary schooling and local businesses, and community groups have been donating sizable sums of money and equipment to help better the futures of their kids. The local government, in tandem with NGOs, are also making generous contributions to the school. I'm very curious to see how Tinajeros high school continues to grow in the future, and I hope we can hear from Victoria again.

Our third presentation was from Irene of Malawi. Irene was one of the Zone D key presenters on Saturday as well. In our Sunday discussion she focused on the story of her academic history as well as her thoughts on Japan. Irene is the head teacher of a secondary school that teaches form 1, which starts at 9 years old, to form 4.

As a student, she has been studying hard to earn as many scholarships as she could because her family was struggling financially after her father passed away. She finished school within the top 10 of her class. When she wasn't studying, she was working and earning a salary to afford her schooling. After graduating she wanted to continue on to university but chose to first get teaching experience and went to teacher training courses.

She taught elementary school for 5 years but wanted to eventually become a senior teacher. She applied and passed all the exams and was able to fulfill her dream. Now, she came to Japan to learn about the new teaching methods we are discussing at Fukui University.

She was impressed with the sense of community that both adults and children have in Fukui. Seeing the children cleaning their school made her feel that the kids were proud of their education. The cities in Japan are also very clean and the Japanese sense of personal responsibility of keeping spaces picturesque is very impressive.

It was really fun talking with our guests at the roundtable and I hope to see them again soon. It would be great if other schools could experience the great ideas we are sharing in Fukui. I hope the rest of Japan as well as the world continue to improve their education systems through good communication.

全国の仲間と学びが広がる

学校改革マネジメントコース2年/岐阜県瑞穂市立生津小学校

野倉　理志

教職大学院 2 年目となり、はや 4 か月目に入りました。前年度までは、福井教職大学院での参加を主にさせていただき、福井県の教職員の皆様、また教育関係者の皆様と語り合うことを進めてまいりました。

M1 のラウンドテーブルやクロスセッションを通じて、岐阜県にはない斬新な考え方や、私自身の実践にアドバイスをいただくなどを通して、語ることの大きな楽しみを得ることができた 1 年目だったと感じています。

昨年度 2 月 2 日の長期実践研究報告会ですが、私自身の仕事の都合によりオンライン参加をさせていただい時がありました。この頃は、次年度の長期実践記録をどのようにまとめといくべきかを悩んでいたため、皆様がどのようにまとめられたのかが非常に興味があり、またそこから自分自身の答えを出そうとしていたことを覚えています。

報告会の 1 番手は、札幌新陽高校の号刀悠貴教諭が発表をしてくれました。号刀教諭は勤務校にてワインプロジェクトを通したご自身の実践を省察した発表でしたが、自分が一貫して何をしたいのかに悩み、最終的に「『あなたと働きたい』それが、私自身の教員としてのしたかったことである」ことを語られたことが強く心に残りました。

前述したように、この頃の私自身は長期実践報告をどのように書けばよいか悩んでいました。と、言うよりも、「自分自身は何を柱に書けばよいのか。」、「何がしたいのか。」が全く見えていませんでした。しかし、号刀教諭の言葉で「そうだ、自分もいつも学校のために働きたい」と思い、「学校を創りたい」という自分の気持ちに気付き、これまで様々な分掌の仕事をしていたことに気付かされました。

福井大学教職大学院のラウンドテーブルに参加しなければ、自分の教師としての原点に立ち戻れなかっただろうと思います。またそれはオンラインを通じて全国の職を同じくする仲間と語らなければ分からなかったことだと、ありがたく感謝をした日でした。

そのような体験があり、2 年目からはオンラインを主にラウンドテーブルに参加をさせていただいております。

さて、M2 になってからですが、私自身は、役職が教頭となり、勤務校が変わるという大きな変化がありました。また、悩みの日々が始まったのです。

現在の私は、「管理職としてどうするべきか」、「どう接すれば、職員が生き生きと仕事に向かえるだろうか。」常に考えています。管理職の立場は、今までの教諭時代の仕事ぶりではうまくいかないことが多く、一人職であるためなかなか相談できないことを常に悩んでいます。

7 月 5 日のラウンドテーブル、クロスセッションでは、同じ役職、教育行政の方々とグループを設定していただけたため、管理職として、研修をどのように進めるのか、職員とどのように接するのかを学ばせていただきました。

その中で板橋区教育支援センターの堀内正和統括指導主事からは、Plant システムの導入に伴い、新しくセンター内の研修を改革していることについて話していただきました。その内容の中に、初任者研修に中堅資質向上研修を合わせることで、違った年齢同士の語り場を設定する取組や、研修主事と管理職が参加する研修を設定することで、普段話すことのない立場を合わせる取組をしていることを教えていただき大変勉強になりました。

また、石川和之教頭からは、PTA が廃止され、代わりにどのように地域と連携し、学校を運営していくのかを、悩みながら進めている状況を聞かせていただきました。そこから今後の勤務校での PTA 組織や運営の仕方について考える機会をいただきました。

自分自身の近くの同僚や、上司と語ることも大きな力となりますが、他県の考え方や教育観を聞くこ

とで、全く違った世界と学びが広がります。皆様もオンラインセッションをしてみてください。そして、全国の仲間たちと多くの学びを進めていきましょう。

ラウンドテーブル・クロスセッションでの学び

学校改革マネジメントコース2年/福井県立若狭東高等学校

細川　和孝

ラウンドテーブル初日の特別フォーラムにおいて、文部科学省大臣官房国際課長 大野彰子先生より「日本型教育の海外展開 現状と展望」についてのお話を聴かせていただき、改めて日本の教育を俯瞰して見ることで、多くの学びを得ることができた。

知徳体を一体的に育む全人教育、協調性、規範意識、社会性を育む教育、学び続ける質の高い教師、質の高い授業と改善など日本型教育がこれまで培ってきた強みや良さがある。それを生かせば国際社会への貢献ができるということに感銘を受けた。普段、現場で生徒と向き合っていると、大きな視野で日本の教育を考える時間は少ないが、我々現場の教師が日本の教育の良さを実感していて、誇りと希望を持ちながら生き生きと働き学び続けることが大切だと思った。その実践の積み重ねが日本や世界の子どもたちのより良い未来につながると信じて、これからも日々精進していきたい。

ＯＥＣＤシュライヒャー局長は「日本の教師は、どの生徒も伸びると心から信じて、一人一人に適切なアプローチを見出している。教師が献身的な努力をしている」「教師が授業をするだけでなく、生徒のコーチやメンターなどさまざまな役割を担い、生徒のあらゆる側面を熟知している」「授業改善などで教師同士が協力する組織文化がある」「同じ学級で生徒同士が協働することに重きが置かれていたりする」と日本の教育を分析している。これが正に日本の教育の良さであり強みであると思う。私がこれまでに出会い学んだ先生方の多くが、生徒の成長を信じて粘り強く支援され、献身的な努力をされていた。授業の内容はもちろん、教師との関わりの中で多くを学び、感じ取り、教師の姿を見て子どもたちは育っていく。多くの子どもたちにとって親の次に身近な大人、社会人は教師であり、その教師の志や生き方を子どもたちはよく見ている。

午後からのSessionⅡ zoneＥ 探究:学びと教えの新しいすがたカタチをみんなで考える「誰もが挑戦できる学校はつくれるのか？」では、県内の中学生、大学生、行政の先生、埼玉県高校の教頭先生と同じグループであった。それぞれに挑戦したいことや挑戦に立ちはだかる壁について語り合った。話し合いの中で大事だと思ったのは、挑戦の中で壁を乗り越えていくためには協働してくれる仲間の存在が欠かせないということだ。仲間づくりをするには縦横斜め（先輩後輩、先生、友人、社会人）に自分の思いを語り、関係性を育てること。そして、そこにコミュニティができ仲間が広がっていけば、挑戦を支えてくれる大きな力となる。また、もう一つ大切だと思ったことは、挑戦できる環境・場づくりだ。挑戦と失敗はセットであるという認識を持ち、心理的安全性をつくること。そもそも失敗とは経験であり発見だという捉え方をコミュニティで共有できていることが挑戦できる場づくりには必要だと思う。

今回のラウンドテーブルでの気づきや学びを生かし、本校でも誰もが挑戦できる環境を仲間と協働しながらつくっていきたい。

二日目のSessionⅢクロスセッションでは、私は語り手として、工業教員としてのこれまでの歩みと今年度１年生からスタートした本校工業創造科の新カリキュラムの実践展開について話した。また、横浜市中学校の先生からは、パナマ、ウズベキスタン、パラグアイなどで日本語と日本文化を教えてこられた実践について聞くことができた。そして宮古島市小学

校の先生からは探究の挑戦と算数専科としての実践報告を聴かせていただいた。

クロスセッションをふり返ってみて、それぞれの実践報告に共通していたことは、地域に根差している文化、日本文化の良さや愛する気持ちを、探究やカリキュラム、海外での教育実践を通して、子どもたちに伝え育んでいることだ。私は、現在取り組んでいる工業科の学科再編と新カリキュラム実践が、地元生徒の育成と若狭地域の発展につながると考えているし、横浜市中学校の先生は、日本の文化（調和、武道、祭り）を他国の人々に知ってもらうことで、将来のより良い世界を創るための仲間ができ、協働して未来を創ることを考えておられるのだと思う。また、宮古島市小学校の先生の地元食材を使った探究の取り組みでは、探究を通して子どもたちに郷土愛を育んでおられ、それが今後の地域の活性化や発展につながると感じた。さらに算数専科として、地域ならではの子どもたちの課題や苦手を克服しようと挑戦されており、それが基礎学力の定着とより良い探究につながっていくことと思う。

今回のラウンドテーブルを通して、我々教師がそれぞれの立場での教育実践を語り合い、共有し、協働探究していくことが、やがて地域や日本、世界をより良くしていくという希望をもつことができた。それを今後の原動力としたい。

実践研究 福井ラウンドテーブル 2025 Summer sessions

学校改革マネジメントコース2年/埼玉県立松山女子高等学校

黒田 勇輝

はじめに

令和７年７月５日（土）、６日（日）、「実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Summer sessions」が福井大学対面及びオンラインのハイブリッド形式で開催された。

内容は、７月５日、SessionⅠとして「教職大学院改革特別フォーラム」、その後 Poster session Ⅰ及びⅡ、SessionⅡとして「学校・教育・地域を考える６つのアプローチ」、ＡからＥの Zone に分かれた協議、７月６日（日）は、SessionⅢ【Round Table Cross Sessions】「実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る」というもの。

私は、学校改革マネジメントコースのＭ２として、初日の SessionⅡでは、ZoneＡ（学校）「子供の主体的な学びを支えるコミュニティ～主体的な学びのプロセスを問い直す～」のファシリテーターを務め、二日目のラウンドテーブルでは、３名の報告のうち３番目１００分の報告を行った。今回のニュースレターでは、その概要とともに強く印象に残ったことを報告する。

１　基調講演としての特別フォーラム

SessionⅠの特別フォーラムは、「教育改革のための国際協働への展望～日本の役割と課題、そしてパートナーシップ発展の可能性～」というテーマで行われた。日本がこれまで進めてきた海外の教育の支援・連携について、日本における教育改革のための国際協働の現段階を確認しつつ、今後の展望をひらく機会としたいというのがテーマの趣旨である。

その後、テーマへの基調講演ともいうべきお話、「日本型教育の海外展開－現状と展望」を文部科学省大臣官房国際課長 大野彰子氏からいただいた。

いわゆる「日本型教育」、つまり知・徳・体のバランスの取れた初等・中等教育、理数科教育、ＩＣＴ教育、特活における非認知能力の育成、教職員同士の授業研究など、海外では関心が高いという。その日本型教育の海外展開として、EDU-Port ニッポン 2016 の取組や OECD の「ラーニング・コンパス」、「PISA2022」などについて紹介していただいた。レジリエントな教育制度により全ての子供たちの可

能性を引き出す日本の教育、そして授業研究という形が諸外国から注目されているという。

今後の展望としては、これまでの EDU-Port（2016～2025）の主なアウトカムとして、①日本教育の国際化による学校現場の教育の質の向上、②日本の教育産業の国際化の加速、が挙げられていた。

我々が日々取り組んできた実践が「日本型教育」として諸外国から評価されていることは、日本人として誇らしいことである。今、その日本型教育を海外で展開し、そこから改めて新たな気付きを得ることでそれぞれの学校改革につなげていければと思うのである。

２　Poster Session　～自身の実践を語り、新たな気付きを～

Session Ⅰの後は、２名の先生方により Poster Session が行われた。一人目は岡谷市立川岸小学校横井杏香先生。「子ども同士の関わりを通した保小連携の在り方」と題した発表。川岸小学校と二つの保育園の連携の実践報告であった。その中で、発表者は、「今後に繋がる保小連携とは」という問いを立て、研究会や福井大学教職大学院でもセッションしたようである。そこで得られたアイデアや気付きを今後の展望として提示していた。「今後に繋がる保小連携とは」の方向性は、「子供たちの自然な出会い」「先生同士の連携」「１年生から保育園の子供たち」といった様々なアプローチによるアイデアであった。小１プロブレム対策の取組として、すばらしい実践であると思った。

二人目は琉球大学・斉藤美和先生。「ラオスの子どもたちと地域科学を創る」と題した発表。社会主義国・中央集権体制で５０以上の民族・異なる言語のラオスにおける教育支援の実践報告であった。日本式の学習指導案を用いた実践教育の指導書づくりや教員対象のワークショップなど、厳しい状況の中での実践が語られた。そんな中でラオスの教員が大いに変容していく様子が語られた。今回の特別フォーラムのテーマにあった、正に日本型教育の海外展開の実践である。

３　SessionⅡ「学校・教育・地域を考える６つのアプローチ」

第１日の午後は、ＡからＥの各 Zone に分かれて「学校・教育・地域」を考える Session であった。

ZoneＡのテーマは、「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」～「主体的な学び」のプロセスを探る～であり、最初に対面・オンライン共通の話題提供者である亀岡市・かめおか乳幼児教育センター所長の中井佐栄子先生から「こども給食研究会」の実践報告があった。

子どもたちと園長先生の日々のやり取りのエピソードが、楽しく報告された。中井先生は、子供たちとのやりとりの中で、「おいしく食べるってどういうこと？」と質問する。子供たちはこの質問に答えられると思うかと我々参加者に投げかける。中井先生の答えは、「ＹＥＳ」。中井先生は、子供たちにいろんな質問をするという。そして、その答えが「おもしろい！」と言って吹き出しながら、そして「すごい！」といって感動しながら、お話してくださった。中井先生は、楽しくなるように質問するとおっしゃっていた。

次なる話題提供者として、福井大学附属義務教育学校・教諭の佐々木庸介先生の実践報告。福井大学附属義務教育学校での中学生理科の探究活動の実践報告であった。子供たちと共に協働探究する授業を支える力をどのように培っていくのかということが話題となった。

その後、対面とオンラインでグループセッションが行われ、私は、オンラインのグループでファシリテーターを務めた。グループメンバーは、様々な学校種や職の方がいらっしゃって、話題提供者の実践報告を踏まえて多くの意見が出された。

「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」について、それぞれの学校等の組織やコミュニティの現状や研修の在り方、個々の教員同士のコミュニケーション等々、様々なセッションがなされた。また、「主体的な学び」のプロセスという点については、話題を提供していただいたかめおか乳幼児教育センターの中井先生の実践報告が、大変参考となり、

子供たちの発意というものを教師が引き出していくことの重要性を改めて確認した。

４　SessionⅢ「ラウンドテーブル」

第２日は、終日ラウンドテーブルが行われた。昨日の特別フォーラムやそれぞれの Zone でのセッションを踏まえながら、実践報告を含めクロスセッションが行われた。グループの構成は、実践報告が３名。100 分、60 分、100 分を分担する。聴き手が２名、ファシリテーターが１名。ここで私は、３番目 100 分の実践報告を担当した。

私が行った実践報告は「現任校での実践～１年間の取組～」と題して、以下の内容で行った。

はじめに　①自己紹介　②現任校について
１　ベクトル合わせのスタート「学校経営方針」
２　生徒に自己有用感を持たせたい「校長表彰」
３　地域カフェと連携したアントレプレナーシップの取組
おわりに
①　福井大学教職大学院での学び
②　現任校での学校改革マネジメントの展望

おわりに

以上が今回の「実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Summer sessions」の概要である。普段の教職大学院のメンバーに、外部の方々も多く参加され、さまざまな立場から学校・教育・地域を改めて考える機会として、大変有意義なイベントである。

その中で私自身、ファシリテーターや発表など、このイベントに深くかかわることで大いに前に進むことができた。実践報告するに当たり、今までの自身の実践を省察することで新たに見えてきたものがあった。現在自身が行う学校マネジメントの原点はどこなのか、どうしてこのような結果に至っているのか等々。今まで考えもせず、であるからぼんやりもしておらず、それがこの１年間でぼんやり見えてきて、いざ発表し、そしてこれから長期実践報告を書いていこうとする今、ぼんやりから徐々にクリアになってきているという実感である。

学びを支える対話の力

学校改革マネジメントコース2年/勝山市教育委員会こども課

木下　恵美

今回で３回目となる「実践研究　福井ラウンドテーブル」。毎回、始まりは少し緊張感が漂うが終わる頃には「あっという間だった」と感じる充実した時間となっている。今回私が参加した Zone A では、「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ～主体的な学びのプロセスを問い直す～」をテーマに二人の先生による実践発表が行われた。

まず、亀岡市亀岡乳幼児教育支援センターの中井佐栄子先生から、かつて勤務されていた亀岡市立第六保育所での給食を通した実践についてのご報告があった。日々の給食の場面を通じて、子どもと丁寧に対話を重ねてきた様子が印象的で、発表の中では子どもたちのつぶやきがいくつも紹介された。

たとえば――

・味付けの話になった時、園長「味付けって何？」→子ども「めっちゃ味がある」「ピーマンは魔法が溶けやすい」

・給食に隠し味があることを知った時→子ども「砂糖は隠れてるけど、カレーはばればれやな」

・普段使っているお箸について、園長「お箸って何？」→子ども「汁がついて舐めたらおいしい」

子どもたちの言葉の一つひとつに、「子どもって本当にかわいいでしょう」と目を輝かせながら語る中井先生の姿がとても印象的だった。子どもたちもまた、「次はどんなことを聞かれるんだろう」とワクワクしながら園長先生との対話を楽しみにしていた様子が目に浮かんだ。

子どもへの「なんで？」という問いかけは、子どもの好奇心をくすぐり、自分の思いや考えを言葉にしたいと思える原動力となる。それが、安心して表現できる関係性を築くことにもつながっていたのだと思う。まさに、子どもの主体性を大切にし、子どものまなざしに寄り添いながら保育を実践してこられたのだと感じた。

中井先生の実践は、やがて園全体の保育を変えていった。安全重視で保育者主導だった保育から、子ども主体の保育へと移行したというお話は、保育の質の向上に向けた取り組みの理想的なあり方ではないかと感じた。

幼児期の子どもたちは、遊びや生活の中で自ら考え、試し、失敗し、やり直すというプロセスを日々繰り返している。そのプロセスこそが学びであり、その積み重ねが子どもの自信や意欲につながっている。一つひとつのプロセスに寄り添い、対話を通して気持ちを引き出す保育者の関わりが、子どもをより主体的な学びへと導いていくのだと改めて実感した。

続いて、福井大学教育学部附属義務教育学校の佐々木庸介先生から、プロジェクト学習についてのご報告があった。印象的だったことは、「子どもたちの『やりたい』『知りたい』の裏には、必ず何らかの意味がある」とおっしゃっていたことだ。この言葉からは、子どもの表面的な行動にとどまらず、その奥にある意図や願い、学びのプロセスを大切にされている姿勢が伝わってきた。教師側の都合で子どもの行動を省略したり、形に収めたりするのではなく、子どもの「やりたい」を実現できるような支援や、先の見通しを持てるような環境構成が求められているのだと感じた。子どもたちが自ら問いを立て、学びを深めていくプロセスにおいて、大人が「教える」のではなく、「共に考える」姿勢であることが大切になってくる。プロジェクト学習という枠組みの中で、子どものつぶやきや行動の背景にある思いや願いを丁寧に見とりながら、学びのプロセスを支えていく姿勢に、教育の本質を感じた。また、子どもが自分の問いに取り組むためには、その問いを安心して語れる場と、それを受け止めてくれる他者の存在が不可欠であることも実感した。子どもたちは、受け入れられ、対話することで、自分の学びに価値を見いだし、さらに探究を深めていくのだと思う。

二日目の小グループでは、私も園長会での実践について報告をさせていただいた。これまで毎回、自分の思いや考えを言葉にして伝えることの難しさを感じてきたが、今回は対話を重ねる中で、少しずつ自分の言葉で語ることの手応えを感じることができた。校種や地域を超えて、さまざまな立場の先生方と対話できたことは、私にとって大きな学びであった。それぞれの現場で悩みながらも実践を重ねている方々の話に共感し、同じ思いを抱えている仲間がいることに、安心感と勇気をもらった。また、異なる視点や取り組みに触れることで、自分の視野が広がり、実践を見直す新たな気づきにもつながった。保育や教育の実践は、日々の試行錯誤の積み重ねであり、正解のない世界であると改めて実感する。だからこそ、ラウンドテーブルのような「語り合い、聴き合う場」が必要なのだと思う。こうした実践の語り合いを通して、見えてくる課題や可能性は、現場だけでは気づけなかったものであり、まさに“対話の力”だと感じる。実践を言葉にすることは、自己を省察し、他者とつながる大切な手段であり、その積み重ねが保育・教育の質の向上へとつながっていくのだと思う。今後もこのラウンドテーブルに参加し、語り、聴き合いながら、それぞれの実践をつなげていきたい。この学びの場が、実践を見つめ直し、共に育ち合っていける貴重な機会であることに感謝しながら、これからも仲間とともに、子どもの育ちと学びを支える対話を続けていきたいと思う。

対話が導く学びの更新

独立行政法人教職員支援機構　専門職員　廣木　伸幸

私は、昨年度まで福岡県教育センターで指導主事として、教員研修の企画・運営に携わってきた。そこで常に念頭に置いていたのが、「子供の学びと教師の学びは相似形である」という考えである。この考えに強く共鳴し、教職員支援機構の研修観に関心をもつようになった。

そのような折、文部科学教育通信 No.582(2024 年 6 月 24 日号）で、当時の審議役・佐野壽則氏によるラウンドテーブルに関する紹介記事を読んだ。記事の中では「本音を語った上での対話」の具体例が紹介され、「対話には、物事の捉え方に深まりをもたらす力がある」と述べられていた。この言葉に強く心を動かされ、「自分もぜひこの対話の場に参加したい」と思うようになった。

そして今年度、私は教職員支援機構に勤務することとなり、念願叶って福井大学のラウンドテーブル（実践研究福井ラウンドテーブル　2025　Summer Sessions)に参加する機会を得た。

１日目には、「Zone B 教師教育：専門職としての教師の資本と育成指標」に参加した。さまざまな地域や立場の参加者と意見を交わす中で、自分一人では得られなかった多角的な視座を得ることができた。中でも印象に残っているのは、学校現場では育成指標が必ずしも意識されていないという課題の指摘であった。そこから、「実際に現場の教職員の声を聞いてみてはどうか」「子供たちにとって『こんな先生がいいな』という思いを反映させた指標づくりも考えられるのではないか」といった建設的な意見が次々と生まれ、対話を通じて思考がより現場に根ざしたものへと深まっていく実感があった。

２日目は、いよいよラウンドテーブル（Round Table Cross Sessions）に参加した。私のグループには、大学生、大学院生、幼稚園教諭、高校教員を経験された指導主事など、多様な経験を持つ参加者が集まった。それぞれが自らの実践やその背景を語る中で、見えてきたのは、実践の奥にある「その人の在り方」だった。「今だったらどうするか？」「そもそも、なぜそれをするのか？」といった問いが自然と生まれ、対話が進むにつれて人の在り方もまた日々更新されていくことに気付かされた。特に心に残っているのは、ある高校での探究的な学びの実践であった。「教師は、生徒に学びを委ねています」と力強く語られ、対話の中で「なぜ、子供に学びを委ねていない授業が多く見られるのか？」という問いが投げかけられた。その時、大学１年生の参加者がふと漏らした「でも自分は、これまで教えてもらった授業も良かったと思うし、振り返ってもとても学びになっていた。教えてもらうことはいけないのか？」という言葉が、場の空気を一変させた。この一言は、誰もが思考を深めるきっかけとなり、対話の価値をより強く実感する瞬間となった。

本音を語り合える場での対話こそが、人の考えを揺さぶり、新たな学びを引き出す原動力になると思う。教師が自身の在り方を問い続け、学び続ける姿勢が、まさに子供たちに示したい「学びの姿」ではないかと、ラウンドテーブルを通じて、改めて確認することができた。

Zone A 学校

対話の先に見えてきたこと

福井県教育庁義務教育課　中村　薫

今年度の４月より、県教育庁義務教育課幼児教育グループ兼県幼児教育支援センターで勤務させていただくようになり、早３か月が経った。前任校の中学校では、道徳主任・特別活動主任として、研究推進委員会の中で、研究主任や総合主任などとともに幾度となく「探究」の大切さを語り合い、令和６年度の研究では「自ら問いを立てる」をキーワードに授業研究を行ってきた。５月から始まった、県内各市町への園訪問。今日までに私自身が参加させていただいた園は、国公私立、園種も様々であったが、どこの園でも、子ども達の「遊びの中の学び」を本当に大切にし、ものすごく丁寧な環境構成の下、子ども達が生き生きと遊び、その中で自分の好きな遊びの中で自己発揮をしている場面に出会ってきた。その中で、昨年度までの中学校で追い求めていた「探究」「自ら問いを立てる」ということは、これだったんだと、私自身の中で一本につながり、幼児教育を小学校以降の教育につなげるという使命にさらにやりがいが持てるようになった。

そのような思いが日に日に強まっていた頃、福井大学で開催されたラウンドテーブルに初めて参加させていただいた。これまでも前任校の生徒や先生方が参加させていただいたので、参加するチャンスはあったが、なかなか重い腰が上がらないでいた。しかし、今回は、４月から素敵な姿を見せてくれた子ども達、素敵な話をたくさんしてくださった園・大学・一緒に働かせていただいているセンターの先生方との出会いが自ずと私を後押ししてくれたのか、思いの外軽い気持ちで参加することが決断できた。Session Ⅱ Zone Sessions の Zone A 学校「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ～主体的な学びのプロセスを問い直す～」に参加させていただいた。話題を提供してくださった、亀岡市かめおか乳幼児教育センターの中井先生の子ども達と対話を重ねることでどんどん子ども達の主体性がくすぐられ、「こども給食研究会」として探究を進めていったお話に引き込まれた。

さらに、その後の、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程の佐々木先生の理科の授業での実践を聞き、子ども達の主体的な学びは、園のような子どもたちの流れにじっくりと寄り添いながら活動を展開できる環境ではない小学校や中学校などでも、実践することが可能だということが分かり、私の中のワクワク感が増大していった。その後、現役の大学院生、県外の小学校の先生、県内の認定こども園の先生と一緒に小グループでのクロスセッションを行った。はじめは１時間以上のグループ協議の時間が長すぎるのではないかとやや不安だったが、終了予定時刻を過ぎてもどのグループもまだまだ活発な議論をされていた。年齢や校種等を超えた対話だったからこそ、新しい視点や気付きを得る機会となり、大変意義深い時間となった。

今回の初めてのラウンドテーブルへの参加で私自身確信に変わったのは、子ども達が主体的・対話的で深い学びを実現するためには、教師自身も子ども達と同じように、もしくは、子ども達と一緒に、様々な立場の方と対話を重ね、その中で自分が大切にしていきたいものを見つけ、楽しみながら主体的に関わっていこうとする姿勢が必要だということだ。自分の好きを見つけ、その好きに存分に向き合っている子ども達の自己発揮している姿は本当に輝いている。私自身も、一人の教師として、一人の人として自己発揮できるように、人との対話を大切に、自分らしく探究し続けたい。

子どもの願いや問いと共に在る

信州大学教育学部附属長野小学校　教諭　小田切　洋輔

私はラウンドテーブルに参加することで、これまでの教員としての歩みをふりかえることができた。そしてZoneＡでの実践発表とグループ討議を経て、子どもたちが主体的に学ぶとはどういうことかについて考えることができた。

実践発表を聞いて初任校でのことを考えた。当時の私は「教科をわかりやすく教えたい」「社会科を面白いと感じてほしい」という観点で素材研究、教材研究をしていたように思う。当時の私がつくった授業プリントを見返すと「あの子たちは私が考えた狭い紙の中で一生懸命考えてくれていたのだな」と感じた。そんなことをふりかえると、過去の自分に伝えたいことが浮かんできた。「子どもたちはもっとできる」「もっと子どもの声に耳を傾けよう」ということだ。今回の実践発表で、教師が子どもの声を聴き、子どもが自分のこととして考えられるよう声をかけたり、単元を展開したりしている様子を紹介していただいたことで、今一度子どもの願いや問いを基にした授業を展開したいと思った。

さらにグループ討議からも「子どもの願いや問いを授業に据える」ということを考えさせられた。グループ討議では主に「環境をつくること」が話題にあがった。グループ討議を聞いていると、以前担任をしていた小学３年生のＡさんのことが思い浮かんだ。Ａさんは図工が大好きで、休み時間になっても図工を続ける子だった。豊かな発想力があり、その分素材が足りなくなったり、難しいギミックが実現できなかったりすることがあった。そこで、共通のキットは用意するが、自由に素材をもってきていいことにした。その後、Ａさんは段ボールを飾り付ける単元では、用意されたキットは使わず、自分で探してきた段ボールをつかってジンベイザメのデザインの飾り付けをしていった。さらに使わなかったキットの段ボールを使ってコバンザメまでつくりだした。大阪の水族館で見たジンベイザメを思い出し、思い出を形にしたいというＡさんの願いがつまっている作品だと感じた。その作品をつくる過程でコバンザメの習性や体のつくりを図鑑で調べるＡさんの姿があった。図工の授業ではあるが、願いを実現するために「調べる」という学び方も行っていた。

私がこのようにＡさんにアプローチすることができたのは、図工係の先生のおかげでもあった。図工室にはさまざまな素材が用意されており、子どもが素材を選べる環境が整えられていた。ZoneＡの発表やグループ討議から、子どもが主体的に学べる環境として、図工室の環境ができていたのだと捉えなおすことができた。

子どもの願いや問いから学びをつくっていくためには、子どもが学ぶ環境や対話ができる教職員の関係が必要であり、地域や家庭が学校に入ってくることでさらにその環境が広がっていくのだと思った。ラウンドテーブルに参加させていただき、これまでに出会った子どもの姿を思い出し、省察をする機会になった。この省察をもって、今、共に在る子どもたちと学んでいきたい。

Zone B 教師教育

教師教育：専門職としての教師の資本と育成指標～孤立する専門職から協創する専門職へのトランスフォーム～

坂井市丸岡南中学校　大瀧　優作

１．　はじめに

私は今年度埼玉県より、『学力向上に資する福井県派遣プログラム』にて坂井市立丸岡南中学校で勤務しています。福井大学教職大学院には月間カンファレンスに参加させていただいております。参加する度に私自身の思いや感覚が言語化され、多様なバックグラウンドの方たちと対話をしていくことで新たな気づき、学びを得ることができることにワクワクしています。

社会が急激に変化していることは、ここ数十年言われていることですが、我々教員は付いていくことがやっと、変わりたくても変われない、または変わろうとしないというのが現場で勤務してきた実感です。このように教員によって感覚が分かれるのは社会、そして教育の大きな転換期の渦の中にいるため、『これが正解』といった明確な解答が出ていないからではないでしょうか。しかしそれこそ、答えのない問いを探究する生徒と同じように、我々教員も探究し続けていかねばならない課題だと強く感じています。

講演の内容を聞くと、自分自身が体験し感じたことの答え合わせに加えて、新たな視点を手に入れることができました。現状においても２０世紀の教員養成・教師教育のモードに留まっているシステムが多いのが事実。人的資本、意思決定資本、社会関係の3つの要素を絡めながら、どのように教師の資質・能力を育成していくかが求められます。従来では、教師一人の研究や研修で、その教師自身の腕を磨けば良かったかもしれません。しかし、社会の変化への対応、教師の働き方・学び方改革、学校を協働の場にしていく必要があると感じました。

２．福井県の教員養成指標の更新サイクルとビジョン共有

私の派遣元である埼玉県においても教員育成指標が提示されているということは、教員採用試験に向けた勉強の際に理解はしていました。現場で働き出すと目にする機会が失われていきましたが、今回福井県の教員育成指標を初めて拝見することができました。ステージごとに分かれている部分とそうでない部分に分かれていることが印象的です。やはり、どの都道府県でも求められる教師像は似た部分が多いと感じました。あるグループの対話の内容を聞かせてもらうと、校長が教諭の授業を見学することはもちろん、日々の対話や関わりを持った上で、今自分（当教諭）はどのステージにいるのか、何が必要なのかを校長とさらに対話をしながら理解を深めていくというものでした。校長と教諭が教員育成指標における自分の立ち位置の把握と今後の展望について一緒に考えていくという仕組みは、教諭が管理職に評価されていることを肌で感じ、自身をメタ認知しながら資質・能力の向上を図ることができる良い取り組みだと感じました。

３．板橋区のリ・デザインの挑戦　『授業革新』について

板橋区では『授業改善』ではなく『授業改革』という文言を使用していることに、教育改革に向けた熱量を感じました。教員研修自体を大きく見直し、変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的に学ぶ教師が育っていくことをモットーに進めていました。福井県も板橋区も共通していることは、子どもたち、保護者、地域住民、教職員同士、多様なスタッフなど様々な立場の人たちと協創していこうとする姿勢です。

４．グループセッション

グループセッションでは、３０代前半の自分を含む教員２名、NITS で研修主任をされている方、大学で教授をされている方の計 4 名で実施しました。教員の資質・能力の向上、探究を進めていくためにはどうするべきかという話題で対話が始まりました。教員自身がアップデートしていくには、それぞれが学ぶことはもちろん大事ですが、一緒に学ぶ場、それぞれが学んだことを共有し対話していく場を作っていくことが重要です。そのために、放課後自主研修を開催している方がいました。ポイントは参加者の『おもしろそう』、『ワクワクする』といった気持ちをどれだけ引き出せるかだと思います。一緒に探究することの楽しさ、多面的・多角的な物の見方・考え方を他者から学ぶ新鮮さなど。『楽しさ・ワクワク→学び』のサイクルを研修で作り出せると主体的な研修を実施できるのではないかと考えました。私自身が定期的に大学院で学んでいるのは、決して外発的な動機ではなく、『新たなことを学びたい』、『様々な考えや意見を聞きたい』という内発的な動機です。内発的な動機が作動してしまえば、人はどこまででも学び続けることができると考えます。それこそが今、求められている教師の在り方ではないでしょうか。そして、探究を進めていくためには仲間が大切であること。教師一人のマンパワーでどうにかするのではなく、どのようにビジョンを共有し、学び・探究し続けることのできる仲間を作ることができるか。時間はかかりますが、対話を繰り返していくことで互いの理解が進みます。歩む道が違っても、『これからを生きる子どもたちのために』というゴールさえ共有できれば、共に歩んでいけるはずです。

５．おわりに

今回の講演と対話、現在の自分自身の実践を照らし合わせながら省察することができました。今後は、子どもも大人も『学びたくなっちゃう場』の醸成に向けて、様々な人たちと共に学び続けていきたいです。最後に、県外派遣の私を受け入れていただき、今回のラウンドテーブルを運営してくださった福井大学の関係者の皆様に感謝申し上げます。

参加できてよかったと感謝したい「研修」

福井県教育庁教職員課　主任　　木下　慶之

23 年間中学校理科教員を務めてきたが、昨年度から県教職員課で勤務している。業務内容は主に任用と給与に関する事務である。一日中黙々とエクセルで名簿や数字ばかり触っている日もある。業務として学校への訪問はないため、子供たちと関わることもなくなってしまった。未知なる業務ばかりで、「すみません、もう一度教えていただけますか。」と同僚たちから教わりながらの日々である。

おかげで「初任者の時の気持ち」を思い出すことができた。なかなか見通しがもてず、うまくできないことばかりで自己有用感をもつことができない。これまでの教育実践も直接業務につなげにくく、理科教員であることや、何をテーマに教員をしてきたのかを忘れてしまうのではないかという不安。まさに VUCA 現象が自分の中に起きた。とりあえず目の前の業務をこなすのが精一杯。あっという間に１年が過ぎてしまった。

２年目を迎え、「このままではまずい。」と思い、「そうだ、ラウンドテーブルに参加したら何かテーマが見つかるかも！」と、「研修」を欲している状態で申込みをした。特に ZONE B 教師教育の今回のキーワードは「研修」や「教員育成指標」「専門職としての教師の資本」「孤立から協創」とあり、今の業務や自分の状況とつながっていると思い、オンラインではあるが参加させていただいた。

申込をすると、なんと！上司である遠藤課長が報告者であることを知る。そして当日、課長の報告や対話グループの方々との対話を通して、今の業務に対する意識を変えるきっかけをいただけた。遠藤課長からは、今年度更新策定された「福井県教員育成指標」

や「教員研修計画」についての紹介や、どのような経緯で、どのように設定されてきたのか、さらにはそれが県内の研修機関とどう連携され、研修が企画、計画されているのかなど、福井県の教師教育の大きな仕組みやビジョンについて教示いただいた。

今まで自分が取り組んでいた業務が、そもそもなぜ必要なのか、どうして始まったのかを問い直すことができた。とりあえず目の前の業務をこなすことばかりを考えていたが、巨視的な視点で業務について捉えると、みんなの業務がつながりをもって連動連鎖している。そもそも教育委員会の業務とはどう生まれてきたのか、現場（子供たち教員、地域社会）とどうつながれているのか、教育行政についても実践研究をしていきたいと新たなテーマをもつことができた。

そして、自分の上司が行政職ではありながらも教育実践者としてのストーリーを振り返り、今後の展望などを語り、研究会の場で努力されている姿を拝見できたことが、何よりも大きく勇気づけられた。身近すぎると今回のような話はなかなか聴けないものである。校長や所属長と一緒に研修に参加するのも良いものである。

ちなみに、VUCA な日々を何とか乗り越えられているのは優しい同僚たちのおかげである。１年目は三宅主任というメンター同僚が常に支援、指導してくれた。「今の僕の説明わかりにくいところはありませんでしたか？」「一緒にやりましょう！僕も勉強してみます」という明るさと謙虚さをもっている同僚である。遠藤課長も、「大丈夫、今にだんだん分かってくるよ」と労ってくれる。「たまには授業を見に行きたいです」と相談すると、他のグループに同行して研究授業に参加できるきっかけをつくってくださった。

さて、グループ対話では、さくら認定子ども園の先生（園内の研修を企画されている）、そして遠藤課長と同じ報告者であった板橋区教育センターの堀内さんとの３人で交流することができた。自分で研修を選ぶことも重要であるが、研修分野のバランスをとることも重要である。一方、スキルを身につけてほしいと研修企画者が思っていても、研修を受ける本人が必然性を感じていないと効果が期待できない。また、研修を受けても実践にすぐにつながるとも限らない。一度きりの講演や講座ですぐに変容するものでもない。研修環境のデザインは絶えず教員の状況やニーズに合わせて創意工夫していかねばならない。まるで授業づくり、単元デザインと同じである。

最後になるが、これからの時代、自分で自分の研修を作り上げることができるような（自分でカリキュラムを創り上げていく）能力がますます必要になってくるのではないかと感じる。そこには協創や協働が必要であり、同僚や同志、支援者や伴走者（メンター的存在）、軌道修正や労を労ってくれるような評価者の存在が不可欠である。

成長というのは緩やかなものであり、長期的な実践記録やその振り返りと展望を自分で見出すことが、やはり大切である。そう考えると教職大学院での研修は、よい仕組みであると思う。理念を共有し、そんな仕組みがもっと社会に増えると良い。

今回のラウンドテーブルは参加できてよかったと感謝したい「研修」であった。参加すると何かしら獲られるものがあるのがラウンドテーブルである。ありがとうございました。（久々に文章を書きましたが、駄文が多く、やはり日頃から書く習慣が大切ですね）。

教職員研修の充実のために

鳥取県教育センター　倉田　利江子

はじめて「実践研究福井ラウンドテーブル」に参加させていただいた。今回私が参加したZone Bでは、「専門職としての教師の資本と育成指標～孤立する専門職から協創する専門職へのトランスフォーム～」をテーマに、都道府県等で用いられている教員育成

指標と教員研修改革を軸として、二つの報告、情報提供があった。

福井県教育庁教職員課の遠藤正宏課長からは「福井県の教職員育成指標の更新サイクルとビジョン共有」として、福井県の教員育成指標の策定の経緯や指標を活用した教員研修のポイント等についてお話があった。福井県では、福井が求める教師像を反映させた福井県教員育成指標が策定されており、その指標を活用して教職員研修におけるＰＤＣＡサイクルが実施され、研修の評価に基づき毎年育成指標を見直しているということだった。育成指標の見直しと策定を毎年実施されていることや学校現場を意識した取組を推進していることに感嘆するとともに、福井県教育委員会として、働きやすさと働きがいの向上をめざし、チャレンジを楽しむ教員の育成を図っていると言われたことが、大変印象的だった。遠藤課長が繰り返しおっしゃっていた「現場の先生方には、自信と誇りをもって生き生きと仕事をしてほしい！」という言葉に強く共感し、自分自身の日頃の業務について省察することができた。

板橋区教育支援センターの堀内雅一統括指導主事からは、「板橋区の研修リ・デザインの挑戦板橋区教職員研修計画『授業革新』について」として、「教育の板橋」の実現に向けた板橋区教育支援センターの具体的な取組についてお話があった。研修を見直すうえでの課題として、研修回数、教員への負担感、学校の働き方改革などが挙げられており、どこでも課題は共通していると感じた。また、実際の研修内容についても具体的に御紹介いただき、大変参考になった。「子どもの学びと教師の学びは相似形である」という考え方のもと、学校や教員が主体となって選択できる研修、実践的で効果的な研修のあり方等について、考えることができた。

話題提供後には、小グループで対話を行い、感想等を自由に出し合い、校種や立場を超えて、思いを共有することの大切さを感じた。学校現場の切実な問題に話題が及び、「子どもの学びと教師の学びは相似形である」ならば、厳しい状況にある現場の先生方にとって「主体的・対話的で深い学び」となる研修について、今後も考え続け試行錯誤し続けていくことが必要だと強く感じた。教師が「協働する専門職」から「協創する専門職」へと変化するためにも、まずは自分自身ができることを具体的に考え、地道に確実に実行していきたいと感じた。

今回参加させていただき、様々な方と対話することで自己内対話と省察がすすみ、新たな気づきを得ることを体験できた。今回得た学びを今後も生かしていきたいと思うとともに、貴重な学びの機会を与えていただいたことに感謝している。ありがとうございました。

Zone C コミュニティ

「ためらい」と言う雲が晴れた後の景色

aiMIKI STUDIO　aiMIKI（アイミキ）

自分がためらう時って、いつなんだろう。「そういえば、近年まさに私、人生で一番ためらっているかも」と、今回こんなふうに「ためらい」について考える機会をいただき、それに気づきました。若い時は、自分の直感と思いだけで、すぐ行動にうつすことができたけど、歳を重ねて自分に責任がある立場になっていけばいくほど、そうそう直感だけで、自分の気持ちだけで動くことは、難しくなっていくのかもしれないですね。でも私、最近、そのためらいから、ようやく抜けたのですよ。5年くらい、ずっと長い暗いトンネルの中にいた気持ちで、ずっとためらっていました。若い頃から自分の気持ちには正直に生きてきたから、「自分がどうしたいのか、わからない」という状態が、何よりつらかったです。私にとっては。

暗くて長い、光の見えないトンネルの中を歩くように、自分がどうしたいのか先が見えない時は、もう

占い師にでも聞いて、答えを言ってほしい。つらい、もう楽になりたい。それくらい思うこと、何度もありました。でも、結局のところ私は「自分が決めたんだ」という確かな感覚がないと、「ためらい」に踏ん切りをつけられないのです。本当は誰か親しい人、心許せる人に気楽に相談してみるのも、大事なことなのだと思います。でも私は自分がとことん迷っていることがわかっている時には、せっかく相談した相手が意見を言ってくれても、結局自分がしたい方しか選ばないのをわかっているから。相談は、自分がしたいことがはっきりわかってから、「じゃぁそのためには、どうしたらいいと思う？」と友人や家族に聞いてみる、と言う順番でしか進められないのです。つい最近「自分の本当の気持ち」が分かったので、やっと人にも話せる準備ができた気がしています。そして、その「ためらい」の霧が晴れた後って、なんて爽快で自由な気持ちになれるのでしょう！

苦しみ悩んで、自分の気持ちに向き合って、自分に正直に選んだ答えだから、もうあとは進むだけ。トンネルを出るまでは、まだまだ道のりはあるみたいだけど、でも出口が見えている今は、もうひたすらに信じて進むだけなのです。勇気とやる気と自分を信じる気持ちがむくむくと湧いてくる感じは、すごく気持ちがいい。この無敵の感覚は、誰かに決めてもらったり、占い師に導いてもらって選んだ道ならば、感じられなかったのだろうと思います。そしてたとえここから先につらいことが待っていても、それは自分が決めたことだから、戦い抜けるし、たとえ失敗しても後悔はしないのです。

そして苦しかったけど、とことんためらい続けたことによって、成長できた感覚もあるのです。

自分のそのためらいは、どこからくるのか。どうしてその一歩が踏み出せずにいるのか。なにを守りたくてためらっているのか。なにを嫌だと感じているからこのままではいけないと思うのか・・そんなことを考えているうちに、自分自身を深く知ることができました。

人生でちょっとした不安を感じてためらってしまうこと、深く長いためらいの時間を過ごすはめになること、誰しもあると思います。でもためらいは「自分の本当の気持ち」に気づくための大事なシグナルであり、とことん向き合うことによって自分を知るチャンスであり、苦しくてもそれは「自分の成長」と「困難に立ち向かう力」と「本当の自由」を手に入れるための、大事なプロセスだと考えます。

ためらいを乗り越えた先に

越前市武生南小学校　酒井　夏瑞

教職大学院を卒業して３か月が経過しました。現職教員になっても、院生のころから続けてきたラウンドテーブルには毎年参加したいという思いがあり、今回Zone Cに参加しましたZone Cを選んだ理由は、２つありました。1つ目は越前市とかかわりのあるチアゴさんがお話しされると聞いて興味を持ったからです。２つ目は、赴任している学校にブラジル国籍の子どもが多く在籍しているため、何か支援のきっかけになればと思ったからです。あまり深い理由はなかったのですが、Zone Cを終えた後、今回のテーマである「ためらい」が自分の経験と大きく結びつきました。

さて、今このニュースレターを読んでくださっている方に質問です。「ためらい」という言葉を聞くとどんなイメージを思い浮かべますか？

ここで区別しておきたいのが「迷い」と「ためらい」の違いです。迷いは「どちらかを選ぶか決めかねる状態、進むべき道や方向が分からない状態」を指すそうです。一方でためらいは「行動を起こす前に、心が揺れて決断できない状態」を指します。感情的な抵抗が含まれています。「ためらい」はあまりポジティブな印象を受けないかもしれません。Zone Cに参加するまでの私もそうでした。しかし、今回の学びの中で自己実現に向けて一歩踏み出す時に必要であるのが「ためらい」だということに気づきました。考え方を

少し変えるだけで、ためらうことを前向きにも捉えられます。

話題提供をしてくださったお二方のお話をお聞きしながら、自分のためらった経験を思い浮かべていました。教職大学院の入学や、シンガポールの留学を決めた時など自分にもためらった経験が多くあったことに気づきました。そして、その時の状況を思い浮かべていると私のまわりには誰かがいました。ためらっていることを最初から最後まで自分一人の力で乗り越えた経験はほとんどなかったように思います。教職大学院への入学を決めたのは父の一言がありました。シンガポールの留学も同期の院生が一緒に行きたいと言ってくれたから決断できました。ためらいを乗り越えられた経験は、すべて周りの人とのかかわりによってできたことだということに気づきました。

Zone C での語り合いを終えて、私はためらいについて意識する機会が増えました。そして先日、越前市の教育講演会にて書家の前田鎌利さんが仕事術についてお話しされたことが Zone C の学びをより深めるきっかけになりました。講演の中で、前田さんは「ためらい」を「壁」と表現されていました。前田さんは「壁はワクワクする自分に出会うために必要です。壁を乗り越えないと退屈だし、行き過ぎると不安になることもある。やりたいことは一旦やってみる。そうすれば何かつかめるものがあると思う。」そして、質疑応答で次のような質問がありました。「前田さんはいくつもの壁を乗り越えています。今までのご経験を踏まえて、壁を乗り越えるには何が大事ですか？」この質問に対して前田さんは「壁を乗り越えるには仲間でした」とおっしゃったのです。まさに私が Zone C で語り合っていた中で気づいたことと同じでした。前田さんは、仲間に支えられていることを感じながら、何度もためらいを乗り越えているのだと思います。その経験は新しい自分に出会えるきっかけになるからです。「私も周りの人に支えられていることを感じながらきっといろいろなことにチャレンジできるぞ」と勇気づけられた時間でした。私は、力強く進む周りの人とのかかわりがあるおかげで様々なことにチャレンジできています。様々なことにチャレンジできるぞ！という姿勢を持ち続けることは周りの人にも伝わっていくのだと思います。

最後に私自身のためらいについて少し述べようと思います。実は今日、1つためらっていたことを乗り越えることができました。朝ランニングです。きっかけは、学年主任の先生の一言でした。先日、先生が仕事終わりにランニングをしていることを知りました。その先生は「つらいけど、25 分間一生懸命走ったら自分を褒めてあげられるの」とおっしゃいました。私も運動したいと思っていたのですが、「暑いし日焼けするよな…」「学校行く前に走るの嫌だな…」「ランニング始めるなら毎日続けないといけないよな…」とランニングをためらっていました。他人から見た理想の形にこだわっていたのかもしれません。しかし、学年主任の先生の一言でランニングのイメージが明るいものに変わったのです。「走り終わった私はまた新しい自分に出会えそうだ」そのような期待を持ったことで、今日実際に走ることができました。思考を自分軸に変えたのだと思います。思考を変えたからか早起きも辛くありませんでした。走り終わった後、すっきりしました。ワクワクしている自分に出会えました。頑張ったな自分！と褒めてあげられました。明日も明後日も、その先も毎日続けられる可能性は極めて低いです…しかし、やりたいと思っていることをとりあえずやれたことは自分の糧になっていくと思います。

そもそも学年主任の先生は、私に走ってほしいと思って話をしたわけではありません。しかし、先生の言葉は、私にとってはワクワクする自分に出会えると思えたポジティブな一言でした。ためらいを乗り越えるには人との語り合いを大切にしたいと改めて思えた出来事でした。

これからもためらい、それを周りの人とのかかわりの中で乗り越え、ワクワクする新しい自分に出会っていきたいです。

“ためらい”と向き合い変わるイメージ

PCN 武生 代表　森田　秋馬

普段、気づけば通り過ぎている感情や行動のひとつ“ためらい”。人生の中で、真正面から向き合ったことはなかった。言葉の印象から、漠然と感じていたイメージはネガティブ。しかし、自身の経験や他者の経験、“ためらい”の前後で起きていること、これらをより具体的に照らし合わせていってみると、見えてきたのは、ネガティブではないということだった。

今回グループワークでお話させていただいたのは、弁護士の先生と大学の先生。結婚や進学など、環境や人生におけるフェーズの変化の折に、“ためらい”の記憶があると話してくれた。自分の今のフィールドから一歩外へ踏み出す時、「本当に進んで大丈夫なのか？」と思うのは、ある意味、人間という生き物の危機回避能力なのかもしれない。ただ、それでも一歩を踏み出すのには、きっとそれを上回る何かがあるからなのだろう。期待であったり、希望であったり。

私の場合、歳を重ねるにつれて、“ためらい”を感じる機会が減ってきた。PCN 武生という団体を立ち上げ、代表を務めるようになってから、自分で決めて、自分でやってみて、うまくいかなくても自分で後始末をすればよいと思えるようになってから、特に“ためらい”は減っている。新しいフィールドに踏み出していく時、「自ら踏み出す」パターンと「自らの推進力以上の力で背中をおされる」パターンがあるように思う。振り返ってみると、後者の場合に“ためらい”を感じていたような気がする。このあたりにも、“ためらい”のロジックがあるのかもしれない。

“ためらい”の先には、見たい世界がある。結果的にではあるが、私は“ためらい”の後、その先に進まなかったという記憶がない。そうでもないという意見もあったが、もし“ためらい”が、跳び箱の前のロイター板のような存在だとしたら、どうだろう？大きな壁を超えるには、少なからず勢いが必要である。それを後押ししてくれる存在だとしたら。そう考えると、むしろ進んで多くの“ためらい”に身を投じるのが良いのかもしれないとさえ思った。

歳を重ねるにつれて“ためらい”が減っていると書いたが、決してチャレンジ自体は減っていない。むしろ外のフィールドへはより多く踏み出している気がする。では、なぜ“ためらい”が減っているのだろうか。ひとつ思いうかんだことがある。昔にくらべて自分の周りに、「高い心理的安全性」が多く存在しているのが影響しているのではないか。信頼できて、相談できる人がいる。少なからず自分のスキルが人を助けることができる実感もある。仮に、“ためらい”×“高い心理的安全性”が、人を未来に進めるための、効果的なメソッドだとしたら、高い心理的安全性のコミュニティが増えてくるとよいのかもしれないと思った。冒頭で、aiMIKI さんたちが話されていた、「どんぐり」というコミュニティもその一つだと思う。多様性があり、出入り自由で、選択可能なコミュニティが増えてくると、面白い地域になってくるのではないかと思う。

今回の Zone C に参加するまでは、“ためらい”はネガティブで、どこかしんどいものというイメージだった。しかし、今回の対話を通して、“ためらい”のイメージが一変した。新たなフィールドへ踏み出すステップの一つでしかなく、新たなフィールドへの目印とも言える。“ためらい”の場に身を投じた時、いろいろな支えを感じられていれば、きっと自ら先へ踏み出していける。そんな風に思える人が、このコミュニティを通して増えるのではないかと期待させてくれた Zone C だった。

学び合うコミュニティの条件

福井大学連合教職大学院　半原　芳子

福井大学教職大学院に着任してからこれまでずっと、実践研究ラウンドテーブルでは Zone C コミュニティを担当している。当初は新規メンバーだった自分も、今では本 Zone においてもっとも長いメンバーの一人となった。Zone C の 2016 年から 2024 年までの歩みは、冨永良史さんが「協創するコミュニティーラウンドテーブル Zone C の歩みを辿るー」（『教師教育研究』17 号，2024）であらわしてくださっている。冨永さんの記録では、ニューズレターに寄せられた参加者の方の声が編まれており、その記録を読む（辿る）と、その時その時の情景が思い起こされるとともに、この間協働で方向性を模索してきた時間の厚みとダイナミズムを感じる。そして、私はこのコミュニティのなかで学んできたのだと実感する。

今回私は、話題提起となる対談で、登壇者のサントス・チアゴさんと aiMIKI さんと並び、コーディネーターとしてお二人のお話をうかがった。お二人とも、福井県内で外国の方が最も多く居住する越前市で暮らし、仕事をし、同じサルサのグループで活動を行っている。対談のなかで aiMIKI さんが、ご自分たちのサルサグループのことを「ミニ・ニューヨーク」と例えておられたのが印象深い。そこでは、誰もが「自分」でよくて、経験や年齢を問わず誰もがグループをより良くするための意見が言えて、上手下手なくみんながサルサを楽しめる、まさにコミュニティであると感じた。お二人の語りや雰囲気にあらわれる関係性の良さ、そして前に進む元気さ（「元気」はとても日常的な言葉だが、この表現がぴったりくる）は、あの場にいたみんなの背中を押したことと思う。そして、思わず誰か（他者）の存在に感謝したくなる、そんな気持ちを多くの方が持たれたことと思う。実際、今回は主旨説明においても、対談においても、そのあとの全体でのやりとりにおいても、明示的に「コミュニティ」ということばを使わなかったのだが（別に取り決めをしていたのではない）、小グループでのセッションや、全体でのやりとりのなかで参加者の方々が「コミュニティ」を語り始めていた。

私はこれまで、グループやネットワーク、はたまた組織と何が違うのかが分からず、「コミュニティ」という言葉を長く使えずにいた。最近になってようやく、少しずつではあるが、グループ等の言葉が当てはまらず「コミュニティ」の方がより良い感じがする時に使うようになった。それはどういう時かを考えてみると、自分が支えられていたり、そのなかで実践的に学べていたりする感覚を覚える時なのであるが、今回の対談を通じ、私のなかでもう一つ大切な条件があることに気づいた。それは、国籍や世代を含めありとあらゆる多様な人がいて、その人たちと創造的なコミュニケーションを通じ、感情を伝え合ったり、思考したり、協働したりしているとき、である。会の終了後、チアゴさんとあいさんが、「これからサルサの練習があるから」と笑顔で颯爽と帰っていかれたのも印象的だった。お二人のサルサグループのような、みんなの拠り所となる Zone C コミュニティを、これからも仲間と共に意味を探りながら耕していきたいと思う。

Zone D International

Lesson Study, Reflective Practice, and Organisational Learning Program at the University of Fukui

Chiwamba Community Day Secondary School **Dickens Saitala Samuel**

30th June 2025 was a remarkable day to the invited international educators from Malawi, the Philippines, and Uganda, when together with foreign student teachers at the University of Fukui from Pakistan, the Philippines, Botswana, Egypt, Malawi, Argentina, and Malaysia, gathered in the magnificent meeting room at the University of Fukui Attached School. The atmosphere in the room itself apparently pronounced "You are welcome to the University of Fukui." Our faces overwhelmingly beamed with anticipation for the long-awaited beginning of a six-day journey of the international professional development program organized by the University of Fukui in Japan.

The first day of our journey to this professional development was ignited by self-introductions, past, present, and future experiences of the participants which was termed the "3 seeds." My curiosity focused on what road had brought each participant into the present, what they are trying to achieve, and the challenges and goals they hope to implement in the near and far future. I was touched by the plight of girls faced in Pakistan as narrated by one of the foreign students at the University of Fukui. The challenge is global because the same is also experienced in Malawi, Philippines, and Egypt. However, the way the challenges are being solved differs from country to country and region to region. For instance, the provision of comfort rooms, compulsory school, and provision of transport for girls was one of the emerging solutions to the challenges girls face in Philippines. The provision of bursaries, sanitary pads, and changing rooms are some of the solutions to the challenges girls face in Malawi at Chiwamba C.D.S.S. What was also interesting to note was that once she goes back home, the Pakistani scholar vowed herself to be the champion for girls' education in her home country.

The participants had also a chance to observe lessons in various schools attached to the University of Fukui. The first was a visit to an attached elementary school where international students interacted with students in various ways like making flowers, flying kites, and playing cards. We were also exposed to Japanese foods, kimono, (a Japanese traditional dressing), and also important restaurants in Fukui Prefecture. From there, we observed an English lesson in Class 9B by Mr. Kawai. In all these schools, we learned what deep seeing, referred to as "MITORI," was all about. Students were exposed to deep learning in order to have prospective input from other students. In this case, students are made to discover for themselves, working together for their own advancements, while teachers do not teach them directly and act like facilitators or guides. These lessons were very impressive because the questions the teacher posed to students required answers that invited further deeper questions, unfolding the core concepts the students were learning. Here the teacher did not give the students answers directly, but provided answers to questions by other students, which in turn created gaps that students needed to think more deeply about. I loved the method and when I will encourage my fellow educators in Malawi to use the method, too. We also observed science lesson in Class 8B by Mr. Sasaki. There, we also learnt how students collaborated to see their own cells through microscopes. Students helped each other in order to come up with better results.　We were also taken into science room where the teacher briefed us about the uniquely rich science room which contained all necessary specimens and teaching materials. I was impressed with the way

a periodic table was constructed using simple and locally available examples of elements attached to it. I will encourage science teachers to do the same at my home school.

We also later visited Ago Junior High School in the outskirts of Fukui city, giving the participants more insights on collaborative teaching and learning. We learned about school initiatives and how they organize collaborative teaching and learning from Mr. Morita, the principal. We learned how Ago Junior High School organises communities of practices by collaborating with the community of teachers from the local elementary school and even with the education board in lesson studies, in order to create teachers and community collaboration that enhances sharing of ideas for students' learning. They work with the elementary school to share challenges in teaching and learning and how to solve them. This is impressive because in my home country, Malawi, none of these collaborations exist.

On the same day, we also learnt practice records and its importance. We also learnt about research groups that enhances students' learning, for instance: a case of community of inquiry into collaborative research for first-year middle school students in which students explored the sophisticated mechanism of plants to broaden view of nature. This is very encouraging, unlike our education system in Malawi where students start research when they are in the third year of tertiary education.

On the fourth day of our visit to the University of Fukui, we also learnt seven principles of cultivating communities of practice which included designing for evolution, opening dialogue between inside and outside perspectives, inviting different levels of participation, developing both public and private community spaces, focusing on value, combining familiarity and excitement, and creating a rhythm of the community.

The apex of the training came so quickly on the 5th and 6th of July. The 5th had a poster session where an educator from Yamaha music attracted my attention with his initiative used to enhance music knowledge in Japan and other far eastern countries. I couldn't help myself but think about my primary school music lessons which was there just to manage the class from making noise, not considering that music can be a future career to some of the students. Music arts is seriously only offered at tertiary which I think deprives learners of their choices at the primary or secondary level of education. This was a great lesson to me. Now as a teacher, I realize how important it is to balance academics with music. This cannot only help students develop skills such as teamwork and leadership, but also relieve students from the usual pressure of work from textbooks.

Following the poster session, there came time for a Symposium on lesson study presentations which involved educators from Nalikule Demonstration Secondary School and Chiwamba Community Day Secondary Schools as symposiasts. This session brought together educators from a dozen countries around the world. While some participants were physically present, many others joined online, making it a global gathering.

Nalikule Demonstration Secondary school is engaged in lesson study in collaboration with other six secondary schools within the Nalikule cluster and other two schools outside the cluster. Irene Zimba, the head teacher at Nalikule Demonstration Secondary School shared insights on the implementation of lesson study at her school focusing on background, positives of lesson study, challenges, and the future of lesson study at the school. I shared an example of a lesson study activity conducted at Chiwamba Community Day Secondary school in Chemistry, which also drew the attention of many participants, both physical and those online.

The participants indeed left the University of Fukui with rejuvenated insights in lesson study and new buds for growth of education globally. I hope the knowledge gained here will go a long way to further improve the performance of students in our respective countries and our schools. Those results have already started bearing good fruits. Therefore, I would like to have more support through trainings and sharing skills from the University of Fukui. I would also

like if the university increases the number of schools involved in lesson study and collaborative teaching and learning in my home country of Malawi. I am always available at dicksamu218@gmail.com if my contributions towards lesson study are needed in the next roundtable discussions and symposiums

Off to the Races?

福井工業大学 **Shana Wolff** (シャナ・ウォルフ)

During a race it is easy to see where the start and finish lines are, what the track looks like, and the distance to be covered. The rules are also clear and enforced with multiple judges. In life we can often think of completing a task as a race: there is a start, we know what we must do, and there is a finish. Once one race is done, we can see our results, apply what we learned from the previous race, train accurately, and start the next race to reach another goal. Teaching can sometimes seem structured like this, but rarely is it as simple as running a race.

In reality, teachers are always in the middle of multiple races, some with no finish line, and with unknown obstacles and changing rules. Another important aspect of the real-world "races" is that there is usually no award ceremony. Most of the time, no one reviews who ran the fastest, or who overcame the obstacles with the most grace, because we each have our own unique track and obstacles to face. The important part is continuing to move forward no matter what is placed in your way.

We can support our fellow teachers by seeing what is to come for them and offer advice on how to tackle it, but ultimately the decision about how to approach a given situation must come down to the teacher's individual discretion. While an onlooker might say swimming through a water obstacle is the fastest way, the runner might not be able to swim, or there could be a man-eating piranha in the water. It is up to the person running the race to listen to advice, judge their own abilities, size up the obstacles, and finally chart their own course ahead. The size of the audience cheering or helping the running along can also vary in size over time. At times it might feel like a full stadium of coaches, and sometimes it is just a few casual onlookers.

During my time in the UGSPDT at the University of Fukui I felt as if I had a stadium of people watching my progression as a teacher. I received a lot of advice and encouragement. After my graduation I feared that I would be losing a large support network that I had come to rely on for advice, and possibly more importantly for motivation. How would this shift affect my teaching practice? In reflecting on how I felt after joining the monthly UGSPDT seminars, the word "motivated" is the one that sticks out the most. I became impassioned hearing about the projects my fellow teachers worked toward and felt encouraged when discussing my teaching practice in return. I worried I would lose not just a large group of coaches helping me alone, but my cheering squad as well.

Since graduating from the University of Fukui, I have experienced a greater amount of silence when it comes to my teaching practice, but I have learned to find support in different ways. The kind of allyship I receive from my fellow teachers today is different from the support I received as a University of Fukui student. We share close working spaces and spend many hours every week sharing our lesson ideas and outcomes with each other. Sometimes it is in a cluster of three or four people, but more commonly it is just one or two. During these casual conversations we build our connections and share our lessons with each other. We are not coaches or cheerleaders on the sidelines - we are runners in the same race, pacing each other.

While this is more casual than having official lesson study meetings and observations, it is what fits best with a busy teaching schedule. In

sharing, we pick up new ideas for activities, lessons, and teaching approaches. Since we are constantly sharing our practice throughout a given week, we also have more up-to-date contact about how lessons are going. We are also able to process lessons that went well or poorly directly after they happen, allowing for a more detailed recollection of events. We teach a wide range of courses and students' ability levels.

Through seeing these various kinds of mutual support, I have come to see the many tasks I must complete as a teacher less as a solo race with the sideline support of my colleagues. I am beginning to see it as a relay race. We pass the baton back and forth as needed to support each other, and despite different strengths we create a more well-rounded team working together towards a more ongoing act of knowledge building.

Zone E 探究

交流から気づいた課題と成長

奈良市立一条高等学校 3年 **松本 結衣**

Zone Eに参加する機会をいただいた。学外でこのような活動に参加するのは初めてで、緊張や不安も大きかったが、多くの方と交流することができ、有意義な時間だったと感じている。

自分の探究を様々な方に見ていただいたポスターセッション(タイトル：カラダとココロで築く未来の健康)では、多くの助言や応援の言葉をいただいた。自分では気づけなかった視点や新しい考えを聞けたことは、今後の探究活動に活かしていける重要な材料となった。また、海外の方との交流もあり、実際に訪れることが難しい国々の現状について直接話を聞くことができた。これは私の探究の視野を広げるとともに、英語を使って行う質疑応答は貴重な経験にもなった。見てくださった方々がその場で私の探究テーマについて真剣に考え、質問やアドバイスをくださったことが特に印象に残っている。

さらに、ラウンドテーブルに参加して、自分の考えを言葉で表現する難しさを痛感した。頭の中では考えが浮かんでいても言葉にすることができず、積極的に会話に参加することができなかった。一方で、年齢も所属も異なる初対面の方々と意見を共有することで、普段の環境では気づけなかったことや、新しい物事の捉え方を知ることができた。今回、積極的に話すことと言語化する力が自分には不足していると気づいた。これは実際に参加してみなければ得られなかった気づきなので、今後は普段の生活の中でも積極的に行動し、形のない感情や考えを言葉にすることを普段から意識したい。

語り合いの価値

福井大学附属義務教育学校 後期課程 9 年 **栗田 創介**

私がこのラウンドテーブルに参加するのは今回が2回目です。前回は、司会やパネルダイアローグのファシリテータを務めましたが、緊張と不安で頭がいっぱいだったので、自分のグループでどんな語り合いが行われたのか、あまり覚えていません。しかし今回は、自分も語り合いの輪に入り、「挑戦」について深く考えることができました。

私のグループは年齢も住んでいる県もバラバラな5人で構成されていました。その語り合いからは、小学校の先生と生徒会役員の中学生が良いリーダーを目指す者として、同じ悩みを抱えていることがわか

りました。また、私と同じ中学 3 年生の方が、言ってくれた「失敗しても挑戦したことに変わりはない」という意見には、同じ中学生なのにこんなに深い考えを持っているんだと驚きを感じました。そして私も、これまでの経験をもとに「挑戦」について語ることができました。

今回の ZONE E が自分にとって充実した時間となった理由は、意見を本音で語り合えたことにあると思います。司会の方の優しい声かけのおかげで、お互いの意見を認め合い、理解を深めようとする温かい雰囲気が生まれました。私自身も、受け入れてもらえるという安心感から、意見を素直に伝えることができました。「人の意見を聞いて、自分の考えを深め、さらにそれを発信する」ということを経験できた貴重な時間でした。

この ZONE E では「誰もが挑戦できる学校はつくれるのか」という難しい課題に、参加した全員が真剣に向き合うことができたと思います。それはまさに立場の違う人との意見交換を楽しむという「挑戦」でした。またこのような機会があれば参加したいです。

探究の場に息づく豊かな「問い」文化

株式会社 教育と探求社　佐藤　瞬

私たち教育と探求社は、現実社会と連動して生きる力を育む探究学習プログラム「クエストエデュケーション」を全国の学校に提供しています。また 2023 年より福井県立高志高等学校・中学校にて教員向け「福井探究ワークショップ」を実施し、全 4 回でのべ 66 名の先生方と共に対話や実践を行いました。そのワークショップに参加くださった先生方から口々にラウンドテーブルの質の高さを共有いただいており、私たちもいつか参加したいと願っていた場にようやく参加することが叶いました。

今回の Zone E のテーマは「誰もが『挑戦』できる学校はつくれるのか？」。まずは私が挑戦したいことを共有し、挑戦を阻害する要因を踏まえる形で議論は進んでいきました。最後の問い「誰もが挑戦できる学校はつくれるのか？」は白熱した議論を生みました。“挑戦”という概念をどう捉えるか、“誰もが”にどこまで含めるかといった言葉を洗練させることで、希望が見えてくるプロセスを味わうことができました。私のグループでは、個人の挑戦と集団（学級や学校）の挑戦とがコンフリクトを起こしたらどうしたらいいのか？との問いに向き合い話し合いを行いました。

その中で最も印象深かったのは、教師・生徒・企業という従来の立場や垣根を超えて、参加者全員が対等な立場で議論を交わしていることでした。そこには上下関係はなく、一人ひとりが探究者として真摯に向き合う姿がありました。年齢や所属を問わず、それぞれの視点から発せられる意見が交錯し、新たな気づきを生み出していく様子は、まさに学びの形にふさわしいものだと感じました。

更に感銘を受けたのは、生徒たちの問いに対する感度の高さでした。議論の終盤、場から投げかけられた問いに対して、「この問いは少しジャンプしていますね」という発言が生徒からあったのです。この一言は、単に質問内容を受け取るだけでなく、問いの背景にある意図や文脈を深く読み取ろうとする姿勢の証左であると感じました。問いに対して一問一答的にすぐに答えを出すのではなく、問いを基にじっくりと思考を深めることが身体的・文化的に染みついていないと出てこない発想・発見だろうと感じています。

答えとは誰かが決めた外側にあるものではなく、この場にいるみんなで“応え”ていくもの、創っていくものである―。探究がしっかりと根付いていく背景にはそうした認識論的な土台があることを前提にしているのだと感じました。だからこそラウンドテーブルにおいても、参加者一人ひとりが自分なりの視点を持ち、主体的に発言できるのだと合点がいきました。

探究の文化が根付いたこの場での経験は、私たちにとっても大きな学びとなりました。私たちも、参加

された先生方と共に、本質的な学びを起こすための“応え“を創り上げてまいりたいと思います。

教育の改革と社会課題の解決も“相似形”

福井県地域探究コーディネーター　永野　龍典

今回のラウンドテーブルを通して私が強く感じたのは、「コレクティブ」「エージェンシー」「チェンジエージェント」「エコシステム」といった要素を理解し、それらを活用していくことが、教育現場だけでなく、あらゆる分野における課題解決へ重要な道筋となる、ということでした。

全体フォーラムで得られたこれらのキーワードは、『ソーシャルプロジェクトを成功に導く１２ステップ』（佐藤・広石_2018）で目にしていたものの、社会を持続可能な形へ変革する文脈で語られており、私は教育の視点で捉えてはいませんでした。しかし、今回のフォーラムで触れられたことにより、「学びの相似形」に同じく、教育改革と社会変革には共通の重要な要素となることが見えてきました。

※各キーワードに対する筆者の理解は以下

□コレクティブインパクト：異なるセクターの組織や人々が連携し、それぞれの強みを活かして協働することで、より大きな成果を生み出すこと □エージェンシー：自ら主体的に考え、行動し、良い状況を作り出していく姿勢 □チェンジエージェント：変革を推進する人物の存在 □エコシステム：相互に影響し合う生態系の意味から転じ、連携していく仕組みを構築すること

午後のセッションZone E（探究）では、中学生から社会人まで多様な立場の参加者との対話。話題の中心は「自分の望むことに対し心のブレーキがかかってしまい行動できない事柄を抽出。その要因を探り、打破するマインドセットを築くにはどうするか？」というものです。

私の参加した班では「他者の目や考えが気になる」という点がクローズアップされました。

この問いに対し、「その“他者”は想像上の存在なのではないか？」という問いかけから、「確かにそうかもしれない」と参加者からの共感がありました。一方で、それを乗り越えるには「思い切りも必要」との意見も出ました。更にそれに対して、「ブレーキを緩めるために、プレ挑戦をして自分を馴らしていくのはどうか」「今日のように、私生活に利害関係のない人たちの中で、それを見つけていくのはどうか」といった具体的な提案が飛び交いました。

これは、異なる立場の人々が、主体的な対話の中で、他者の視点や提案から新たな発想を得ようという共通姿勢のもと、次の一手を見出すというグループダイナミクスが発揮された場面であり、前述の４つの要素をミニマムな形で体験できた場面でした。

結果として、序盤で話題の波に乗れていなかった参加者も積極的に対話に関わるに至り、納得解を見つけられた充足感からか、閉会後の別れ際のあいさつは、絶好の波に乗れた晴れやかな表情でした。

翌日の実践報告においても、各話題に内在するエージェンシーの発揮と、チェンジエージェントとしての報告者が存在し、様々なバックグラウンドの聞き手達が理解者となることで、更なる意味づけと活動への勇気を受け取っていたことと思います。

これらより、教育改革と課題解決は“相似形”であり、成功へ近づく仕組みとしてこれらの要素を抑えていくことを、これからの自己の活動の推進力にして行こうと思いを新たにしました。

７月月間合同カンファレンス報告

思いのすり合わせ

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

滝波　もも加

７月の月間カンファレンスで前期を振り返り、課題を見出していく中で、「共に学び合い、高め合う集団形成の難しさ」を語り合う時間があった。グループのメンバーそれぞれが属する集団で、どのように同じ仲間と関わっていくのか、どのように組織を作っていくのかなど、人との関わりの中で生まれる難しさを本音で語り合い、その中で「思いをすり合わせることの大切さ」を見出すことができた。

対話の中で、「『コミュニティ』っていう言葉をみんな対話の中で使いすぎている」という発言があった。その言葉の意味を私はこのように受け取った。「集団形成を図る際に、『高め合う集団』、『実践コミュニティ』、『コミュニティ』など理論を初めに掴んで実践に活かそうとして、自分たちの集団をその理論に近づけることばかり意識し、目の前に存在する同じ仲間の意思疎通を怠ってしまっている。」要するに、「自分ひとりの価値観で理解を進めるのではなく、自分の思いと相手の思いをすり合わせる時間を大切にするべきだ」ということだろう。

大学院３年目になり、金曜カンファレンスの企画運営会議を外側からみる立場になり、人がどのように相手と信頼関係を築いてくのか、どのように集団がまとまっていくのかなど、去年よりも人との関わり方がよくみえるようになった。会議で「〇〇がしたい」「△△という問いを設定するのはどう？」と、それぞれが案を出す中で、私は心のどこかで違和感を抱いていた。その違和感は何か考えたところ、意見を発した相手がその結果に至るまでの過程で何を感じ、何を考えたのか、何を大切にしたいのかという「思い」を全体に共有していないことだった。それは、発言者と受け手のどちらが悪いということではなく、会議時間の制限などのあらゆる環境により無意識に省かれてしまっていることだと感じた。１つの結果的な案をホワイトボードや議事録を通して全体に共有し、それぞれがそれぞれの価値観でその言葉の意味を理解していく。しかし、それは自分自身の価値観で理解を進めているだけであり、発言者自身の価値観、思いを自分とすり合わせているわけではないことに気付いた。去年まで私は、会議中はこの方法が一番効率的だと思っており、相手の思いは会議後に聞こうと思っていたが、今年に入り、今までの自分は一番大切な「自分と相手の思いのすり合わせ」を怠っていたことに気付くことができた。

自分と相手、お互いの思いを伝え合い、それぞれが相手の思いを理解しようと努めることで、表面的な言葉の理解だけではなく、その言葉の背景に必ずある相手の思いも受け取った上でお互いの価値観をすり合わせていくことができる。この基礎・基本的なコミュニケーションをどれだけ丁寧に行うかで、理論上で述べられている理想的な集団になるかどうか、結果が変わってくると感じた。また、カンファレンスの対話の中で、「相手に対しての身勝手な思い込み」も時に集団形成の阻害要素になると感じた。その視点からも「思いをすり合わせていくこと」は大切にしていかなければならないなと改めて感じた。様々な立場の先生方のお話から、どの立場にあっても人との関わり方はとても難しいが、同時に最も重要なことだと学ぶことができた。この思いを、これからも忘れずにいたい。

予定外”を楽しめたら、ちょっと教師っぽいかも

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 **水野　敬太**

今年度も、昨年度に引き続き中藤小学校でインターン生として、学ばせていただいている。７月のカンファレンスでは理科の授業実践について語り、今一度実践を他の院生と共に振り返り、考えさせてもらう貴重な時間となった。

小学校６年生の理科「生き物どうしのかかわり」という単元で実践させていただいた。子どもにとって身近な生き物を題材に「食べる・食べられる」の関係性や、生き物同士のつながりに気付いていくプロセスを大切にしたいと考えていた。実践のねらいとして、この単元では、子どもたちが「命はつながっている」ということを、知識としてだけでなく、実感として捉えられるようにしたいと考えた。そのためには、単に食物連鎖という言葉や、生き物の食物連鎖の図を学ばせるのではなく、自分たちの手で観察し、気づき、問いをもつ過程が不可欠だと思った。その中で、想定外の出来事やうまくいかなかった活動も、学びの契機に転換していくような関わり・授業構成を意識した。理科という教科なので、子ども一人一人が仮説を自分事として持てるように、その仮説をどのような実験をすれば検証できるかということを考える活動を大事にした。

単元構成と授業の流れ（計６時間）

単元を貫く問い「生き物の命の源は何だろう？」

１，生き物が生きていくために必要なものって？生き物の養分の源は何？

２，水中の微生物（プランクトンを観察する）

３，ミジンコが生きるためには？

４，ミジンコは呼吸している？だとしたらその空気はどこから？

５，植物は日光によって酸素をだしているのだろうか？（実験）

６，実験の結果をもとに考察・まとめ

この流れで進んだ。

２時間目の活動後、「うまく見えない状態」の中で、私の中にふとした問いが生まれた。それが「メダカの稚魚はいたのに、なぜそのえさとなるミジンコがいないのだろう？」と。その時浮かんだ疑問をそのまま子どもに問いかけてみた。それまで微生物を観察しようとしていた理科室のなかに考える空気が広がった。ある児童は「メダカが全部食べちゃったんじゃない？」と発言し、別の児童は「微生物って小さいからこの顕微鏡では見えない」と言い、「あつくて死んじゃったんじゃない？」、「草の中に隠れているのかも」などなどいない理由を自分なりに仮説を立てて考え始めた。自分も「掬い方が悪かったかもしれない。下の方に微生物が住んでいるのかな」と自分なりの意見を出した。今、思うとここが「生き物は関係しあって生きていること」「環境によって生き物はかわる」というこの単元の核となる考えに自ら近づいていったのではないか。今まで授業をしてきたときは全ての問いが用意してあった。今回は授業中に初めてそこで感じた、思い付きともいえる問いを出した。何が自分をそうさせたのかを考えると、学びの捉え方の変化が見えてきた。今までであれば、子どもに問いを投げ、その答えがここで教えなければならないことと、合致しているかどうかという見方で子どもを見ていた。自分が引っ張らないと…や、自分が予想できなかったものが起きることが怖いという気持ちがあったと思う。できるだけ自由な授業をしたいと思っていても、その感情で自分が変わるのを止めていたように思える。変化として、教師も学び手として、目の前の出来事や子どもの反応、自分の中に湧き上がる疑問を大切にすることができ始めた瞬間だったのではないか。教師が授業中に「授業をコントロールする存在」から「授業に身をゆだね、問いを共にする存在」へと変化したかなと思う。子どもと同じ目線で「問い」を共有することができるようになり、教師が「今、ここ」にいるというリアクリティが増し、授業がより楽しめるようになった。

当初は、陸上の身近な植物に気付かせたあと、水中ではどうなのかという流れで授業を構成しようと考

えていた。しかし、実際に子どもの学びの道筋を丁寧に追うことで、「水中であれば酸素が目に見える形ででてくる」という現象を可視化できるという良さに気付かされた。そのような「児童が気付ける環境設定」を考えることが教材研究の一つ大切なポイントなのではないかと考える。水草が泡を出す動画を観察・動画で見せることは、植物のはたらきを単なる知識としてだけでなく、「実感をともなう仮説」として子どもの中に芽生えさせるうえで、大きな意味をもったのではないか。カンファレンスを通して授業は単に内容を理解するためのものではなく、子どもが「学びに出会える場」であるといいなという気持ちに気付けた。そのための教材研究・授業の中での瞬発力を磨いていきたい。

壁

学校改革マネジメントコース2年/福井市松本小学校　小林　千恵美

壁は常に私の前に立ちはだかる。越えられないからこそ挑むと思えば、立ち向かう価値も見いだせる。今年度４月、昨年度とはまた違う職員室で、やりがいのあるスタートとなった。新メンバーを迎え、新組織になり、子供達が進級や進学をした時のように私もまたマインドセットすることになった。

そもそも、教職大学院に通う目的は、悩みを語りながら自身の課題を明確にし、行く先に少しでも光を見出せるようにするためであった。昨年度に引き続き、温かい雰囲気で私の拙い語りに耳を傾けてくださる、グループを共にしたメンバーや教職大学院の先生方へ感謝の気持ちでこの原稿を書いている。

カンファレンスを重ね、日々の実践と往還することで少しずつ前進したと感じるのは、職員室メンバーとのつながりだ。昨年度、対話が必然となった経緯から、新メンバーとも話をしながら進めていくことが多かった。異動したての自分が、誰も知り合いのいないことで孤独感を抱いていたことや、システムの違いに戸惑ったことを思い出す。昨年度からの経緯も共有したいと思い、意図的に自分から声をかけることにした。

そして、授業、行事、委員会などの具体的な場面で、一人一人の児童の様子に目を向け、児童の話題を軸にコミュニケーションを取りながら進めてきた。その結果、自分の考えを少しずつ伝えたり、相手の気持ちを聞き出したりできるようになってきたと思う。また、今までのメンバーも、学年や担任配置が変わったことや、新たな校務分掌で悩みを抱えている場面があった。その悩みを聞くことで、つながりが強まったのではないかと思う。（私がそう思っているだけかもしれない。）

周りのメンバーとつながれていると感じるのは自分勝手な「思い込み」ではないか。その一つに、「授業研究」がある。６月になって校内の「一人一授業公開」はスタートしたものの、「何のために？誰のために？」という部分が共有されているのだろうか。研究テーマ「自ら学び、仲間とつながる」は児童にそれを求めるならば、まずは教師が「主体」と「協働」を目指す組織になろう！というコンセプトなのだが、授業づくりにわくわくする空気感にはなっていかない。

自分も授業を開き、見ていただくことにした。しかし、参観や語りに参加する人がいない状況で、自分の無力さを感じた。切り取りの授業でも、児童の積み上げが見える。できていない部分を見られるのは怖い。それでも見ていただき、逆にどうしたら積み上がるかを考え、そのための教材研究もする。省察しながら真剣に授業に向き合うことで、目指す教師や児童の姿が明らかになって、児童にも返っていくのだろうと思う。ラウンドテーブルで示されたOECDのティーチングコンパス。ラーニングコンパスに加わる所以も納得できる。いつ、どうやって教師が切り返し、刺激を与えながら学びをデザインするかが課題だ。日々満足いく授業ができないからこそ、授業に対する自分の気持ちが変わっていくのを実感する。

授業公開が、「特別なことをしなければいけない」という捉えから抜けて、「見てもらって学びにつなげる」という意識のもと行われるような学校文化を創りたい。また、児童支援の意図も含め、気軽にみんな

がお互いの授業に足を運び、学ぶ空気感をみんなでつくりたい。教職大学院は、それを成し遂げてこられた先輩たちの長期実践を読み、実際に話を聞き、勇気をもらえる場所になっている。

そして、カンファレンスでもたびたび耳にする「主体」と「協働」のワード。その裏には必ず「そのための時間をどう生み出すか」という課題がある。また、課題に向かい、対話しながら進めようとするモチベーションを持続するためにはどうしたらいいのか悩む。「忙しい」というただの多忙感を、少しでも「やりがい」に変えていけるような思考に変えていきたい。子供に学びの文脈をつけると同様に、教師集団にも「〜したい」「どうやって？」「何をすべき？」が生まれ、サイクルが回っていくことが理想なのはわかるが、一筋縄ではいかない。じっくりと、時間をかけて草の根的に壁を崩したい。

そうだ、壁は乗り越えるのではなく「崩す」感覚の方が合う。考え続けた先に、いつの間にか崩れている感覚。今までにも、いつの間にか崩れてきた壁があったと信じて前向きに進もう。壁は一人では崩せないから、一番大事なのは、お互いがリスペクトし合うことではないか。つながれていると自負せず、日々感謝の気持ちを伝えていこうと改めて思う。

思いや考えを整理し、課題を捉え直す

学校改革マネジメントコース２年/福井大学教育学部附属幼稚園　澁谷　喜代子

前期の展開を振り返り、課題をとらえ直す７月の合同カンファレンス。私は、学校改革マネジメントコース２年目ということもあり、昨年度も踏まえて振り返りを行った。

私は、長年保育士・保育教諭として勤めてきた地元・高浜町を２年間離れ、福井大学教育学部附属幼稚園に人事交流として配属させていただきながら、教職大学院で学ぶという経験をさせてもらっている。ご縁あってこのような道筋を作っていただき、２年交代でこれまで２人がこの道を繋ぎ、３番手のバトンを受け取ったのが私であった。前任２人はミドルリーダーコースを修了し、現在は高浜町の各保育所・こども園で、活気ある実践を展開している。私も前任２人のように、胸を張って高浜町に帰れるだろうか。ここで不安やプレッシャーを感じるのは、２人とは違って、私は学校改革マネジメントコースを受講しているということだ。初めは「自分が勝手にプレッシャーを感じているだけ」「もっと純粋に学びを得ていこう」などと考え、マネジメントの立場にとらわれまいとしてきた。しかし、自身のことを語る際に、この前置きを話さずしては始まらず、毎回のグループセッションで繰り返し語っていくなかで、自覚を持たざるを得なくなっている。

昨年度、附属幼稚園に赴任してすぐ、感動を覚えたカンファレンスや研究会での空気感。職員の語り合いが生き生きとしており楽しくて、互いを認め合える温かさもあり、安心感や居心地のよさもそこにはあった。この空気感を高浜町に持って帰りたいと心が動いた。そして、この空気感がどのようにして作られているのか、一員としてその場に居させてもらうなかで、じっくりと肌身で感じていきながら、掴み取っていきたいと考えた。高浜町にいるときには感じなかったこの空気感。「いったい何が違うのか。子どもが違うのか。組織が違うのか。その違いを見ていくと、課題となるものも見えてくる」と教職大学院の先生にも助言をいただいている。園や大学院でのこれまでの語り合いの中で、感じたことや考えたことの整理ができつつあり、今年度に入り、少しわかってきたことがある。附属幼稚園では、研究が軸にあり、常に研究主題についての共有がなされている。研究会で語ろうとするならば、子どもの姿をじっくりと見ることをする。じっくりと見ていると、語りたい子どもの姿に出会う。それを語る際には熱量も加わる。熱のこもった語りには魅力を感じ、聞いていて楽しく、自然と引き込まれてしまう。そういう循環が生まれているのだ。もっと聞きたい、もっと語りたい、そういうところが空気感に出ているのではないだろうか。

附属幼稚園は、そんなふうに子どもを軸とした語り合いが文化となっているということを、改めて感じ取ることができ、この７月のカンファレンスでも語った。そしてさらに思う。そこには語り合いたい仲間がいるということ。日頃から、職員同士の対話が自然とできており、互いに信頼できる存在にもなっていることは大きい。またしても、なぜそういう関係でいられるのかを考える。

マネジメント力を養わなければと考えるとき、附属幼稚園にはそれを備えた見習うべき先生方の姿があった。管理職自ら人手の足らないところへと率先して回り、そこにいる子どもたちと遊びをどんどん展開されていた。そのときに見取った子どもの姿を、事細かく伝えてくださったり、研究会でも語ってくださったりする。各教師の姿もよく見てくださっており、その動きの把握や理解のもと、さりげなく必要な場や、寄り添いを必要とする子どもの元に居てくださっていた。また、園務や担当作業などについても、負担が一人にのしかからないよういつも気を使われていた。本当によく見ておられ、よく気がつき、アンテナが素晴らしい。このような管理職の姿により、職員全体の一体感が支えられていると感じた。その中で、管理職に限らず、他各職員の姿も、モデルとさせてもらえるところがたくさんある。こうありたいと思える姿に、いろんな場面で出会うことができる。子どもを見るとき、一人ひとりの良さを認め、大事に思いながら関わるが、大人も同じで、一人ひとりの先生の良さを見ていくことは、マネジメントに繋がるのだと感じた。

素敵だと思えるこの組織に身を置きながら、自身の実践の支えとなっているところにも目を向け、組織に必要な大事なポイントを、しっかりと押さえていきたいと改めて感じているところである。

みなさんにとって「合同カンファレンス」は どのような存在ですか。

学校改革マネジメントコース2年/富山県高岡市立戸出西部小学校　**山口　武敏**

「合同カンファレンス」は“いい”。

エネルギーをもった仲間が集っているから、別のコースや校種の方でも、実践テーマが違っていても、協議が盛り上がる。また、職場の中であれば、距離があってなかなか話すことのできない立場の方でも、このカンファレンスだったら質問できるし、その立場なりの見方やご苦労を知ることができる。今回のカンファレンスも、参加してよかったと思えるものだった。

今回のカンファレンスは、①自身の研究と実践の現状についての協議と②夏の集中講座に向けて実践の先行事例を読んで考える練習が組まれていた。

前半のグループ①では、昨年度ご一緒させていただいた院生やファシリテーターの先生がメンバーに入っていて、自身の取組の紹介が終わると、その方々が「今日の話しぶりや表情を見ると、昨年度（のカンファレンス）での様子とちがって、前向きな感じがした」などと声をかけてくださった。ありがたいな、と思った。何より、昨年度、たった１日のカンファレンスで一緒に過ごしただけのわたしのことを覚えていてくださっていた。さらに、わたしの昨年度の姿とのちがいに言及してくださったことで、自分自身で振り返ったときとはまたちがった感覚でわたし自身の今を見つめることができた。実際、今のわたしは４月から職場が変わりその組織体制に疲れきっていたことや、昨年度までのように一定の権限をもっていない状況で子供たちと組織の充実のために何とか生きる道を探そうとしていたところであった。そのようなわたしの状況がＺＯＯＭ越しに伝わっていたかと思うと、メンバーの先生方の眼力に敬服するとともに、わたしの今の状態を受け止めてくださったことへの感謝の気持ちが湧き上がった。

今の職場や昨年度までの職場でこのような心境になったことはあるだろうか。いや、毎日一緒に働いて

いるメンバーとの間にこうした感情が生じないとしたら、どうなのか。そのようななんとも言えない思いを抱きながら、午前の活動を終えた。

後半のグループ②は、午前中に続いて昨年度ご一緒させていただいた院生の他、コースも学年も同じだが初めての方がメンバーで、これからどのような時間になるだろうかと、メンバー表を見ながら、思いを巡らしていた。午後は午前中と異なり、推奨された実践事例から自分の読みたいものを選び、その概要と所感を伝え合う形式であった。わたしは、４つの実践事例の中から２つに絞った後どちらを読むか迷ったが、結局、自身の実践テーマと方向性のよく似ている事例があったのでそれに決めた。20 分ほど一人で読んだ後、協議が始まった。わたしたちは２人ずつ同じ事例を読んでいたようで、協議がどう展開するか、自身の発表以上に注目しながら、メンバーの話を聞いた。一人、二人と話を聞きながら、「やはりそうか」という思いになった。何が「やはり」なのかだったのかというと、事例の読み方には読み手自身が今置かれている状況や読み手の価値観が表れるということである。同じ事例を読んでもその所感は一人一人ちがうことは当然である。しかし、概要はどうか。「概要」は読んだ事例の大まかな要点であり、この「概要」は読み手によって変わらない。しかし、わたしと同じ事例を読んだ方が話した「概要」はわたしと大体同じだったが、異なる部分もあった。別の事例を読んだお二方も、わたしたちと同じようだった。さらに、事例を読んだ所感を聞いても、読み手の人となりが表れる。昨年度のカンファレンスでもそうだったが、読んだ事例に対する意見を話される方から、読んだ事例と自分の実践を重ねて自分の取組を省みたり、方向付けを図ろうとしたりする方、概要はほどほどに自分の実践について熱心に語る方まで、実にさまざまである。どれだけ事実を伝えようとしても、どれだけ事実に対する考えを言おうとしても、その内容には読み手の視点が映って見える。わたしは、これが本教職大学院のカンファレンスの懐の広さだと捉えている。職場であれば、テーマの結論を得ることがゴールになるが、ここのカンファレンスは一つの結論を得ることがゴールにはならない。協議の目的が一つの結論を得るものであれば、発言が論点から外れていると話が進まない。では、このカンファレンスの目的は何か。新年度初めのカンファレンスでこの教職大学院の主催である先生が仰るように、ここでのカンファレンスをきっかけにしてメンバーの属する組織やコミュニティにエネルギーを吹き込むことがこのカンファレンスのゴールなのではないか、と実感する。

だとすると、学校現場で行われる職員会議はどうあればよいか。学校の方針を伝達するだけの場になっていないか。だから、この教職大学院のカンファレンスを体感した院生の多くが、自身の職場に「ここの教職大学院のようなカンファレンスを開きたい」と熱望するのではないか。

今回、カンファレンスについて原稿を書く機会をいただき、改めて本教職大学院のカンファレンスの特徴を確認するとともに、今の学校現場にエネルギーを吹き込むヒントを得た気がする。今回のカンファレンスを通して見えた学校現場パワーアップのヒントは、「同僚の仕事ぶりや様子に目を向ける」ことと、「職員室を働くエネルギーが生まれる出発の場所にする」ことではないかと考える。今の職場にカンファレンスという環境をつくることができればなおいいと思うが、今ある環境を生かして、組織やそこに集まるメンバーを支えたり、やる気を起こしたりすることができるのではないかと考える。

わたしにとって本教職大学院のカンファレンスでの出会いは自身の実践の大切な支えとなっている。この場を借りて、同じグループでご一緒させていただいた院生のみなさん、ファシリテーターの先生方に感謝いたします。

「合同カンファレンス」は、やはり、“いい”。

事務連絡

教職への扉をひらく
長期インターンシップ

福井大学連合教職大学院

実践力ある 21 世紀の教師を育てる
教職大学院の先端モデル

授業研究・教職専門性開発コース
オープンキャンパス（オンライン）

2025 年 8 月 20 日(水)　13:00～15:00

ご希望の方は右記 QR コードから申し込み下さい。
https://forms.gle/9XbWGsjiT6bzviJ16

◆当日の予定
13:00 全体説明
・カリキュラムの特徴
・免許取得について
・その他
14:00 現役院生との
座談会

学校で 1 年間週 2 ～ 3 日 実践経験を重ねる。＜インターンシップ＞
- **総体を学ぶ**　授業づくり・生活指導をはじめ教職の総体を学ぶ
- **仲間と学ぶ**　仲間や先輩と語り合う週間カンファレンス
- **充実した支援**　学校の現職教師と大学院の教員がチームで支えます

実践と理論のサイクルをつくる。＜実践研究＞
学校での経験をとらえ返し、検討し、問い進める実践研究

教職への歩みを支える。＜就学支援の充実＞
教職大学院修了後の翌年度から正規教員として採用された場合、日本学生支援機構の第一種奨学金の貸与者は返還免除となります。
詳細は下記リンク・右記 QR コードからご参照下さい。
https://www.jasso.go.jp/shogakukin/saiyochu/gyosekimenjo/kyouinmenjo.html

入試情報の詳細は、左記 QR コード・下記リンクからご覧ください。
https://www.u-fukui.ac.jp/user_admission/examination/essential_point/info_grad/

連絡先
福井大学連合教職開発研究科（連合教職大学院）
〒910-8507 福井県福井市文京３丁目９－１
TEL.& Fax. 0776-27-9872

Schedule

【夏期集中講座】

7/26,27,28	Sat. Sun. Mon.	Cycle1a
7/29,30,31	Tue. Wed. Thu.	Cycle1b
8/2,3,4	Sat. Sun. Mon.	Cycle2a
8/5,6,7	Tue. Wed. Thu.	Cycle2b
8/9,10,11	Sat. Sun. Mon.	Cycle3a
8/18,19,20	Mon. Tue. Wed.	Cycle3b
9/13,14,15	Sat. Sun. Mon.	Cycle3c（予備日）

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

【 編集後記 】「実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Summer Sessions」が終了し、現在は夏期集中講座が開催されています。
この期間を通じて、皆さまそれぞれがこれまでの実践を振り返りながら、今後の教育への向き合い方や展望を新たにされていることと思います。
　今年の夏も、全国的に記録的な猛暑が続いております。どうぞ体調には十分ご留意いただき、これまで挑戦したかったことにじっくりと取り組んだり、読書したり、最新の講演会に足を運んだりと、心身のリフレッシュを図り、次のステップへの活力をしっかりと蓄えていただければ幸いです。 (N)

教職大学院 Newsletter No.198

2025.8.20 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科教職大学院
Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp